金澤詩人

2020金澤詩人賞発表

第十七号　2021

目次

◆二〇二〇年度金澤詩人賞
京都府　吉川太郎氏　「門司港駅」　4
◆予選通過作品
川西進介　Los Angeles　9
北村千絵　Singapore　11
エリアス・アンチューンズ　ブラジル　14
メーシリング順子　France　15
ＲＡＹ９　神奈川県　17
夜鵲　兵庫県　18
江口久路　京都府　19
藤野慶太　兵庫県　23
ごぜん　東京都　23
レもん　神奈川県　24
山口ウサギ　大阪府　28
白旗奈緒子　東京都　28
中原賢治　岐阜県　29
小林晴菜　静岡県　41
玉井秀男　福岡県　43
葵　花　東京都　44
辰己尚平　大阪府　46
落知之仁美　神奈川県　47
初霜若葉　京都府　50
市井の人々　大阪府　51
ミシマ・ママミ未　神奈川県　52
吉居侑子　神奈川県　56
ずんやまずん子　沖縄県　59
月零　山梨県　63
星野瑞紀　石川県　66
中川究矢　東京都　67
アジア織子　熊本県　68
故永しほる　北海道　71
Lin　群馬県　73
元澤一樹　沖縄県　76
今村崇人　東京都　80

水庭真美　茨城県　８１
芦野夕狩　愛知県　８２
黒田菜月　茨城県　８３
高倉麻耶　愛知県　８５
七　まどか　千葉県　８６
秋雨一也　沖縄県　８７
福島秋樹　東京都　８８
オノカオル　東京都　８９
クロダセンソ　北海道　９０
浜　千鳥　愛知県　９１
中内亮玄　福井県　９２
小林　新潟県　９３
時北糸菫　宮城県　９７
しいな育香　京都府　１００
幸あゆみ　大分県　１０２
海月透子　富山県　１０６
井中冬夜　福井県　１１０
NARU　鹿児島県　１１７
ke sun4　三重県　１２０
夏月ビビ　東京都　１２３
コウ　和歌山県　１２７
さらゆい　三重県　１３０
秦鉄夫　福井県　１３３
つよきち　東京都　１３４
田河　蛍　東京都　１４１
青柳じろう　京都府　１４６
林やは　愛知県　１４７
黒川玄冬　東京都　１４９
張佳晏　東京都　１５１
松山尚紀　埼玉県　１５２
◆招待席　城本　百　京都府　１６０
◆ニューヨーク　―コロナ・パンデミック下の愛と死―　１６１
阿部静雄　ニューヨーク

二〇二〇年度金澤詩人賞

京都府　吉川太郎氏　「門司港駅」

―選評―

二〇二〇年度は二〇四九篇の応募がありました。

圧倒的に十代、二十代の作品で占められています。柔かい感性で紡ぐ詩の新鮮さに触れると、詩は青春のものと言いたくなります。

応募作品を読んでいく中で、きらりと光る作品に出会うと、大げさに言えば生きる歓びを感じます。それほど詩には力があります。だから詩からなかなか離れられません。詩の選考作業は決して楽なものではありませんが、力ある作品は読んですぐ分かるものです。詩は頭で考えるものではありません。直観力です。

吉川太郎氏の「門司港駅」は立体的で、情念と抒情と、短歌を詠むがごとく、畳み込んでくる迫力があり、初めから終わりまで緊張の糸が緩んでいません。

難解な詩であっても、暴力的な詩であっても、そこに愛が感じられれば直感的に訴えてくるものです。けれど難解な詩の中には人格が韜晦な表現によって隠されている場合があります。そのような詩は暗いです。技巧に走り、単純で素朴な人間の質が歪められている作品には吐き気に近いものを感じます。

どれを最終的に選ぶかは、二〇一九年度でも書きましたが、作品群の中で最も訴えてくる力のあるものを選びます。そこには骨太の人格、倫理が貫徹しています。隠しえない光が見えるものです。

「門司港駅」では、母親を単純に良き人と描くのではなく、裏も表も描き切り、人間としての母親を彫琢しています。それが感動を呼びます。読み終わって泪せずにはおれません。「よき精霊になりたい」、あゝ何という母との邂逅でしょうか。

ニューヨークから二〇一八年度金澤詩人賞受賞者阿部静雄氏の寄稿をいただきました。「ニューヨーク　―コロナ・パンデミック下の愛と死―」というタイトルはこちらで付けたものです。

阿部氏の書かれた時は七十五歳ですが、若く人間的な情念を喪わずに詩作されることは見事と言わざるを得ません。そして新型コロナウイルスに最も直撃されているニューヨークからの報告ですから、歴史的な文献になるでしょう。

予選通過作品も優れたものばかりです。読む楽しみをどうぞお味わい下さい。今の人々がどういう思いで生きているかを知り得る宝庫と言えると存じます。

（金澤詩人倶楽部代表　近岡　礼）

吉川太郎氏　受賞の言葉

京都府京都市に、戦後に生まれ、育った七十代です。
詩歌を真面目につくり始めたのは六十歳を超えてからです。
当初は俳句と短歌を思いつくままメモするだけでしたが、芭蕉・蕪村の俳文、子規の評論に出会って、詩にも興味がわいてきました。
今回、賞をいただいた作品は、母の死をきっかけに、自分の七十年余りの時間を振り返った、言わば残念賞のような半生を描いたモノローグです。でもしかし、まだ七十代だ、あと二十年はがんばろう、と、今も毎日五作を目標にパソコンに向かっています。
金澤詩人賞に選んでいただき、まことにありがとうございます。

【門司港駅】

朝の門司港駅に労働者があふれる。母と俺の故郷だ。

※

サナギの中で不思議な化学反応が進んで命が生まれた。
地球と太陽がいちばん近い日に俺は生まれたと母が言う。
両手を離して自転車に乗れた時、世界は大きく広がった。
空は青く、海は紺色にうねり、十五の俺はたった一人だ。
肌に触れる空気が帯電していた十八歳の五月の朝。
あの小さな流れに笹舟で乗り出したのは昨日のことだ。
錬金術は不可能だと言う奴はゴミ溜めで一生を送れ。

※

メガネを変えたらこのろくでもない世界がよく見えるようになった。
青いカメレオンには世の中は青く見えている。青に合わせよう。
床屋のねじり棒は永遠に回り続けるが何も変わらない。
あらゆる地平を越えようとした十九歳の野望は消えてしまった。
ラストオーダーだ、バーはもう閉まる。夜明の朝飯をどこで食おう。
みんな壁の落書きさ、描(か)きなぐられて混沌だけが残っている。
歴史。青年は理解せず、老人は後悔し、英雄は笑う。
海よ！　往ったり来たりお前はいったい誰のため悩んでいるのか。
酒場の長椅子は玉座、盃(さかずき)は王冠、さんざめきこそは人生だ。
葉巻に名を残したヴァスコ・ダ・ガマ。潮風と未開の香りがする。

※

母の介護のために晩酌をやめた。夜ふけて万葉集を読む。
母が入院して伸び放題のウメの木にキジバトが巣を作る。
しばらく行かない川岸のスイセンはもう咲いているかと母が問う。
鳥が鳴いているねと目を閉じたままで病室の母が言う。春だ。
倒れてもう半年過ぎたねと母が言う。本当は一年過ぎた。
ねねさんが好きなのよとベッドの母が言う。母の青春を思う。
実家を建てた棟梁は戦死したと母は泣く。初恋の人か？

川風に流されて飛ぶオハグロトンボは本当に涼しそうだと母が言う。
お祭りのサバ寿司を食べたい食べたい、お祭りはまだかと母は聞く。
髪を切って鏡を見たいと頼む母に小さな手鏡を持っていく。
キンモクセイの花を両手一杯に集め母の胸元に置く。
入院の母を宛名に大丸からカタログが届く。資本主義なのか。
病院のベッドの母が何か歌っている。英語の子守り歌だ。
入れ歯をはずした母の寝顔が生まれたての赤ん坊のようだ。

※

少し回復した母の足の爪をつむ。しわだらけの白い足だ。
車椅子の母に向かい、飼い犬がほえながら尾を振る。
奇跡的に回復した母が伝い歩きの練習をしている。
一進一退をくり返して母は少しずつ弱っていくのだ。
車椅子の母とすれ違う若い女性はブーツの音をたてて行く。
暖かくなれば歩く練習をすると言って母は窓の梅をながめる。
元気になった母は旦那寺の坊さんの悪口をふともらす。
歩き始めた子供のように回復中の母は目を離せない。

※

母の病状を説明する看護婦のやや厚い唇を見る。
もうすぐ死ぬんだねと言う母に、そんなことはないと嘘をつき、泣く。
死の間際にわがままを言う老いた母よ、とがめる我を許したまえ。
最期を予感した母は突然取り乱し、仕方がない仕方がないとくり返す。
母の形見の毛糸の手袋に穴があいた。捨てるときが来たか。

※

親知らずが金づちで打たれた指のように痛んで、母が死んだ。
風のように雲のように大海原の波のように死は自由だ。
重い玄武岩の墓石の下で死は永遠に存在する。
極楽大往生のお母さんでしたねと看護婦にほめられた。
母のために飼った犬は告別式のにぎわいを縁の下で聞いている。
前夜からの雨が出棺時にはあがり、骨(こつ)が戻ってまた降り出した。
真っ赤なホオズキを銀色の大皿に盛り、母の仏前に供えた。

令和のサクラと母が名づけた桜が、二年めの今年も満開だ。
母の使っていたぐらつく片手鍋で俺はまたベーコンを焼く。
レニ・リーフェンシュタールの名前を母は知っていた。なぜかは聞かなかった。
母のミシンの引き出しに故郷(ふるさと)の土産物屋のマッチがあった。
母の形見のフランス人形が売れた。旅に出よう。

※

東京スカイツリーにケイタイかざす田舎者。我、田舎へ帰りたし。

※

母が死んで俺は全宇宙より孤独だ。よき精霊になりたい。

予選通過作品

―海外から―

◆川西進介　Los Angeles

【望郷のうた】

とおい異国でおもう日本は
ここと違って、平和に見える

とおい異国でおもう日本は
ここと違って、美しく見える

とおい異国でおもう日本は
ここと違って、食べ物がどれもおいしい

とおい異国でおもう日本は
ここと違って、物が溢れて豊かだ　ここには日本のコンビニのような便利なところはないから

とおい異国でおもう日本は
四季があって綺麗だ

とおい異国でおもう日本は
ここと比べて、コロナの感染者も少なく、さすがだ　ここでは毎日千人以上の人が亡くなっている　いったい政府は何をしている

とおい異国でおもう日本は
宗教の対立がなく、羨ましい

とおい異国でおもう日本は
肌の色の違いで殺し合うこともなく、羨ましい

とおい異国でおもう日本は

二つの政党間で、汚い争いもなく、羨ましい

日本よ
すべてが羨ましい

なぜこんな所に来てしまったのか

夢があった

あこがれがあった

違う言語が耳に心地よかった　使ってみたかった

新しい人に出会ってみたかった

しかし今、おもう
日本よ　お前が恋しい
心の底から、恋しい

とおい異国から、母へ
今までありがとう
またあなたの声が聞きたい
またあなたの作ってくれたものを食べたい

とおい異国から、父へ
今までありがとう

とおい異国から、弟へ
また語りあおう

とおい異国から、友へ
元気でやっているか

とおい異国から、亡くなった祖父へ
一度も見舞えず、申し訳ない

とおい異国から、亡くなった柴犬のクーへ

もう一度会って、お前を撫でたかった

とおい異国でおもう日本よ
いつか、帰りたい
はやく、帰りたい

会いたい　会いたい

いま俺は泣いている

とおい異国でおもう
日本の人よ、噛み締めてほしい
あなたがどれだけ素晴らしい国に住んでいるか
どれだけ恵まれているか
どれだけ幸運か

日本よ、私が帰るまで、どうかそのまま変わらず
うつくしい国であり続けてくれ

待っていておくれ
待っていておくれ

◆北村千絵　Singapore

【夕闇の中で】
「あと十二年よ。十二年もしたら子どもたちはみんな大きくなって私の元を離れてしまうわ。その時、私の心にはぽっかりと穴があくに違いない。
そしてその時、私はどうすればいいのかわからない。途方に暮れるのよ。きっと。あなたはどうするの?どうやってその時を迎えるの?」
彼女はとても真剣なまなざしで私をまっすぐ見つめそう聞いた
「そうね。あと十年から十二年。でも私はその時、娘たちを喜んで手放してあげたいわ。それは私にとっても、彼女たちにとってもとても大切で必要なこと。
娘たちが巣立ったら私は自分の時間を思い切り使うと思うわ。今までの分を取り戻すように。したいことをして人生を子ども抜きでエンジョイできるようになっていたいわ。」
彼女はまるい目をさらにまるくして驚いて私の言葉に耳を傾けている

「そうね。そうしなくちゃいけないのよね。」
夕焼けが空を赤く染める
海の向こうに陽が落ちようとしている
ここは海辺にある公園
「夕暮れ時がとてもきれいだから」と彼女に誘われてやって来た
金曜日の夕方
子どもたちは楽しそうに砂浜で歓声をあげて遊んでいる
なんて幼い娘たち
なんてかわいい娘たち
いつか私の元を去っていくのはとても悲しいけれど、自分がそうやって親元を離れてきたように、私も彼女たちを放してあげなければいけない
だけどこの瞬間をずっとずっと胸に焼き付けておこう
娘たちの小さな後ろ姿
はじけるような笑顔
夕闇と共に少しずつ濃くなってゆく影
海風になびく娘たちの茶色いきれいな髪
何もかも絵になるように美しくて
そしてその中で私の娘たちへの愛はどんどん大きくなる
愛しているから手放すものもたくさんある
でも私の元をいつか去って行っても
あなたたちはいつも私の宝物
いくつになっても
いくら歳月が流れても

【友達が恋しい】
友達が恋しい
友達がいた
異国で暮らすようになって仲良しの友達ができた
でも皆他国へ引っ越してしまった
ここにいたら仕方のないこと
でも素直になんでも話せる、聞くことができる、聞いてくれるそんな友達が恋しい、今
知り合いはたくさんいる
そして皆私を友達と呼んでくれる
私もその人びとを誰かに紹介する時には、きっと私の友人ですというだろう
でも本当は友人なんかじゃない
表面だけの友達

友達ぶったうわべだけの知り合い
じぶんのことはたくさん話す、それも自慢げに
謙虚っぽく話すけどよく聞いてみるとそれは全部自分の自慢話
そしておざなりに私のことを聞いてくれるけれど実は全く聞いてなくて、相槌も上の空
だったら初めから聞いてくれなくていい
話すことなんてたわいもないことだし
別にその人の近況を知ったところでどうってこともないし
別に知りたいとも思わないし
私には全く関係ないし
本物の友情はこんなうわべだけのものじゃない
いつもそこにいてくれる
安心できる話し相手
悲しい時や困った時に必ずそこにいつもいる、それが本当の友情
私にもそういう友人は数名いる
だけど今そばにいない
それが私をより悲しくさせる
特にうわべだけの友人と呼ぶ人に会った翌日は特にそう感じるのだ
友達が恋しい
小さい頃から一緒だった友達
何をするにも一緒だった
そして大人になってからもずっと遊んだり話したり泣いたり笑ったり怒ったりしてきた
どんなこともわかってくれて理解しあえて
恋に落ちた時のドキドキやワクワク
失恋した時の心の痛み
何でもわかりあえる友達
小さい頃からの幼馴染が恋しい
学校の話よりお互いの彼/彼女のはなしをした
紹介したりされたり
失恋した時はお互いに慰めて
ユーミンの歌を聴きながら、「大丈夫だよ、またいい出会いがあるよ。」なんて励ましあって
ご飯を食べに行ったり合コンしたり
楽しかったあの頃
もうあの頃には戻れないけれどね
私が悲しい時電話をすると、どうしたんだ?と聞いてくれた
そして会いたいと言えば車ですぐ駆けつけてくれた
もう戻れないけれどね
一緒にいて心が楽になれる、自分を作らなくていい気持ちの良い友達が恋しい

会いに行けないけれど会いたい
今すぐに

◆エリアス・アンチューンズ　ブラジル

【その他】
もう一人は支えられた兄弟です
　　十字架上;
もう一つは愛の荷物です
そして、歌に対する夢
　　奈落の底を作る。
もう1つは正味時間
右手、肌の太陽
　　真実;
もう一つは鏡です
狩猟犬、
青い鳥の心
窓から飛び立つ。
もう一つは橋です
峡谷の上;
ランプが点灯
　　暗い家で。
雨の下の麦畑;
果物と果実でいっぱいの庭。
パスがあったときに名前のない通り
　　元に戻す;
もう一つはあなた自身、あなたの夢、そして
その歴史、永遠への使命。

O OUTRO

Elias Antunes

O outro é o irmão amparado
　　na cruz;

o outro é a bagagem de amor
e de sonho contra a canção
do abismo;
o outro é o tempo líquido na
mão direita, o sol na pele
da verdade;
o outro é o espelho,
os cães caçando,
o coração do pássaro azul
voando pela janela;
o outro é a ponte
sobre o desfiladeiro;
a lâmpada acesa
na casa escura;
o campo de trigo sob a chuva;
o quintal cheio de pássaros e frutos;
uma rua sem nome, quando os caminhos foram
desfeitos;
o outro é você mesmo, seu sonho e
sua história, sua vocação para a eternidade.

◆メーシリング順子　France

【蟻の行進】

タッタカター タッタカター
トランペットが鳴り響き
堅牢なハタラキ蟻たちが
一列になってやってくる

タッタカター タッタカター
脇でおどけるキリギリス
黒く勇ましい蟻たちは
わき目もふらずに突き進む

「こないだ死んだくうちゃんの
ドッグフードを奪うんだ！」
「トマト畑のネズミ捕りの
ピーナツバターを狙うんだ！」

タッタカター　タッタカター
多産な女王は優雅に微笑み
黒くそびえる城の中
みだらな行為に
身をまかす

タッタカター タッタカター
すべては女王蟻のため
酸っぱいギ酸を武器にして
カエルに挑んだ同朋の
最後の叫びが耳を刺す

「ああ、母さん私(あたし)だって
一度は恋がしたかった」
「ああ、父さん私(あたし)だって
寄り道なんかもしたかった」

キリギリスが弾くバヨリンが
もうすぐ秋だと告げている
夏の終わりの蟻の行進

・・

―海外から、以上―

◆ＲＡＹ９　神奈川県

【帆風】

あんたはどんな男だろ
雨水に汚水にまみれたお人？
情けない泣きっ面の、歯の黄色い男が好き
あそこがしょんべん臭くて泣けてくる
あんたの哀しみが匂ってくる
私はホゾを噛む。そしらぬ顔で
三十八口径の窓からの連絡船
引き続き晴天なり。
こめかみが冷たいが生涯を共にしよう。

3.5秒前、予感。
きつく、抱いていてね。

2.2秒前、　遠雷。
キツイ、フィードバックする言葉。

1.5秒前、　道程。
熱い、二人の夏の夜。

0.5秒前、　郷愁。
硬い、わたしの乳房とあんたのペニス。

0.3秒前、　聴衆。
重い、雑踏の中のあの女達。

0.2秒前、　踏襲。
優しい、　母のくれた愛撫を。

0.1秒前、　無音。

白い、　針金の様な私と
　　棒っきれのようなクズ。

。

。
。
。
。

曇天

◆夜鵲　兵庫県

【わたあめ】
うわあああああん

うわあああああん
うわあああああああああん
うわあああああああああああん
うわあああああああああああああん
うわあああああああああああああああん
うわあああああああああああああああああん
うわあああああああああああああああああああん
うわあああああああああああああああああああああん
うわあああああああああああああああああああああああ
うわあああああああああああああああああああああああああ
うわあああああああああああああああああああああああああああ
うわあああああああああああああああああああああああああああああ
うわあああああああああああああああああああああああああああああああ
うわあああああああああああああああああああああああああああああああああ
うわあああああああああああああああああああああああああああああああああああ
うわあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ
うわあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああん

うわあああああああああん
うわあああああん
うわあああん
うわん
うわん
ぽっ

◆江口久路　京都府

【シニタイツブヤキ入眠儀式】
人間は
殺し合うために生まれてきたんだきっと
そう思うと
ホッとできる
「ゆがんでる」という人もいるけど
標準を最低レベルにしておけば
あとがラクだから
人間を信じてしまうと
ツライことが多すぎるから
だからもう誰も
信じないことにしました
自分も信じない

自分も最低レベル
みんなサイテーだから
ハラも立たない
うらみも持たない
うらやましくもない
それでいいんだ
それで安心できる

おかあさんはもう何人も殺してると思うナ
かおもおなかもブヨブヨの
キタナイだけの
アブラのかたまり
おとうさんは
くさった内臓の…かたまり…じゃなくて
なんだろ、
ぐだぐだの寄せ集め？
そんなカンジ
タカシは
あ、
タカシはおとうとだけど
そう。
あれはただ「あはれ」な奴
ホントにそう
たぶんアイツは
異星だから
あ、異性か
まあどっちもおんなじ
だからクズ！
はっきり言って
家族はドーデモイイや
おんなじ血で
いや。血なんて関係ない
ああ…でもあるかやっぱり
アタシもそうだから
くさってキタナイあはれな奴だからな…
もうドーショーモナイよ
息が詰まるんだよ空気悪すぎだよ家ン中

飽和と涸渇と過剰が同時に
いまアタシの中で起こってるそんな感じ

外に出る時はいつも
大きなフード頭からすっぽりかぶって
その隙間からアタシ世の中をミテル
他人をミテル
ああ、
他人って何ダロね
ジブンと違うヒト？
まあそうだけど…
ほんとキモイね、他人。
ヤ、そんなことない
自分がいちばんキモイか
そうダヨな、やっぱ
人間は汚物だ
オブツ。クソブクロ。
この世は汚物だらけで
アタシはその代表
挨拶がわりにつぶやく「死ネ」は
シニタイの裏顔だヨきっと
だからアタシ死のうと思う
ジブンで
他人に殺されるよかマシだから
でも結局それって
他人に殺されてんのかなぁ…ワカンナイや

いのちの尊厳？
確かに。
たしかにそうなんだけど、わかるけど
こんな考え健全じゃないって…
じゃ聞くけど
ケンゼンって何？
幻想だよネそんなのソモソモ
さげすみとねたみとハイジョしかなくって
貼りつけた笑顔むけあってる世界
そんな環境どうやって行きぬくの

やっぱ自分で自分を護りきれないよアタシ
そう、ツラすぎ
つらすぎるから、だから
全部あきらめようと思う
なにを？
だから何もかもだよ

許してください。
って誰に言ってる？
親？
ありえん
神サマ？
フフ…いるかそんなの
そっか、ジブンか…自分にか？
自分に許しを乞うって、
いのちってムズイね
自分のモンなのにちっとも自由にならん
もおどーでもイイや
考えたくない
何も
どっか行きたい
人間のいないとこ
ホント苦しいよ…
…苦しすぎるよ…

呪文のようにそうつぶやいて
きょう一日をアタシはねむる
それがアタシの一生。
…オヤスミ…
それは「サヨナラ」でもかまわない
いっそ目が覚めなきゃいいだけだから
きっとそっちが楽だから
…オヤスミ、アタシ。
…サヨナラ、アタシ…

◆藤野慶太　兵庫県

【破片】

かつて、私は一つの塊であった。私は私という大きな塊であった。

私は、私でしかなかった。私は私として、確固と世界に存在し、私は私を疑いようがなかった。

すなわち、青春と呼ばれる時代である。

けれども、私は私では、いつまでもいられなかった。いつか、遅かれ早かれ、私は砕かれる道行きであった。

私を砕くはただ一つ、恋である。砕かれぬ恋は、恋とは呼べぬ。「私」なる、一つの大きな塊は、恋によって、木っ端微塵に砕かれた。

砕かれた私はどこへ行く。破片となり世界のほうぼうへ散らばる。

一輪の花に、転げた小石に、流浪の雲に、彼方の鳥に、濡れたような星々に、路地裏の猫に、書物の一頁に、塞がれた小路に、歌の一節に、落ちて生きながらえた麦に、干した洗濯物のひらめきに、私は散逸する。

いつからか、私は、散歩を愛好するようになった。

散歩とは呑気な趣味だと人は言う。否、散歩は命を賭けた冒険である。時に「もののあはれ」に憑き殺されそうになるからである。

散歩は狂人の所業である。ひとりぼっち、笑い泣きするからである。

散歩は信徒の巡礼である。多くの「細部（ディティール）」を、発見するからである。

夕陽があかあか燃えている。私の破片を薪にして、あかあか燃えている。

私は散らばり、代わり、世界が充ちていた。

◆ごぜん　東京都

【その日】

私の私による私のための一人誕生日会は、はっきり言ってすべて滞りなく終了した。

さすがに少しは大人になった、けれどもやっぱり大人にはなり切れない死に損ないの脳みそが、体を引っ張って苦しそうにため息をつく。

数分前、甘ったるいだけのケーキに突き刺したろうそくの火を吹き消した際に、頭の後ろの

ほうをよぎった衝動を文字にして思い返す。

「もうこれ以上大切なものを失いたくないんだ、私。」

ぼんやりと空を見上げるとあふれ出す涙の訳が見つかったような気がしたかと思うと、それはあっという間に確信にすり替わって、くすぐったいような儚いような気持ちになった。それは、誇らしいような情けないような瞬間だった。

つけっぱなしのテレビから聞こえる笑い声に嫌気がさしてぶちっと消すと、今度は私の心がぶちっと言ってあらわになった。世界で一番大きなゴミ袋でやっと小さな虫を一匹捕まえたような感覚が湧いて、乾いた空気がざわっと口の中に広がる。美味しくはないがしかしまあ、先ほどのケーキよりは不味くない。あのケーキ屋、ネットの評判は良かったはずだが。アプリを開いて見てみると、隣町にある同じ名前の店だった。お気に入りを示す星マークをそっと外した。

右隣のサトウさん家の子供はクリスマスの骨付きチキンが苦手らしい。
駅に住むホームレスのサトウさんは今日もアルミ缶を集めに自転車に乗る。
独裁に反旗を掲げデモで撃たれたお父さんを持つ子にとって私の生活は「幸せ」だろうし、
両親の手を握りファーストクラスに乗り込む子にとって私の生活は「不幸せ」だろう。
世界なんてそんなものだ、と思い込む。
私の生きるこの時代は、未来でなんて形容されているのかしら。
去勢された子ヤギの目の周りを飛ぶハエみたいに、私の気持ちはぶんぶんと回る。

よっこらせと立ち上がり、部屋の片隅で枯れていった花の死体を横目に後片付けをする。

肌寒い。突然の睡魔に襲われながら、助かった、と思う。洗い物を残したまま、しわくちゃの毛布をかぶる。昨年までは心地よかった秋の風が薄ら気味悪い。

もうすぐ冬が来る。私は今日、一つ年を重ねた。
それともう一つ。私は今日、会社を首になった。

◆レもん　神奈川県

ままどうしてままは私を見ないの

私はここにいるの

わたしのまま　はテレビかも
ままは何をしているの
呼んでも　呼んでも
呼んでも　呼んでも
答えはNO　わたしの存在NO
わたしは言葉が苦手なの

見たことない
ままとパパは　お話ししてるの
パパは優しい　でも嫌だ　痛いの
とげとげほっぺでなでないで

わたしのおうちは汚い
机も床も山盛り
片付けようがすぐに元どおり
それがどこの家も同じ
そうでしょ

ままは呼んでも応えない
ままは全然話をしない
わたしはテレビが好き
それはずっとわたしを見てるのに

ままは完ぺき
ままが絶対
わたしもねーちゃんらも
みんなが　みんなおそれ従っている
そう思ってた
本当は間違いだらけで
姉らも避けていただけだ

気づかぬわたしは働きアリだ

右から左へ
上から下へ

パスタをフォークで食べるって
必然め
箸で食べてもいいじゃないのかね

パパをいじめる
みんなでいじめる

それが普通だ
あの世界では

パパがいなくなった
次はわたしだ

あれもわたし
これもわたし
小学生の夏休み　家事もわたし
ままの機嫌取り　わたし
そこねたときに　後ろ指

長女がいちばん
次女は頭脳
三女とわたしは落ちこぼれ
言われなくても分かる

ひなまつりってなに
七五三ってなに
姉の写真はあるのに

パパは平等だった
優しかった
映画へ連れてってくれた
カメラの使い方を教えてくれた
手を差し伸べれば引っ張ってくれた
けどもういない
ごめんなさい
申し訳ない気持ちがいっぱい
ごめんなさい

まま　命令
パパの話は悪口だけ

両親　離婚する
どっちがいい
その後に言われる
パパの悪口
祖父母の悪口
選択肢は一択だった

両親　離婚した
ままは完ぺき
誰にも言わない
学校も変わらない
苗字も変わらない
態度も変わらない
表情も変わらない
住むのところ変わった
山盛りのやま　そのままに　逃げるように　引越した
山盛りをパパに任せて

助けて　助けて

早く大人になりたい
自由になりたい
離れたい

助けて　助けて

手を差し伸べても
声を出そうとしても
言葉がわからないの

助けて　助けて

家族ってなに

こんなに苦しいものだったり
こんなに戦場だったり

助けて　助けて

わたしはどこに立ってる

助けて

◆山口ウサギ　大阪府

【ぼくのいいところ】
ぼくのいいところは、いいところがないところです。
勉強も運動もできません。
みんなぼくをみて安心します。
会話が下手でいじめられます。
みんなぼくをみて安心します。
魅力がないからふられます。
みんなぼくをみて安心します。
こうして、みんなの心の平和に
ぼくは一役買っています。
ぼくのいいところは、いいところがないところです。

◆白旗奈緒子　東京都

【まひるの月】
狂ってしまいたい
こんな気持ちを抱えたまま
生きていかねばならぬなら
どうせならば狂ってしまいたい
好きとか嫌いとか
そんなことの意味もわからなくなるように
狂ってしまいたい

吐き気を催すような
腹の中のこのどす黒い感情が
私と貴方以外の人間がみんなこの世から消えてなくなってしまえばいいと思うような
この悪魔のような感情が
何も無いことに思えるほどに
狂ってしまいたい
何故私の前に現れたのか
何故私の心を握り潰してしまったのか
どうせ握り潰すのならば
私の脳味噌を　目玉を　身体を　心臓を
私の心以外の全てを握り潰してくれたならばよかったのに
何もかもわからなくなってしまうくらいに
私が粉々になって消えてしまうくらいに
全部握り潰してくれればよかったのに
明日がまた来ることが
この世が存在し続けていることが
わからなくなるほどに
いっそ狂ってしまえたらいいのに

◆中原賢治　　岐阜県

【尻毛の女】

或る女と同棲したのは三十年前　見苦しい顔立ちでもなく
　邪悪な心もなく　のほほんのオレに文句を言うでもなく
　飯を食べ洗濯をし性交をし　オレと女は確かに暮らしたのだ　（どこの生まれ）　炒飯を作った晩　女は僕の顔を見た　（韓国じゃないよね）　パスポートはない　ぺらぺらな日本語　どこか　秋田訛りに変調を入れたら女は笑った　抱き合った後に女が　博多弁でオレをなじった　（あんたの寝言で眠れんわ）　（九州かよ）　冷めた眼で女が
　なぜか言い訳するのだ　北九州にも名古屋にも　横須賀にも　地名がならぶ間に　記憶のなかに男がいたことまで
　明日の味噌汁には納豆をいれよう　女はオレを養うのがうれしいようだ　どこに勤めているのか　午前七時には卓袱台の前に座る女　午後六時にも　おかずは塩っぽい　風

呂屋に一緒にいきたいとせがむ　オレに抱きついて眠る
女の腐りかけた花の吐息　転送された一枚のハガキ　居酒屋の廃業の知らせに　帰ったきた女が破り捨てる　元いたオレの住所地　〇〇市尻毛四丁目六尻毛アパート四号室
（ふふふーん）　自嘲する女から白髪交じりの声がする
（シリゲね、尻の毛ってどこ）　夕飯の出前の蕎麦をすする　女が鼻水と蕎麦を鼻から吐き出し　嗤う　馬鹿笑いする　（しりげ　しりげ　しりげ）　オレの穴など幾たびも見たではないか　自閉症児になるオレ　蕎麦を口から吐く
　どんぶりをかぶった女の悲鳴に　オレは押入れにこもる
　暗闇から聞えるのは　尻毛アパートで暮らした女の啜り泣く声　くすくす笑う女の声が　襖の隙間から漏れる　（お尻の毛まで数える仲だわ）　女は女を笑っている　外の灯りが消えるまで　ただ縮こまり　爪を噛む癖が蘇ってきた　明日は女が好きな白い味噌汁にするか　オレは女に教えるのだ　（シリゲじゃない　シッケと読むんだ）　立派な日本語だと云う程に　女はぽつりヒトこと　（アンタの子ができた）　どこの生まれだろう　どこの育ちだろう
女の頬が赤く染まる　ごはんを三杯も自慢げにお代りする女　オレの中から尻毛の女が消えてゆく

【結び】

すみません
半世紀以上生きてようやく
人間の欲がわかって
ごめんなさい
勃起するぼくが
みさかないもなく女をあさる
いっけん道徳的な顔づらで
よそおう頭の中は
性交する肉体があるのです
誰か殺してください
不潔な忌まわしいぼくを
孕む性への冒涜を
どれほど新しい命に
安易な判断と世間体のために

人間の知性とは虐殺
だが
ホーロコストの中でも
内戦の地にも命がめばめる
この果てしない生きる渇望に
ぼくの性器は貧弱だ
日々に虚飾し演技する智慧に
まじかな死は
他人の棺桶を見送る
ありがとう
その愚かさを与えてくれた
凝固した活字たちよ
野火や原爆の屍に
なまぬるい言葉をつつむ
ぼくとは
ひとりの若い看護師が
鼻や耳や尻の穴に脱脂綿を詰む

【道】

錫色の空を死ぬまで仰ぎ
何の恥じらいもなく
枯れた乳房を拭かせてくれた
あなたを見つめるだけの
わたしは心が痛む

梅や桜をめでる心で
生きとし生けるものの冬の日ざし
雪解けの水滴が海へと向かう
あなたが教えた道

何をも誰をも
呪うことばなど吐くまいと
わたしは歩まねばならない
あなたが教えた道

今宵も星が流れてゆく

何億年も要して届いた光に
ひとの一生など
涸れ井戸の泡のごとく土へ
あなたは帰るのだろう

別れを終えると
雪が舞い始める
そして
あなたは歩んだ道をかき消す
記憶もしろく、しろく
降りつもる

わたしが決してたどれない
あなたという道

【カイコガ】
八十七の母が母を恋する
夕焼け小焼けを口ずさむ
遠くに置き去りにしてきたものは
毀れゆく母を抱きしめ
その匂いが息子を眠くさせる

目白が鳴く窓辺
母が立ちすくむ影に
一匹のカイコガが寄り添う

口があるのに喰いもせず
羽があるのに飛びもせず
交尾のみを行い
子孫を残して死んでゆく人生
野生回帰を完全に喪失した
餌がなくても逃げない生き物
母はカイコガの化身か

母が残した古いくけ台に
ひと針ひと針縫った絹糸が

母の部屋と呼んだ日溜まりに
今でも光る

少年の深いところに降りつもった
カイコガのまっ白な銀粉
どれほどの時を過ごせば
母の匂いは消えてゆくのか
せっせせっせと桑を食べる音が
人の終末を教えている

【投書】
まだまだ六十四歳なのですから
この世の中わからないことばかり
まいにち新聞も本も読みますし
テレビやネットのニュースを視聴します
喫茶店や居酒屋で人と話もしますが
いまの僕の頭の中は混とんとしています
こどもの数が少ないというのに
真夏のパチンコ店の駐車場に放置されるこども
公園のトイレの中で出産されるこども
親にせっかんされてしまうこども
いじめでビルから飛び降りるこども
だれか止める人はいないのですか
長寿と誉められていたというのに
施設にあふれるお年寄り
年金をプータロウに寄生されるお年寄り
家族に看取られず孤独死するお年寄り
街の路地裏を放浪するお年寄り
ながく生きるのはまちがいですか
せいいっぱい希望をもって
明日に向かって生きられるというのは
流行り歌の歌詞だけなのですか
スマホの画面に熱中する人たちの街
耳や眼を塞ぎ人をみない人は
この世に生まれ生きる理屈に背をむける
どれほどか美しいことばをおぼえて

百点満点の詩を路上で朗読したらと
ひきこもりの僕がうかつにも
厚いカーテンの隙間から差し込む光に
空想めいた思いにかられてしまう
この世の御親切などなたさま
この投書の宛先名を教えてください

【岬の誘い】

梅雨ぞらのなか弟が逝き
それまでの
ふたりのときにふける
私の気力も体力もおち
長良川の流れをみたり
夜空をあおいだり
言の葉が枯れてゆき
ようやくたどりついた
私が忘れていた
摂取　睡眠　排泄
この三拍子を甘受する喜び
無意味だと思っていたことが
実は意味の果実
岬ばかりを何時間もスケッチする
私はみたされた心にひたる
宗谷岬
ロカ岬
時刻によって色が変貌し
波の表情も空の仕草も
ひとつの岬の豊かさにおぼれる
スケッチをみつめた妻が
すべてを破り捨て
涙ながらに燃やしてしまう
老いていくのは定め
まだまだ生きてほしい
岬に心惹かれるのは死への願望
岬は死の美学
岬は自然のなかで一番美しい

それを知りつくした
足摺岬の自死
妻と燃えかすを眺めた
庭さきの郵便ポストに届いた
三回忌の案内ハガキ
あの岬たちのはるか彼方
弟の誘いの声が聞えてくる

【惜別】

日がな一日　懺悔する訳でもないが　末期癌の弟の背を
擦るだけが　今のぼくに与えられた亡き母の願いのなの
か　おまえは荒い息を繰り返し　幼い頃の思い出話に合
槌を打つでもなく　虐めた遊戯をたしなめることもなく
　雨露で捨てられた朽ちた木彫りのように　手足の指一
本も動かないまま　白いシーツに滲みる汚物が虚し過ぎ
る　面会時間を看護師が催促する　病室のガラス窓から
覗きこむ星が光る　夜空の何と長い時間を過ごすおまえ
に　ぼくはどんな優しい言葉を編めるのか　生命の細胞
の一つ一つが壊れる音が　耳底でプツリプツリと聞える
　宇宙のなかで一つ星が消える眼差しに　おまえのわず
かな瞼が動く　二人だけの肌の触れ合う存在以上に
「わかっているさ、アニキ」との　最後の光を見ずに逝
った無垢のまま　おまえの涎が滲みたタオルの甘い匂い
が　ぼくの脳髄に染みこんでくる　根の国は遠く海の彼
方にあるという　温かな光に溢れ魂が休らむ場所ときく
が　その無垢なるもの地へ庇護するために　ぼくの手足
をもぎ与えてもいい　我が弟の幸治よ　覚束ない足取り
で光の道を進めよ　渇いた足音を立て毛細血管を泡立て
た　おまえの寂しい耳に過ぎなかったぼくに　じゅわじ
ゅわと濃密な静寂の洞穴から零れる　一滴の甘く芳醇な
命の香りを　おまえはぼくとの別れの前に与えてくれた
　もう夜明けを迎えることない命なのだが　側立てる耳
にこの地球が呻く声に　導かれた世界へと一歩ずつ歩む
おまえを想う　主を失くした病室のベッドが　ここでの
幾千もの別れの言葉に錆つき　明日に廃棄されるのを哀
しげに　ギギ、ギギと軋む音が夜空の星が凝視する　ぼ

くのこの世との別れにどんな声が　黄泉の地からおまえ
がクスクスクスと笑っている
幸治よ　あまりに口惜し過ぎるじゃないか

【クモの時間】
朝昼晩ぐらいの時間割にしよう
食にありつく
食にありつけない
食をあきらめる
どれほどの頑張りでも
どれほどの才能でも
あるいは運が与えられたとしても
多くの時間は無駄な部類になる
丹念に腹で練り上げ粘質の
図形的に立派な円形の網を
計算された獲物の空の通り道に
縦糸、横糸と張ったところで
満腹したことがない
俺の愚痴を誰が聴くものか
いつぞや
横糸が粘液で作り
縦糸で這いずる
先祖からの約束を忘れた
俺はぶさまにも
自分の糸から脱するのに
その日の日記は恥かしさで空白にした
腹が空いてどうしようもなく
子クモを生んで食べたが
まずくて下痢続きに後悔した
自分の足を食べたが
痛みで地上を這いまわった
俺は餓死をまだ知らない
ようやく一匹の蚊を捕まえた
でっぷりと腹が真っ赤にかたまり
きっとヒトの血を吸ったのか
ていねいに食べてみた

ヒトの血色に染まった俺の体は
鳥の餌食になりそうで怖い
生きるために喰うのであって
喰われる命ではせんがない
俺は時間割を捨てた
時間の煩悩を捨てた
だからじっとしていられる
俺の適応力の源だ
ああ、子クモたちが糸をだし
タンポポの種のように風の背にのって
新しい地へと飛んでいく空に
意地悪い真っ黒なクモがおおう
数えきれない雨粒が落ちる
重力にたたかれうたれ
水滴が溜まった網から俺は落ちる
体が泥水から側溝へと
運命の快楽に俺はふいに陥った
何をこの世に拘っていたのか
俺の血筋
俺がクモであったこと
他の自問すらわいてはこない
側溝の底のどこかそのあたり
クモの時間があった黒いかたまり

【オムライス】
こどもの日になると
ぼくは
母と食べたオムライスを想い出す

父が結核で入院してから
母は
細腕ひとつで
雑貨屋を切り盛りしていた
小学生だったぼくも
店番をしたり
問屋まで仕入れにもいった

こどもの日
「うまいもんでも食べようかな」
そう言う母の腰にぼくはしがみつき
乗った自転車は大きく揺れた
デパートの食堂で初めて食べたオムライス
オムライスの大好きな母は
ひもじい食卓をぼくにわび
ふたりでニコニコしながら食べた

早く食べ終わったぼくの皿に
母は
自分のオムライスを半分渡した
「たくさん食べて
　たくさん勉強してもらわんとな」
ぼくのスプーンは笑顔で輝いた

今でもオムライスを食べると
母とのオムライスを想い出す
病弱な夫をもち
働きづめだった母が
食堂で見せた嬉しそうな笑顔
ふたりだけで
味わったささやかな幸せの時間
母の日
青空の遠く向こうにいる母へ
ジェット気流の宅配便で
特上のオムライスを届けたい

【名前】
新井君の葬儀の帰り
彼の奥さんから渡された
供花を束ねた花束を花瓶に入れた
三日も経てれば枯れるはずなのに
花びらたちが散っても
葉たち青々と輝いていた
花瓶から抜くと

細い血脈の根が生えていた
死んでなるものか
まだまだ生きたいと
無数の白い根たちが
合唱する声に身を震わせた
新井君とはトモダチだった
気がする
戦争が終わり十五年も過ぎたが
行き場のない朝鮮人部落に
新井君の家族はいた
鉄屑が朽ちた長屋を囲み
食滓を貪り喰う豚の糞尿に
銀蠅が群飛する光景に
新井君の首の皺に黒く固まった
垢が
鉛筆を引いた痕ようで
ゴム靴からの酸っぱい臭いを面白がった
闇市がまだこの街に立っていた
汚れた白服を着て
アーコデオンを弾く傷痍軍人の一団
ひとの憐れみにすがり小銭求める姿に
新井君の父が売り物の豚の臓物を
体を真っ赤にして投げつけた
侮蔑され本当の名前すら変えさせられた
汚辱
一本の糸ゴミすらない軍服を装った
この国の精神に
いつか復活する死霊が棲むのを
誰が気づくのだろうか
日本人として空襲で焼け出された
朝鮮人とし焼け出された
そのひと粒の米の行方を
新井君は知っていた
リアス式の美しい半島で
同民族が殺戮しあった
血管が破れそうな
両親の顔を誰にも話さない

先祖が子に伝え
一番大事な家族の絆としての
名前
新井君が唇を噛み
うっすらと血を滲ませた
「金」という単語だったが
新井君は新井だった
根ごと葉ごとに植木鉢に植えた
新井君の花は
大きな紅い葉を広げたが
あの時の花びらは戻らない
植物図鑑で調べても
その花の名前は分からなかった
確かに路傍の雑草にも名前は存在する
無名戦士の墓とか
無縁の墓とか
記するべき人の名前を放棄してしまう
新井君の苦笑が地底から聞えてくる

【新緑の道】

底をなくした砂時計の白い砂が
つもりゆく時の重みに
自らが壊れていくように
あなたは
初夏の芽吹くものの匂いに
記憶の一つひとつを
青く晴れ渡った空へと戻してゆく

踵を減らしたズッグ靴を
素足のまま履き続ける
雑草が繁る公園の
朽ちかけたベンチに座って
ぼんやりと蟻の歩行をながめ
エゴノキの白い花が
真っ白になったあなたの髪を
ゆるやかにすべり落ちる

五十年以上も前
同じ匂いをした季節の昼さがり
心の荒れた少年があばれても
あなたは溢れそうな涙を押さえた
その少年が
今　あなたの手を握りしめ
一歩一歩共に歩む影法師が
薄れかける遠い記憶に声をかける
運動靴を忘れた少年を追った
若々しく上気したあなたの紅頬に
眩しいほどの愛を知った日

時は自らを悔やまないように
夕陽が山に落ちる一瞬
ぼくは吐息のごとくつぶやく
かあさん、きれいだよ
誰にも聞えない声であればこそ
ぼくだけのひとりだけのかあさん
今日も新緑の道を歩いておくれ

◆小林晴菜　静岡県

【形】
簡単に形は
てばなせないよ

夫婦とは
他人にいますっていえる
他人に羨ましいっていう
形だ

そしてそれを
あんなに
欲しがっていた

数年後
私は今
にげまわり続けている　毎日

暮らすこと
笑うこと
にげまわっている
いま毎日

だけど絶対てばなしたりしないのは
お互い様

なにを思おうと自由？
ぎりぎり
優しくなどできない
なにを考えようと自由？

同じ空間に人がいる事に耐えられない
ことをわかってほしかった
家族がいれば
孤独ではない

しんじられない
考えられない
一緒に食べるとか
ねるとか
死ぬほど嫌だ

なるべく
寄り添うようにしているんだから
勘弁してほしい

愛情は注いでいます
最低限の事をして身綺麗にしているんだから
近所付き合い
役員
買い物

それなりに
してるんだから
勘弁してほしい

ほかの誰かをたまに
思うくらい自由よね

当たり前に愛されようと
その場にいる事が
私には許せない

もう
なにを
かえてみても
いまはいま

夫婦は
不完全なもの同士が手にする
世の中への形

なにを感じようと自由だよね

◆玉井秀男　福岡県

【青春耽歌】

神松寺バス停前の下宿屋の　二階の角の三畳一間
ギター弾き自作の歌を口ずさむ　失くした恋のマイナーコード
先月と違う女が俺を見る　首をかしげて足投げ出して
ソーセージ食いちぎってはコップ酒　女の髪が静かに揺れる
指絡めほんのり酔って膝枕　赤いルージュの時だけ流れ
腹ばいでくわえ煙草に火をつける　部屋を彷徨う心と紫煙
耳にする女の寝息今日もまた　何事もなく日が暮れていく

神松寺バス停前の下宿屋の　二階の角の三畳一間
白濁のスープに躍るラーメンを　鍋ごと抱え腹にかき込む

大学に久しぶりだと顔を出す　見慣れた校舎見知らぬ講師
キャンパスは相変わらずのアジビラと　学生デモにシュプレヒコール
目を細め芝生の上で胡坐かき　煙草くゆらせデモを眺める
退屈で授業抜け出し街に出て　三本立ての映画三昧
金がなく歩いて帰る今日もまた　何事もなく日が暮れていく

神松寺バス停前の下宿屋の　二階の角の三畳一間
和菓子屋のアルバイト終え銭湯へ　他に客無く貸し切りの風呂
脱衣場で黒い下着脱いでくる　男湯なのに女の姿
手拭いで股間を隠し湯の中に　白いうなじに乳房がゆれる
洗い場で女を見れば丸い尻　股間を見れば太い一物
風呂屋出てコーラを買ってラッパ飲み　雲が垂れ込み遠く雷鳴
パラパラと雨が降り出し今日もまた　何事もなく日が暮れていく

神松寺バス停前の下宿屋の　二階の角の三畳一間
アングラの劇団員と知り合って　誘われるまま芝居観に行く
公園に張ったテントの舞台では　裸の男女絡んで踊る
暗闇で点滅をする照明に　目が痛くなりテント抜け出す
外にいた警察官の職質に　学生証を無言で見せる
公園の池の水面陽を受けて　キラキラ光る鏡のように
目を閉じて風を感じる今日もまた　何事もなく日が暮れていく

麻雀で徹夜した日の昼下がり　布団にくるまりしばしまどろむ
優し気な女の声で目を覚ます　俺の髪梳く白い指先
週刊誌パラパラめくり俺を見る　微笑みながら足投げ出して
他愛ない女の話聞きながら　煙草をくわえ相槌をうつ
ギター手に窓辺に立って空を見る　耳をすませて言葉探して
窓の外変わらぬ景色今日もまた　何事もなく日が暮れていく

◆葵　花　　東京都

【人形】

まとわりついてくるような湿った暑さに負けて、重い体をゆっくりと起こす。窓を開けると、もうお天道様は空高く昇っていて、眩い光を偉そうに降り注いでいた。
この生活を始めて、もう何度目の夏だろう。昼夜逆転、曜日消失、四季不感。夜の住人とな

ってしまった私には、海開きやスイカ割り、バーベキューに夏祭りの季語達が、昔の写真のように懐かしく感じる。緑が青々と揺れて、目を閉じると聞こえてくる虫達の井戸端会議が好きだった。それなら、夜の情緒を感じればいいと試してみたけれど、そんな感情は邪魔なだけだった。

足元の古びた扇風機の電源を入れて、蒸しかえった部屋に息を吹かす。一番強いモードにしているのに、生まれてくるのは弱弱しいそよ風だ。もともとは、大家さんが捨てそうになっているのを引き止めて、譲ってもらったもの。丁寧に洗って使ってきたために、そのころっとしたフォルムにも愛着が湧いてきた頃だった。

水滴がびっしりついた麦茶を飲めば、私の中の一本道が潤んで、瞬間生きているような気がする。上から下へ伸びていくような感覚が、汚いものを流してくれているようでもあった。それでも、シャワーを浴びて汗を流せば、私はまだ汚れているような気がして、無性に死にたくなるのだ。ごしごしと力強く、隅から隅まで洗っているのに、染みついたこの穢れは拭えない。

しばらくすると、腹が空いていることに気づき、やはり生きていると思う。冷蔵庫にあったうどんをレンジで温めて、その間につゆをお椀に注ぐ。今日は、贅沢に生卵を入れちゃおうかな。刻みねぎも乗せて、黄色に緑と、黒ばかりに慣れてしまった色彩感覚をカラフルに取り戻す。どんなにつまらない毎日でも、食は喜びであり、おいしいと感じる。入ったばかりの頃、お店の先輩に言われたことを思い出した。それだけは、捨てちゃいけないよ。そう、強く教えてくれたあの人は、どこかで元気にやっているだろうか。

部屋いっぱいにオレンジ色が広がれば、戦闘の準備。私は、着せ替え人形のように、スパンコールで彩られたドレスを身につけ、別の誰かになりすます。血のように、深く赤く染まった唇に、ビー玉のようにまんまるとした大きな目。首根っこと腕の裏、あとは胸の間に一回ずつ、魔法の水を吹きかけて変身する。

そうして、武装した私は、今日もキラキラと光るドールハウスの闇に消えていく。コツコツと新宿のネオン街に鳴り響くヒールの音は、せめてものプライドだ。口の端を上げ、お得意の仮面を貼り付けた操り人形と、何者にもなれると見栄をまとった怪人達が踊り狂う夜。皆、偽りの世界だと知らないふりをして、一時の快楽を得ようとする。外から見れば、ひどく滑稽なのだろう。

この世界は、生きた心地がしない。そんなことは重要ではないから。それでも、女の子たちは流れに抗い、希望をもって死んだふりをする。いつか、抜け出してやる。それまでは、深く潜るのだ。悟られないように操られているふりをしながら。

明日も明後日も私は人形。

綺麗な人形のふり。

喜んでいるふり。

怒っているふり。

哀しんでいるふり。

楽しんでいるふり。

生きているふり。
死んでいるふり。
色があるふり。

私が全てを諦めているふり。

◆辰己尚平　大阪府

【砂の山】

泥人形の　長い夢が
泡のように　はじけて
地に落ちる　手と足
越えられなかった　宿命の壁　そこにつたない　血の色で　夢の跡が　殴り書きされて
いた　今はただ　強い光にさらされた　砂の山が　二つ三つ…　それが何だったの
か　誰にも知られず　風が　砂粒を　彼方へと運び去る

【革命粒子】

人の欲で回る　世界を止めて　次は何が待っている…？　多すぎる　小さな欲の　存在を
許さないと　生物もどきが　飛び回る
人の欲に　くっついて　どこまでも　離れない　止めるのさ　あなた方以外のため　中心
をずらす　ただそのために　次に行く？　行けるのかい？　ただ、くっついて回ってる

【錆びれた青】

重力に逆らえない　重い血が　私の魂を　底辺に縛りつけ　必死の　羽ばたきにて　空を
つかもうと　伸ばす手が　風雨にさらされ　寂しげに　美術館に　展示されている　館内
にこだまする　人の足音が
　私を消して　世界と同化してた　あの頃の　虚空の響きに似て　少し寂しげな　錆びれ
た青を　思い出させる

【生きる赤】

諦めのような　透明感が
ざらついていて　痛い　世界に嘘をつき　虚構だらけに　なってしまっていても　自分に

は　嘘をつけない…。　蹉跌の音は
満員電車の中で　命を削る音に　似ている　オレをここから　このノイズの世界から　出してくれよ
ここだけは　この一点だけは　諦め切れなかった
男がえぐり出す　生きた血の赤

◆落知之仁美　　神奈川県

【庭園】
「櫻の花弁を全身に浴び、純白のドレスを纏っている貴女。眩い反射光を両の瞳にくれる瞬間、恐れ多いです。嗚呼、もう！死んでしまいたい…。」

か細い指で、ゆっくりと編んだ草花の輪っか。
枯れてしまわぬよう、今涙を注いでやるからね。
（求愛に寄った、あの日の手紙から一節）

あなたがもし、仕様もない花ならば
わたしは自然に、その手を差し出した

青空は尊大であり、吹く風それは
何ら変わりない毎日を、少しばかり思い遣っていた様で

途切れることのない雲を沈め
感化された言葉すら優しく浮かべた

灰皿に置かれた煙草の吸い殻は
物憂げに臭気を放つもの
今あなたが、ふかした真白い煙に
…何故だろう?慣れた筈の瞳が潤むのは

小さな部屋に、大きな夢を敷いて
寝転んで、愛の柔らかさに触れた一時を

思い返して、呑む珈琲の美味な事
ほろ苦いタールも、ほら舌に残ってる

野に咲く可愛らしい花も
若さゆえの青々とした気持ちも

パタリとやんだ強風が、恋しくて仕方ないのは

悠然と咲き誇る、私を知るあの薔薇のせい

枯れるのはいつ何時か、決めてないから
終わりを報せない、それが礼儀でしょう？

首をぎゅうっと、締付ける茎
両足を拘束する為だけに、存在する憎い根
好きなの、そのまま生かしてやって下さい

「君の薫りに気がつくだけで、脳幹が揺れはじめてね。砂利が吹き荒れて、目を嬲るように視界は不安定になる。しょうもない逸話なんだよ、摂理に逆らう恋心っていうのは、ね。」
（目が淀んでいる彼の、苦しげな言い訳より）

だから言った、自然の体裁で
健やかで清く、淀みの無い愛を
与え貰い合うことは、厳しい事だって

揺らぎ易い春の、空よ
生暖かい接吻を、交わした夜明けの夢や
私の記憶に名残惜しむ、その性や情事よ

「聖書を開いたら、淡い天使さまの御姿が視えた気がしまして…」

この季節は、やはりあまりにも迂闊過ぎる。

【古びた純喫茶にて】
柔い紙巻きの煙を、脆い粘膜で転がしていると
安心と恐怖が血中に流れ、厭世の目を知る事となる
その時、こう呟く人もいた。

吸いたくないものを吸って
人生の儚さに戦慄くなんてね…

「必要なんでしょうか、愛
散ってゆく美しさは、哀…？」

一服する為に、入った路地裏
少し、揺らいだ気がした

くだらないお伽噺に、時間を費やせるのも
自己の弱さに浸って、歪な愛を顕示出来るのも

そんなことばかりで、生きていると言えるような
打たれ弱くって、生易しい世の中だからだよ

格好ばかりに、ふかした溜息に
きらびやかなダストと虚勢とが、入り混じって
光り輝いて慄くのなら、私ここで泣けてしまうわ

変に艶っぽい絶望を、調合したような
安い湿気た葉ばかりを、敷き詰めたような
数秒の安堵にかけてみる銘柄、気に入っている
自己陶酔への快楽を、数百円で堪能する人より

未来への期待とか、他が為の夢物語は
安寧の心を持って、ただ煙たく燻る

青空に感化されて、死にたがる夜の月
とても綺麗で、可愛らしかった

世知辛いの、腐り出した論文さえも
ひどく美しい、文体に見えて来て

漂う寂しさの雨雲、似合わない薔薇色の花達が
指に絡まる、髪にまとわりつくから

私が底無しに飛び込んで、暗がりに墜ちることを妄想するのも

あの人が健やかなる精神を、サナトリウムで賭博しているのも
何もかも、不思議な逸話じゃ無い気がして。

◆初霜若葉　京都府

【雪のように】
たけのこの皮をむきむき
これは父さんこれは母さんと
話すおうちもあるらしい

不良児と呼ばれて
親も身内も他人の顔
けれどウイルスだけは平等にくる

毎年乳母車に乗せられる赤ちゃんは
散りゆく桜を見て
幸せそうな顔で死を学ぶ

何者でもない人も死にゆく春が来ても
地球は蚊に刺されたほどの気持ちで
また深紅の紅葉に着飾ることだろう

だから私も
溶けても溶けても降りゆく雪のように
時間という舞台で足音を立て続ける

父さん母さんと聞く日まで

◆市井の人々　　大阪府

【怪物のうた】

夜。君の瞳がぼくの指先にひかりを灯し、君の声が耳元で花を数える、夜。ぼくは後ろ暗いこの骨に埋まって、楽園の夢を見る。
ぼくは怪物だ。そう思って生きてきた。そんな空想は子供だけがするものだと人は言うけど、ならぼくはいつまで子供なんだろう。青く墜落する星や、こわれてしまった真鍮の鳥、王様の顔を忘れたナイチンゲール。そんなもののあいだに何度も、君の葬列を見たよ。この満たされたおなかで、牙の生えた口で、か細い脚をしていた君を思うということは、ひどく悲しいよ。墓標に刻まれた名前は、古びたもののように、甘く、乾いた、ただの意味になってしまうから、その永い一瞬のあいだにずっと祈っている。

どうか美しいものが皆、ぼくの手の届かないところまで逃げられますように。

たとえ明日の朝 君がいなくなっても、ぼくは何も変わらないよ。おなじように湯を沸かし、お茶を飲んで、同じように愛しているよ。
だから、
きみは逃げていいんだ。
銀の星降る葦の海を、燃えさかる火の馬に乗って、童話でしか語られない森まで。
ぼくは大人になれなかったから、自分が怪物なんじゃないかって空想をやめることができない。だから、もうやめにするんだ。

大丈夫。
ぼくは君を失える。
ぼくはきみから出ていくけれど
これからぼくが歩む全ての角には君が立ち、全ての鐘は君の声で鳴り、全ての河には君の血が流れ、全ての花は君の髪のように甘くにおう。ぼくは失うことで永遠にする術を知っているんだよ。

大丈夫。
いつかぼくが
その目を覗き込んだとき、
優しい君は瞬きを忘れて、
埃っぽい陽の光のなか、
音もなく涙を流していた。
愛とは、
それだけのことで構わないんだ。

◆ミシマ・マミ未　　神奈川県

【君と僕の第三次セカイ系的恋愛革命】

一、見知らぬ天井

君はある日空から降ってきて
（それはもちろん、僕でもいい）
僕の胸の中にすっぽりとおさまるだろう
君は記憶を失っていて
（病院のベッドの上）
しばらく入院することになるだろう
看護婦が君を世話する
（椎名林檎にどこか似ている）
君は少ししてから退院する
街の中央にある三基の煙突から、
君の退院祝いの花火があがる

二、ＵＦＯと夏休み

君は煙突のもとへ急ぐ
（もちろん僕も）
そこで君はロボットに乗り込む
（真っ赤でカッコいいロボット）
僕はそんな君に向かって手を振る
まだ少し大きい制服は風に靡き、
君の真っ白な髪はまるで絵のように震える　君が見えなくなると、僕は、
はやく大人になりたいと願う

三、僕の声

僕の目の前でロボットと怪物が闘う、皆は知らないけどあのロボットには僕の大切な人が乗ってる、みんな知らない、みんな知らない、僕だけが知っていること、けど、彼女のおかげでこの街の人間は生きてられるんだ―それをもっと意識するべきなんだ―彼女はいつだって死にそうになってボロボロになって泣きじゃくって記憶をなくしてまでも闘ってる、セカイのために、僕のために、なんて、彼女は言ってくれた、けど、どうだろう、彼女は本気で僕のために闘ってくれてるんだろうか?こんなになにもできない僕のために?―今日も彼女は勝つだろう、今日も彼女はボロボロになって帰ってくるだろう―僕にはそれを出迎えることができる。

四、逃避とオンボロ兵器

彼女は四肢をもぎ取られ
目玉をくりぬかれて帰ってきた
それでも一週間あれば
彼女は元通りになるだろう
彼は彼女を出迎えた
そしてそのあとで、
逃げ出し、あの看護婦と寝た
彼は激しく看護婦を抱いた

五、セカイの終わりとキンゾク・バット

彼女の身体は最後の怪物を前にして、
限界を迎えた
僕は、彼女に告白をしようと
（僕はそんなことさえしていなかった）
彼女の乗るロボットの前で
看護婦を金属バットで殴り殺した
僕はそうしなければならなかった
僕にはそういうことしかできなかった
そして、僕／君は記憶を取り戻した

六、第三次セカイ系的恋愛革命宣言

看護婦は言った〝君のセカイはまるでチャチな三流小説の寄せ集めのようなチープでくだらないセカイだね〟と、〝まるでクソガキのイタイ妄想だ〟とも、そんな彼女もイタイ存在なのだが、〝さぁどうするんだい？現実へ帰るかこのくだらない妄想に自閉するか〟と僕の好きな声優の声で僕の醜い声を遮り言った—永遠のセカイはもうすぐそこだった、僕があと一歩—そのあと一歩が破滅的に恐ろしい体験を、同時に壊滅的なまでの快楽を僕に齎すだろうということは分かりきっていたが—そのセカイにはなにも存在しないと彼女は言った、そこにはなにもないと、あってもそれはないのだ、と—そこはもはや過ぎ去ったセカイであり永遠に存在するセカイなのだ、と—そんなセカイに僕は身を投げ出すことができるのか？——できるのか？——いや、そうじゃない、よく聴け、看護婦の声をじっと聴くんだ——　行け

行け

行け

行け

行け

行け　　行け
行け　　行け
行くんだ

【まるで・まるで・まるで】

君の髪の毛はまるでロッカーの中で眠りこける箒のようで君の歯はまるで辛子がこびり付いたような色をしていて君の目の色はまるで山羊の糞のよう、そんな君の鼻はまるで幼稚園児が粘土で作ったようで耳は僕の排泄物のように溢れてる、アスファルトの上の空き缶のようなアバラ、梅干し色の乳首、根性焼きのようなホクロ、痰壷のような頭蓋骨、血液そのものの唇、サナギのような性器、無垢な子供にへし折られる小枝のような四肢、そんな君はまるで文学作品そのもののイデアのような出で立ちで人びとに吐き気を催させる。借り物で作られた君は僕の言葉で正直に言わせてもらえれば〝醜く、気持ち悪い〟、が、君を抱きたがるものは多い――君は案外好かれてるみたいだ、けど、僕は好きになれない――僕に出来るのは誠実な言葉で君に語りかけるだけ……まるで……

【they're in my head】

あいつに似てるって君は僕に言うけど一体何処が？って感じで僕はあいつと全然似てねーって思うしまぁ正直どーでもいーって感じなんだけど、君にとってはどーでもいーってわけじゃないらしい、君は言う、似てる、って―でも僕は全然そいつのことなんて知らないし大体似てたってまぁいいんじゃね？、て、そんなもんしょ、て、感じなんだけど、君は〝似てる似てる〟、て、うるさい。だから僕はちょっとそいつのこと見てみる、ま。似てなくもない、が、ちょっと心外、僕はあんな風に見られてんだ、ってさ―うーん、でも、僕とあいつはやっぱり似てないよ、多分、見てるところが一緒ってだけでさ、って僕は君に言うけど君は〝いいや似てる似てる〟って―まぁ、いいけどさ、君からすれば確かに似てるんだろうし、でも、なんかヤっつうか不満不満、だって俺は俺であってあいつじゃないしあいつはあいつで俺じゃないってのはマジでそんなもんでベツモンなのにそれを一緒くたに〝似てる似てる〟って思考停止されりゃそりゃなんだかなって感じでまーいいけどさ、ちょっとどうかと思うぜ、それ、とか、ぼーって言ってみれば案の定〝マジになんなよ〟、て、ま、マジになんかなってねーけどさ、でもま、せっかくだしマジに言わせてもらえりゃ〝似てる似てる〟うるせーんだよクソがクソがクソが――

【ダダイストＳＡＳＡＭＩの詩】
ＳＡＳＡＭＩＳＡＳＡＭＩ
ＳＡＳＡＭＩが食べたい
鳥、豚、牛
やっぱりＳＡＳＡＭＩ

ＳＡＳＡＭＩＳＡＳＡＭＩ
ＳＡＳＡＭＩで死にたい
ジャンキー、キャバ嬢、フリーター
ＳＡＳＡＭＩと心中

ＳＡＳＡＭＩＳＡＳＡＭＩ
ＳＡＳＡＭＩってステキ
バロウズ、キム・ゴードン、ニーチェ
みんなＳＡＳＡＭＩ

ＳＡＳＡＭＩＳＡＳＡＭＩ
ＳＡＳＡＭＩはアメリカ
アメリカ、アメリカ、アメリカ
アメリカなんてＳＡＳＡＭＩだ！

【オタクと井戸】
ばあちゃん家の庭には井戸があって小さい頃なんかは何だかそれがとにかく恐ろしいものに思えてたもんだけど今になってみるとまぁ井戸だなって感じで僕は久しぶりにその井戸ん中を覗き込んでびっくりする、アスカがいる、井戸ん中に。

「ほんっとはやくしなさいよ、
このバカシンジ！」

いや僕シンジじゃないんだけど……
とか思ってると、

「ちょっとキョン！
そんなとこでボケーっとしてないで
はやく引き上げなさいよ！」

僕がアスカだと思ってたモノは僕の目の前でまさにぐにゅんぐにゅんとその姿形をパーツごとに変形させて気がつけばそれは――と思うのも束の間でアスカはハル子に、ハル子は鉄乙女に、鉄乙女は川神百代に――その人型の物体はぐるんぐるんスーパーボールの柄みたく、僕は思わずおえっなんて嘔吐き、まるでミキサーだな、とか、

団ありす「――トリス／
あたし、行きたいところに調教／
電気で剥きの人間が死／
単なるワイヤードUエエーブギーは甘美！／
玲音を大いに盛り上げる薬／
全世界的ポップ０６２４一瞬にして殺す／サンタクロースなど秘技／

思ってるとヘンな声まで聞こえてきちゃってぐるぐるぐるぐる目が回る、気持ち悪い、今にもゲロっちゃいそうなんだけど、けど、それって酷くない？ってそれだけは妙にハッキリ聞こえてきて見てみれば目の前には吐瀉物的というかモンタージュ的というかまぁとにかくごた混ぜの怪物がいてでもその声だけは僕が今まで散々愛してきた彼女らの声のようにも聞こえて不思議とああそうだよな酷いよなそんなことって、なんて、悲しくなっちゃう？もう好きじゃない？私たちのこと？僕は首振って好きだよって言う、でも私たち痛いよ、苦しいよ、こんなバラバラにされてまた組み立てられてバラバラにされて組み立てられて…ごめん？って僕は言う、でも怪物はしくしく泣いてる、そして言う「私は私でありたいの」って。

◆吉居侑子　　神奈川県

【無題】

四階音楽室、校門から出て行く人を見ている。この時だけは、私は高いところに入ることができる。窓を開けてはいけない。今日は南風だから。ピアノが錆びるから、そういわれたから。砂埃のついた窓に鼻を押し当てる。ただ人を眺める。名前すら知らない人を見ている。鼻の先に、かすかに触れた潮の匂い。しみついた匂いか、でもそれは一瞬のことで、なぜか私は森の中の空気を思い出した。背の高い針葉樹林、岩は苔むして、ずっと奥まで冷たくしめって、そんなところになど行ったことないのに。この世界がどこかで行き止まりになったとしたら、それは自分の中で迷っているだけだと言う。　地平線は、人々の家だ。明と暗が交差して、いまは地上が空になる。その先に、海が見えることを私は知っている。この学校の屋上からしか見えないと思っている人を愚かに思う私は、ここから人を見下ろす私の答えだ。北側の窓からは都会の景色で、そこを電車が通るのを、面白いとはもう思わなくなる。私は耳をおしつける。貝のからを。帰っていく人の声は、大きくて、笑っていて、ちょっと

くたびれてなじんでいく。走る音、呼ぶ音、この小さな学校に響いている。私は、大人だろうか。子供だろうか。そんな質問をしてしまえば、私は悪いほうの大人で、子供に見えるのだ。どっちでもいいと思った。シャープペンを回したり、カチカチ出すリズムをつくったり、落としたのを拾う別の手があったりする。鐘はとっくに鳴りおわっていた。それでいても、こうして全て見届けていたかった。　あっ　と気づく　たったひとつでゆっくり歩く一つを　潮の匂いが濃くなった。その目は　こちらを向いた。大きな緑のカーテンで、初めて身体をくるめてかくした。　もう、いいかい。いないかい。ああ。ほほを窓につけて冷やす、古いそれはガタリと音を立てる。もういいよ。毎日が最後で、私はいつも同じところを、行ったり　来たりしているだけだ。もう一度だけ、外を見た。いつものような色の暮れとしか思わなくなった。でもまだ、汐の香りはする。本館四階音楽室、その重い扉の中。

【陶器】

夜あけは　　まだ
水は　張りつめ
霜の結晶のえだわかれ

夜あけは　　もう
うすめ　の　おくの
　　冴えた乳白
一　　しずく
　　白磁器の
こくうのひかり
青く　映すと

夜あけは　いま
澄む　水面に
つゆぬらす　　白

【無題】

きみの存在が砕破されると、たれからも聴いたことなどないのに、そうだと知ってしまった、それは倒置法かと思った、まるで、世界に時間などなく、時計だけが存在しているかのようでいて、すべてのものは今という静止画が絶え間なく変化、せざるを得ない。飛び回る分子の一つはきみの一部であるから奇蹟は起こってもおかしくないというけれど、私たちは確率を信じすぎたせいで、この場に閉じ込められてしまうのだ。信じることはきみの砕破だったか、遠い海から運ばれてきた積乱雲の雷鳴がこたえる、ひとは神を創りまた神は人を創造し

人は人を製造しきみはいて、ひとは神に責任を負わせて神もまた人に人を背負わせる、きみの赤んぼうのてのひらがひらいて、夜を待つ花はビニールハウスの中で、今朝、あの死刑囚が死んだ。あまりにも重い扉を開けるときは千年もどり、万年もどり、いないすべてのいきもののことを考えなければならない。　そしてひらいた、そのあとはもう軽い、なんでも軽い、きみを置き去りにした罪さえ、軽いとは言ってはならないそんなこと二度と言ってはならない私は言葉に私だけの意味を持たせたくないだけでただ私の上にあるものがどんな顔をしているのか知りたくなかっただけなのだ　　私には若さがある　でも　もう遅いということはある　やりなおすことはできない　だからきみはなにも口にする必要はなかったというのに　あああれもこれも全て私のひとりの罪であればどんなによかっただろうか　きみのそんざいとそんざいいぎのそうじせい、私はきみの砕破を知っているこの世のただ一人になって、私は気づく　たれもしらないきみの存在の最果をかいま見る私の存在のいまうしろにいるきみを砕破するためにきみはわたしをさいはするということを

【無題】

いま君は何をしているの
と問う夜、
床が揺れて「ただ今震度３の地震が観測されました」
まだつづいている——、
胸の鼓動だった　休むこと　なく
うごく　君　が目を
合わせてくれないのはどうして
いまそとはつめたい？
夜は答えない、
一番それが深くなるとき
細い光はすべて凍って、
ただようまま　　落ちて
ガ金ラ竟ス
刺さっていた確かに、
君は遠くにいるのに、
『こどうはとまりました』
とおくにいるのに、
夜は
返さない
虚空のこだまの硝子粒
君はいま何をしているの
一光年、

二光年、
「津波の心配はいりません」
三光年、
四光年、
時計は
何時間
ずれている、

◆ずんやまずん子　沖縄県

【歪んだ嬌声】

朝っぱらから酒を煽る
部屋に籠り、音楽を聴きながら1日が終わる
ただそれだけの偽造生活
僕の描いた夢は
いつしかの絵本の中
幻想世界として再生を始めた
家の中でも声を出して歌うことが許されぬこの世界に
遣る瀬無い後悔と怒りに身を震わせても
結局今は出損なった涙に
ただ呆れ果てることしか出来ない
わずかな不協和音（ノイズ）を引き連れて
今日も決まったラジオが流れ始めたところで
部屋の片隅に
音楽と慇懃を重ねる
〃
２０２０年１１月３０日
・・・こんにちは
ありふれた音楽ラジオです。
最近、この世界の使い方が甘くなってきた為ルールをリマインドします！

【ありふれたルール】
その①合図を出せば回れ右、みんな一斉によーいどん
その②綺麗なものだけ集めましょう
その③音痴は騒音です、殺して良し
その④認められた曲以外は騒音です、殺して良し
その⑤裏切り者はこの世界のバクです、排除して良し

【実例】
・お庭で好きな曲を口ずさんでしまった少女Mさんは、通りすがりの通行人が刺しました。
・公園にて無断でオリジナル曲を披露したシンガーソングライターSさんは、居合わせた観客が撃ちました。
……など。逆らったから仕方ないですよね。皆さんもルールを守って、これからもっと素晴らしい世界を造りましょう！

〃
〈起床〉

僕だけ一人ぼっちになってしまった
今まで見たもの、今日までの記憶全て
夢日記(研究ノート)にメモを取る
この世界は暖かくない
この世界は暖かくない

２１３０年１０月１日
MEMO：今宵、人類は皆、音楽に殺されました。
不平不満もバラバラ音階を全て引括めた旋律となって、我々は、皆様のご冥福をお祈りいたします。

理想妄想の現実世界は
綺麗と言われるような音と音が複雑に絡み合い
リズミカルになったそれらだけが
この世界を生成している
人類が血に帰った後
僕はやっとの思いで、声を、歌を、響かせる
歪んだ脳内、再生、変換、再製、返還…伝達運動

死んでしまった彼らに混じり

僕の描いていた夢は
いつしかの古びた絵本の中
幻想世界として終止符を打つ

人間が創り出す全ての音が消え去った今
僕の脱け殻は　間抜けな嬌声を上げる

【空白】
午前3時、雲ひとつない空
カーテンの隙間から月灯り
眠い目を擦ってブルーライトが部屋中に散らばる
@_____xxx
（アットマーク／アンダーバー／エックス×3）
※このアカウントは存在しません※
ログアウト

［ログイン］
_____
または
_____
［新しいアカウントを作成］

ログイン
※入力されたパスワードは正しくありません。パスワードを忘れた方はこちら。
あちこちに脱ぎ捨てられた服
ＵＦＯキャッチャーの戦利品が床に転がり
複数の虚無の存在と目が合って心が震える

僕は誰とも繋がっていなかった。初めから。ＳＮＳのフォロワーも、皆んなそれぞれ壁一枚を隔てて遠吠え。一度信じた人も無作為に弄んで。互いに傷つき、傷付け合ったと思ったら、うなずき、舐め合う、うわの空。僕はその時どうすれば良かったんだって、僕の居場所はどこにもなかったんだって！ありもしない過去に何度も打ち拉がれて。今更かわいそうだなんて思わないし、だけどまだ何処かで求めている、探してる、僕がいる、だから……わからない、わからない、わからない！

伸び続ける生命線に逆行して、透明になっていく背中

闇に溶けたあなたは、僕の瞳の奥に焼き付いて離れない、から、おやすみ。
見るも無残に乖離した僕らは、お互いの安否を知ることもなく無言で彷徨っている

午前5時、アラーム音
僕は朝焼けに消えて
部屋の片隅に刻み込まれた
静かな夜明け

【ツカイステボールペン】
人々が生還り目覚めはじめるＡＭ９：００
隅々まで黒黒たる静寂に包まれた街に
一気に陽(あか)りが駆け巡つた
ネオンカラアに彩る街灯
点：滅
滅：点
点：滅
▽辺りは一面
▽モノクロ壁
所々落ちた鮮やかなる
ビ　ー　ズ　の
産　乱　に
在らぬ心を少し浮かせたところ
ふつと
我が箱で
身動きが
とれぬを

（（　足足足足足　））
――無言で眺めやる

随分長らく盲いた眼の前

漆黒に攫われた空気の
生温さを全身に溶かし逝き

半透明に成り果てぬ己の身体
頭上に滴るエアコンの雫が
天泣の如く
我が身体をお淑やかに嗜む
色彩を放つメインストリイトにて
無意識の背徳感をもちたる
貴方(きみ)に憂いあれ

◆月零　山梨県

【常夜灯】

明かりを消してはいけない
あんまりに暗いから

僕は寝床に半身を突っ込んで
君が待つ世界と
僕を生かしながらねじ伏せる世間の
ちょうど狭間にいた

僕が背負ってきた場所と枠組みを
君は知ることなく眠ったのだろう
それらは人肌には冷た過ぎて
どうにも抗えないほど重い
誰もがこの悲惨な事実を知っていながら
ただ口をつぐみ冷たい歯車の一部になる
生命を削ってやり過ごした今日も
眠ればリセットされる訳でない明日も

君の安らかな寝顔に

「どうかこんな世界など知らないでいて」
強く願った瞬間
苦しい程の暖かさと
対照的な実感が溢れ出す
「この世界にたった一人」
僕は孤独ごとまとめて抱きしめる
君はどんな夢を見ているのだろう

窓の外は相変わらず
これ見よがしに時を刻んでいる
喧騒を隔てた内側で
君が波打つリズムに聞き入り
乳白色の肌の上のそばかすと
橙色に染まる鼻先を見つめる間
時が止まった様に
空っぽの僕は重さを取り戻す

月明かり一筋さえ零さない夜
疲弊した体と心は
寝床の中で意思を投げ出して
僕は赤子の様に抱かれる

橙色のまあるい灯りに照らされている
消さずに目を瞑ってしまおう

【引き出しの手紙】
レコードが回り出すように蘇った傷み
あなたに伝えたかったことがたくさんあったんだ

あなたに刻まれた鮮明で一番古い私たちはどれ？
私はあなたと初めて言葉を交わした日
ずっと惹かれていた本の一ページ目を捲るように
唯の顔見知りの物語に一瞬触れた
あなたの心を覗こうとすればいつも
自分をひた隠しにして嘘ばかり抱えたけれど
あの時頬に触れた湿った空気や胸の鼓動だけが

私には混じりけのない真実に思えるから

あなたのことが疎ましくて仕方なかった
鎧を脱げないくせ脆かった
でも本当は
あなたの傷つきやすい所を探りあてて刺す私が
幼児みたいに感情をばら撒いても
大事な声は一つも発せない私がいちばん憎い
すぐ近くにいたあなたの背中と
届けられなかった想いの前に項垂れるだけ
私は私のことが煩わしくて仕様がない

あなたには尊敬して止まない性質があった
私にはその実体を掴めなかったものを
あなたは在るに決まってると信じて疑わなかった
計画性など無いはずなのに
確信したような横顔を羨望していた
明日は何が起こるかわからない
そんな知らない誰かが言った台詞を掲げて
手放しで飛び込めなかった時を
みすみす溢れ落とした何かを
私は今更抱き抱えているんだ

あなたはお互い幼稚だったねと微笑うけど
その頬によった皺をみていると哀しい
子どもみたいに訳もなく互いを求めて
通じ合わない言葉で疑って痛めつけあって
時が流れていくのを恐がったけど
愛することに一つの恐れもなかった
今は時間も心も浪費しない術を憶えて
絶対に傷つかない領域で想い出を撫ぜるだけ
私にはあの頃の潔いふたりが眩しい

あなたに少し想像してみてほしいことがあるの
少し昔の私たちに戻れたらどうする?
きっとふたり向き合って沈黙して
お互いに違う日の空の色を浮かべている

そうやって間から溢れ落ちる時間を抱くのかも
だけど今戻れないことを判っていて考えてしまう
私たちただ隣にいて同じ景色を見られたらって

また仕舞い込むことも出来るけれど
全部抱えて生きていきたい

◆星野瑞紀　　石川県

【境界線】

十一月の太陽が
海と透明な空気に落ちるとき
世界のあらゆる境界線が消える

海と陸と
光と影と
かたちを持つものと持たないものと
同じ眩しさの中で
何もかもがその境界をなくしていく

僕と僕以外の間にも
もとから境界線なんてない
僕が海を見たり
空を見たり
何かを思い出しているとき
僕は簡単に
僕であることを忘れてしまう
ちょうど今こうして
秋の光を見つめているように

夏と秋
僕と僕以外のすべて
生と死
ほんとうは
境界線など存在しないのだ

でなければ
どうして僕らはすべてを受け入れることができる？
消えることがはじめからわかっていながら
どうして僕らは生きていることができる？

【鳥】
掌の上の鳥を見ている
鳥を見つめているその目には
掌しか映らない
今よりすこし前
僕は世界で生きていかなければならなかった

掌から鳥が飛ぶとき
鳥が僕をこえて
遠くの空へと飛び去って行くとき

　そうか
世界はこんなにも広がっていくのか

鳥は遠くなっていって
そのまま見えなくなってしまえば
そこにはただ広がりだけが残っている

鳥のいない
ただ広がりだけを持った場所で
僕は生きていく
僕は生きている

◆中川究矢　　東京都

【円周力】
冬に差しかかろうとする都心の深夜
自宅からそう遠くないバス停のベンチで

座っていた60代の女性が40代の男性に石の入った袋で殴られて死亡した
60代の女性は今年の春頃から毎夜、ベンチに座っていたらしい
40代の男性は家族が経営する酒屋を手伝っていたが、引きこもりがちだったらしい
この社会の円周力は外側に行く程、その力を強くする
一番目の円心にいるやつらが少し円心を動かすと
波状効果により、外側はより外側へと弾き出される
外側に行く程、輪郭がぼやけて行く
男性には女性の輪郭が見えていただろうか

訪れたバス停にはいくつかの花束と温飲料のペットボトルが添えられ
片隅で一眼レフカメラを携えたカメラマンが佇んでいた
昨日、40代の男性が自首したニュースが流れたので
犯人逮捕の報を受けて新たに手を合わせに来る人を狙っているのだろう
彼の撮る写真は円周の外側の力を強くする方に作用するか
内側の力を止める方に作用するか
どちらだろうか

しばらくすると、バス停には清掃員がやって来て最新の化粧品の広告が表示されたディズプレイの汚れを拭き取っていた
ぼくは写真を撮られたくなかったので心の中で手を合わせ
その場を立ち去った
街ゆく人は次々通り過ぎ
カメラマンだけがそこに佇んでいた
彼が立っているのは何周目の円周だろうか
僕が立っているのは何周目の円周だろうか
殺されてから浮かび上がった女性の輪郭を
ぼくは探している

◆アジア織子　熊本県

【たましい（旅の子の）】
おれと、旅の子のたましい
バケツの水を半分かえしたような豪雪
たましいと、ともに凍える
旅の子たち

おれと、旅の子のたましい
踊りをまわしていた花屋のひと
石段のかげりのひとつひとつ
たましいと、おれと旅の子たち
鐘がなる、なる
鐘のあと、静けさ
鐘がなる、おれと旅の子のたましい

その、たましいのいくつかの間、
降っている豪雪、積もっている時間、
誰も外には出られません
だからおれと旅の子、
たましいを抜け殻にして、
鐘をつきに戻ろう

おれと、旅の子のたましい
旅の子たちとたましい

【嵐の離陸】
あらしきたり、あした
水ぶくれだらけの目にうつる

あらしきたり、満ちたり鼻腔
鼻のはじめからおわりまで、
ひたひたに満ちたり、夢まみれの
青みがかった季節の実

あらしきたり、あした
襟元のゆるんだシャツという
青みがかった内海

はしりだす、けれど浜辺に嫌われる
はしりだす、けれど浜辺に嫌われる

【災難でしたね】
あなたは大きなあくびをする
今日、はじめてあなたの口唇が
わたしのこころまで届いた
笹舟のように大きくタッチした
そしてもとへ戻ってゆく

綿密な、綿密な計画をゆけ
たしかな、たしかな道をゆく
われら、おまえのことなんて嫌いだ
でもねパッキングされた荷物を
いまにも解かなくっちゃいけないの
「綿密な、綿密な計画をゆけ」

人類史のうえで最も完全な時代
そう簡単に変われるなんて思わぬように
なりたいものに、変身の時代
変身の時代

そんなうちに、届いたあなたの声は
カラカラと潤いがなくって、
わたしのこころを跳ねまわった

綿密な、綿密な計画をゆけ
そしてそれを、きっぱりと断れ

【かわりのいない、私のかわりに】
だったらいくらかマシ
海がうしろに寝そべって
車が走っているなら、いくらかマシ
ビーチの雀でありたいね
浜辺に花も、ウイスキーに
浜辺に花も、ウイスキーに詰め込んで

だったらいくらかマシ、だったんだ
うららららら、と走っていた雨が降っていた

あれが嘘なら
それは大きな樽、バラ
浜辺に花も、
ウイスキーにかかる虹のよう

かわりのいない、私のかわりに
せめて歌でもやってください
せめて唾でもやってください

かわりのいない、私のかわりに
せめて歌でもやってください

◆故永しほる　北海道

【自問自答】
煙に向かって
列をなして連なり
牛の消えていく
季節の場における
のどかな
それでいて陰惨な
俘虜の夢、
足跡で歩く人になり
なぜ、杖は折れたのか

明るい水を渡り
足元の
現実を咀嚼する
埋められた遺骨を
分け合っている木々、
そして森
その外縁の
暗がりから
放棄された土を
踏みしめ、沈む影、

無垢の
遠い親戚として
あてどなく
人間のようにさまよう

欠落そのものであるかのように
多く食べ
水は汚れて
なおも意味を結ばない、
虚ろな牛の目で
戸惑い、絶えず反芻し
逃げるように探した、
蔑ろにされたまなざしと
私の影が
同じ色で重なる

風景、そのすべては色で
破損した、
風を修復する
どこにいても自らで
森を抜けると
生存は
牛のかたちをして
川べりで
対岸を見つめ
微動だにしない
私の言葉になる前に
沈黙を掴んで
ただ、そこに置いた

思えばなぜ、牛であったのか
それはいつか滅ぶこと

◆Lin　群馬県

【愛～偽りの世界の中で～】
火照るデバイス　勝手に閉じる瞼
その瞬間まで握り締めている
目覚めの瞬間から今日もチェックしている
「あの子とホテル？」
これが私の毎朝の挨拶
ぐるぐると、変わらぬルーティング
飛び交うどうしようもない余計な情報網に
また今日も左右される

気にしている通知と更新に縛られる日々
「大日本帝国、一体いつからこうなった」
なんて考えるのは面倒だ

そんな中毒性あるコンテンツって
何よりのドラッグ
だけど叫んでいる
小さい画面の向こう側で
もしくは大きいかもね
それって兵器持たない弱者の救い？
だったらそれでも良いんじゃない
誰かに評価されたい訳じゃない
jpgでは伝わらない景色を君にも見せたい

捻じ曲げられ屈折しまくっていく
そんなニュースなんで信じる？
広いようで狭い世界の
言葉を信じて生きてゆく
live inネットワーク

墜とされた鉛とデータ
都会のど真ん中
命より重い事ってなんですか
火照ったデバイス何℃ですか

だけど不確かなこの世の中で
君と出会った事だけは確か
今しか感じられない事を誇りに思うよ
若き天才よ、若き兵士よ

【気まぐれな半グレ】

永遠の辟易
青天の霹靂
混沌の論理
いつの間に虜に

一人で震えてる胸
二人で叶えてく夢
夏の空を仰いで
咲くも儚し想いで

ただ音に任せて
重りは外して知るチル
我儘にサンセット
想いは馳せて信じる

暇同士で埋めてる感情も
今こうして奏でている
あんたの事

後どれ位？
もう待てない
他愛無い語り合いの度
会いたい

一般的な体裁は気にしない
いっぱい出来ない事をしたい

後どれ位？
もう待ってない？
解り合えないこの旅

泣きたい

一般的な展開身に染みない
失敗で良いから抱かれたい

【まぼろし】
窓を少し開け暗闇に延びた白い影は
煙草の煙でしょうか
それとも冷たさが物語る吐息でしょうか

灰が落ちそうな程震え出した右手は
寒さからでしょうか
それとも孤独に怯える心でしょうか

連夜見上げていたオリオン座が
もうこんなにも左へ傾いたのは
移り行く季節の巡りでしょうか
それとも別れが近付く報せでしょうか

視界が霞んで星が滲んでしまったのは
煙のせいでしょうか
それとも込み上げた涙のせいでしょうか

頬に冷たさを感じるのは
見上げた時に舞い降りた雪でしょうか
それとも私が泣いているからでしょうか

こうして問いかけをしても
もう独り言になるだけ

夏の暑さに溶け合う程の愛は
やがて冬になると冷えるように
人の心もまた季節のように無常で
儚いものだと
小さな窓から広がる情景だけが
私に教えてくれるのです

もう、貴方は何処にも
居ないのですね

◆元澤一樹　沖縄県

【Sea-change】

光は白く　輪郭をぼかす
消えた火　残る灰燼の中
鈍い輝きを放つ指環の銀
孕む熱も　宿る御霊も
水晶体の働きによって屈折する
視神経を逆撫でて白飛び
まばゆいばかりの逆光が
突き刺して脳の内側
その裏面を伝って落ちる感覚だけがわかる
＊　＊　＊　＊　水彩の森は、霧深い朝に
＊　＊　＊　＊乱反射して青白く燃える
＊　＊　＊　＊　波濤の揺らめき、轟轟と
＊　＊　＊　＊天高き叫び　祈りと共に
＊　＊　＊　＊　震え、痺れる手指は凍え
＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊
＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊
残酷な手筈で配置され、飾られ
奉られる贄は肉の柔らかな女が好ましい
女の召す装束は清く、純潔な白妙
その年はじめの夏蚕（なつご）から取れた
紬糸で丁寧に編まれた一張羅
椿油を塗って結った髪の美しき黒色

鼈甲の簪、白粉と紅
つつましき微笑み
沈黙によって継承される祈り
命の瞬きは凪を割く細波によって消され
月夜の浜には、誰の足跡さえ許されない
＊　＊　＊　＊　＊　＊
鼓膜を細かく揺らす風は
白昼の水気を僅かに帯びて温か
月は水面にぼんやり浮かび
その真ん中を魚影が跳ねる
背面で（透明な女の気配を感じながら
それは（視覚の反対側で、常に
大小様々な　＊　＊　＊　＊　藪は風に震え）
幾千匹もの　＊　＊　＊　夜、影に変わる
ヤドカリが　＊　＊　＊　＊
かちゃかちゃ、音を立てて蠢きながら
砂浜を散り散りに闊歩する様は
まるで地面そのものが脈動し
意図を持って移動しているような錯覚に陥る
（巨大な肉の、生き物の高温多湿の息づかい）
木精の落ち窪んだ深黒の目口
空気にとろけた爪が指す、私は
男でも女でも、神でも獣でもない姿で
立ったまま金縛りにあう
無数の手が――（目に見えない　＊　＊　＊
人の赤ん坊ほどの柔らかな指紋が）　＊　＊　＊
私の身体中に触れ、撫ぜ、揉み　＊　＊　＊
足の先から目、首筋、腋のくぼみ　＊　＊　＊
【ありとあらゆる輪郭は】瞬く間に　＊　＊　＊
それらに覆われて黒く、透けていく　＊　＊　＊

カメラで撮影されているかのような　＊　＊　＊

映像が、直接脳に挿入されている　＊　＊　＊

妙に心地が良くて、閉じゆく瞼／……／……／……／……／／／／／／どれくらい眠っていたのだろう。

何万年も動かされなかった指はすっかり硬まり、色褪せて、無理に動かそうとしたのが災いし、ひび割れたその亀裂から乳白色の瑪瑙（アゲート）。顔を覗かせた玉髄（カルセドニー）。薄水色の艶とうるおい、寒風吹き抜ける曇天の浜。

潮風に蝕まれて角の取れたコンクリートブロックにもたれかかる。すっかり石柱のようになってしまった足の関節をぴん、と伸ばしたまま持ち上げて、冬ももう終わりかけの季節を踏めば、ざっ、と白い砂に突き刺さる。子鹿のような震えとともにうまく力の入らない足が、痛いほどに、私を私、たらしめる。

関節を曲げようとすればするほど膝は鈍い音を鳴らして軋み、重たく撓み、体幹を持ってバランスよく

一歩、二歩、三歩

恐る恐る踏みしめる。

砂は、どれもかつて生命だったもの。そのかけらが打ち上げられて風化し、寄せ集まって形成されたものだと、私は、知っている。

「朝一番に、浜で石を三個拾っておいで」

ふと、どこからか母の声が聞こえた気がして、辺りを見回せば、足元にある、或る白い石の塊から、病に倒れた母の面影を見た。

それだけではない。

あそこの大岩は戦死した兄、その横にある乾いた海藻がこびりついた石からは父。向こうの岩は遺影でしか見たことがなかった祖父の面影があり、熟れたアダンの実のすぐ下には、大叔母の小石と年の離れたいとこの姉さん。そして、驚くことに、あそこの断崖から、にゅっと突き出た人間の手足のような石像からは、私の知らない私の孫や子どもの面影が残っているではないか。

石化した指で触れても感覚はない。しかし、一目見たそれは冷たくざらついており、とても軽く、そして美しかった。

肉体はあっさりと動物の牲となり、喰われ、腐敗し、とろけて溶けたが、残った骨や爪や歯は、さらに長い年月をかけて割れ、欠け、砕けては風化し、丸くなる。漂白され、朽ちた者

たちの慣れの果てがそこかしこで沈黙し、硬い足裏で踏めば、遠くに郷愁のごとき翡翠の音が鳴り響いては、波に消え去る。
この真白な浜をかたち作っている数多の命の上に立つ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「骨はサンゴに
目玉は真珠に
変わるわ。
だから
怖がらないで」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊
＊　＊　＊　＊　＊　＊
　＊　シー・チェンジ　＊　＊　＊　＊　＊　神様も、獣も　＊
＊
　＊　シー・チェンジ　＊　＊　＊　＊
＊　＊　怖がらなくていい　＊　＊
　＊　＊　＊　＊　＊
＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

エアリアルの歌声は泡に
空気は上に、海面に昇り
はじけた夜の水面にひとり
ひとつの月が光を降らす
崖（バンタ）に波濤は弔鐘として
石菊（イシヂク）の花　海神（わだつみ）を待つ

◆今村崇人　東京都

【都市に降る雨】

雨が歩道を愉快気に踏み鳴らした
道行く人は傘を持たずしかめ面でオフィスへと向かう。
三人組の女子大生が仲良く一つの傘に収まっていた
右の一人は丸々と太っていて、体のはみ出た部分を雨が容赦なく打った。

老人が突然足を踏み鳴らした。
煤にまみれた鳩が仰々しく翼をはためかせ、一瞬宙に浮いた。
男は突然の出来事に顔をのけぞらせ、近くの電柱に軽く体をぶつけた。
老人はにやりと笑い、軽快な足取りで道をまっすぐ進んでいった。

雨脚はますます強くなり、視界は曇った。
男は道の端に佇む美女に目を止めた。
女は侮蔑の笑みを浮かべてその場を去った。

時計の針はもうすぐ一時を指そうとしていた。
男の足取りはせわしなく、何かを探すように辺りをさまよった。
同じ道を三回辿り、忘れていた約束をふと思い出し、また忘れた。

【或る工業都市の夜明け】

気が付くと
浜辺にいた
濁った海が低い調子で
寄せては返す

缶を蹴って
市場へ向かえど
人気のない通りには
鳩も猫の姿もなかった
煙突から煙がぼうぼうと昇っていた
大型トラックが国道を通る音が響いた
コンビニエンスストアの光が
やけに生き生きとしていた
気だるい駅前通りは

のろのろとその日を過ごし始めていた
窓ガラスに朝日が跳ねて
ずっと忘れていた歌をまた思い出した

学ランを着た坊主が
気だるげに高架線を抜けた
おそろいのジャージが
いくつも道を通る
線路がガタガタと軋み
貨物列車がガタゴトと威勢よく行進していく
自動車がいくつも行き交い
都市は朝を迎えた

◆水庭真美　茨城県

【天国一丁目】

あまいきゃべつを知っているか
それはみずみずしく、重たくてつめたい、頭のことをいう
今日、おれの頭はあまいきゃべつである

耳毛のはえたヤギがこちらを見ている
首をきっかり九十度に曲げ、瞳孔の向きを合わせてくれている
どうも、ありがとう

実家には業務用の冷蔵庫があると、ヤギは言った
黄色い砂にうずもれるように、いる
高性能のコンピューターを搭載した、ただの冷蔵庫
野菜室の中に、ヒュウ肉とヒュウ乳が入っている
ミルク煮をたべたくなった天使が妊娠させた
三びきの牝のヒュウ

ばらばらにされたヒュウは、他のヒュウを見てはじめて
ほんとうの自分の姿を知る
それは、まあ、いわゆる
それは、まあ、いわゆる、ただの天体であったと

自らの乳に煮込まれるその日まで
誰のものかわからない足先を慈しみながら
実態のないあなたと、実態のないわたしを弔い
ことばを交わす
アルベド
これを文化というのだろうか

ヤギの実家では
太陽と月と地球が一緒になって冷蔵され
芳醇な希望にくるまって夢を見ているという

天使は、歯列矯正がおわったらミルク煮をたべる
浮きでた背骨と小さな前歯に銀色のワイヤーをつけて
ヒュウを狩りに旅にでる
野生の花畑、といった矛盾した偶然の後付けと同じくらい
ふ、とおとずれる突然をつくりに

天使の羽音が近づいてくる気がして
おれはあまくなくなった葉を一枚むしってヤギにあげた
どうも、ありがとう

◆芦野夕狩　愛知県

【巨人が踊っている】

僕たちは幼い子供のように紐靴のかかとを踏みながら、聞き取ることのできない中国語をかき分けていく。煤に覆われたビルディングの2階で、時代遅れのタランティーノの映画が流れているから。朝日が昇るまで終わらないレイトショーの、不愛想な光の中でどこまでも漂流を続けられるような気がしていた。

吸殻を夜に向かって高く弾く。その火が紺青を引っ掻いている間だけ、僕たちはインディアンのように高らかに奇声をあげる。それは夏の花火のように、つまり命の儚さのように、とどめられて、それ故に美しいものだと信じているみたいだ。けれども、ひとりのタイタンが地をならし、天幕が別たれ分厚いカーテンのように揺れると、僕たちはただ夜に縫い付けられた羽虫だった。街中のコンビニで百円ライターと花火を万引きしてまわった。

季節性のインフルエンザのような宗教を口遊んで、取り返しのつかない熱に侵されていく。輪になって、手を取り合って、隣の子供のうでがぽろりと捥げる。もっと素早く、もっと軽快に踊らないと大切な身体が腐り落ちてしまうから、隣の子供の腕を引っこ抜き、ぶつかり合う肩が豆腐のように崩れる。

すべてのタイタンが踊り出す夜に、ミニチュアの街とただ純粋な光であるはずのネオンが砂礫とともに崩れ落ちていく。ほろほろと、窓枠に降り積もった雪が朝の陽ざしのなかで柔らかな音を立て消え去っていくように。聞こえているのは、その崩落のなかで子供たちが熱に浮かされ乍ら幻を唄っている微かな声。

◆黒田菜月　茨城県

【ハレルヤ】

私の思いに呼応するように幾度も
太陽の瞬きがハレルヤハレルヤと

おお、神が応えてくれているのか
ああ、悪魔の囁きなのか

私にはどちらなのか一生分からないだろう

存在自体が原罪だと下されたあの日から
私の如何なる行動も虚無になり
死さえも許されない罪人であり
終わりのない苦しみと共に生きている

かけがえのないあの人を手放せば
少しは楽になるのだろうか

それでもあの日聞こえた幻聴は
許されることはないのだと何度も何度も繰り返し私を責め続けた

一番してはならないことは
自分を犠牲にして欺瞞を働くことだった

それは私の虚栄心が選んだ私の中の正論だった

自分さえ犠牲にしていれば
必ず全てが報われる日が来るのだと
信じて自ら地獄へと堕ちていった

昼は悪魔と手を繋いで狂瀾し、
夜は神を縋って大いなる希望を願い、
天使の膝に泣き伏した日々よ

私の身体は暗闇に包まれて
夜毎、悪霊に魘される

ほら、ベッドの脇の階段から
骸骨が列を作って、不快な音を鳴らしながら
カラカラと上がってくる

私の魂を連れ去るために、
あくまでも楽しげに誘ってくる

必死に抵抗して朝を迎えても
苦い苦い毎日は今日も繰り返される

これだけ汚れた私に光が差し込む日がくるのだろうか

赦しを得る日がくるのだろうか

あのとき世界は私を全力で拒絶して、
そのくせ私にはこれでもかと求めてくる

もういっそのこと
あの太陽も瞬きに全て包まれて
そのまま何もかも消えてしまえばいいのに！

◆高倉麻耶　　愛知県

【幻の人生】

幻をみていた
つくり話ばかり
ほんとうのことを知らなかった
誰かの嘘を信じていた
確かめもせず
確かめる手段も持たず
疑うこともなく
生きていればいいことあるって
信じあえる相手はいるって
人は裏切らないって
かっこいい大人はいるって
味方になってくれる人はいるって
そう思ってた
ぜんぶ嘘だった
誰も信じるべきじゃなかった
傷つけられるだけだった
守ってくれる人なんかいなかった
ただ
愛したい人が一人だけいて
その人にわたしはつまらない嘘をついてしまって
でもその人は許してくれて
だけどがっかりさせてしまったことが
自分で許せなくって
泣きたくて、泣いた
この人だけは幻じゃない
黙って勝手に涙がこぼれる
止められない
嘘なんかつかなきゃよかった
愛してるよって
その人が言うたびに
悲しくて、悲しくて
つらくて、つらくて
しんどくて
幻じゃないほんとうの人生を

初めて知った
このままじゃ終われない
否定されたら
傷つくから
言えないことを
でも伝えたい
伝えなければ
許してくれるからって
甘えていたら
そのうち心が離れてしまう
愛してるよって
わたしが言うたびに
ほんとうのことを言っているはずなのに
嘘をついているような気がして
伝えられない
あなたに

◆七　まどか　　千葉県

【燠】

北風に揺れるナナカマドは
私に生殺与奪の権を握らせた
一粒の実が私を試すかのように
アスファルトの上を可憐に転がる
履き古したハイヒールの
擦り減った踵（かかと）を突き立てると
生憎、致命傷になったようで
今まで連れ添った街路樹たちに
「サヨウナラ」と告げていた
無知蒙昧な私は
その意味に気付くことができぬまま
冬が来る

すべての生命が色を亡くす冬に
ナナカマドの赤色だけが
恨みがましく私を見つめている
鮮烈な色に中(あ)てられて
忘れかけていた熱情の燠(おきび)が
腸(はらわた)の奥で燻り出す

◆秋雨一也　沖縄県

【勿忘草】

夜空に一本の流星が流れた日。
二人の好きな花が落ちた。
去りゆく、君の姿を追いかけるように
お別れの言葉が口から零れると
また、続きが一つ途絶えた。

一人には大きすぎるベッド。
冷え切った鉛の身体を引きずり
寝るために入り込むが
閉じた目蓋の裏で
蜃気楼が思い出を映し出す
日々、長くなる夜が過ぎ、朝を迎えた。
にじんだままの眠気まなこ
諦めきれず、夕方にまた泣いた
「早く忘れないと」思いながら
ふと、面影探す。

窓越しの向こう
降り落ちる枯れ葉十色
風に吹かれ、地面の上走った
僕さえ追い越し、先へ進んでいく
あの日のループ、続けられないと想い知る。

未だ眠れず夜の寒空を
気まぐれに覗き込むと
あの日と同じ彗星が
次は群れとなって流れた
持て余した僕だけの愁いをさらう。
一頻り降っていた内側の涙雨も
いつの間にか止んで
温もりを纏った雲の隙間から
差し込む天の柱の中
探していた君の姿見つける。

◆福島秋樹　　東京都

【パーフェクト・ワールド】
知りたくもなかったが赤い夕焼け胸に焼け暗いトンネル潜ってからは見つめてしまう
のはふとした午後で退屈な悲しみとは一緒になれない
週末に会おうまたいつものようにその明かるさのまま
鈍い痛みを木の椅子の背に預けながら
私はあの声が届くのをじっと待つ
雪が屋根に膨らみ空気が微かに冷えだすと部屋の一点が細く尖る
あなたと会えるのはこんな日ばかりだ
十月
考えていたことがあったのだろうか突然深まって荒涼と
私に向かいあなたはよく言ったものだ
「どうしてビルの下にいつもいるの」
「怖くはないの」
排泄を見せつけ恥ずかしげもなく微笑みかけて
椅子から離れてまた顔を馬鹿みたいに寄せ合って
笑った
それで幾つか思っていたことを少しは話した気がする
よく憶えていないが乗った電車に人が飛び込んで
轢かれて粉々になったこととか
微睡んでいたこと
部屋から見える雪がすごいこと

決定された不潔な返事を安堵の為に欲しがって
祈った
夜は長かった
膝を折り窓を眺め引っ張ってきた動物の毛布にくるまったら一枚の薄いレンズ
が記憶の中のあなたをきりとる
パーパスが実態もなく私の皮膚に刺さり映し出す
「今度は眠ろう」
ドアノブを手で回すといっそう部屋は充ちていく
私はあなたの声を待っている

◆オノカオル　東京都

【リレー】
ある日、父が倒れた。
発見が遅れて、死にかけた。

からだの半分が動かなくなり、
車椅子に乗るようになり、
口数が少なくなった。

オムツをするようになった。
食事をよくこぼすようになった。
ひとりでお風呂に入れなくなった。

それでも、家族の時間がふえていった。
失ったものだけじゃない、と思えた。

またある日、息子が生まれた。
予定より何ヶ月も先に出てきて、死にかけた。

少年ジャンプよりも軽く生まれ、
たくさんの管やセンサーでつながれ、
声を出して泣くことさえできなかった。

オムツを替えてやる。

ミルクを飲ませてやる。
お風呂に入れてやる。

少しずつ、できることがふえていった。
取り戻せるものだけに、目を向けた。

父はよく泣くようになり、
息子はようやく泣けるようになった。

父は杖をついて歩けるようになり、
息子は肘をついて床を這うようになった。

そしてある日、父が息子に会いにきた。
父は泣いて、息子は笑った。

できるようになることと、
できなくなっていくことと。

僕らはそれを繰り返す。
脈々と繰り返す。生まれてから死ぬまで。

泣きじゃくる息子を抱き上げるそのとき、
すっかり細くなった父のからだのぬくもりを、
この手にたしかに思い出すのだ。

◆クロダセンソ　北海道

【何もない】

何もない夜よ来い　吐き気のない夜よ来い
バスはすでに発車してるけど多分大丈夫
問題なく夕闇の中月の予感を感じているんだよ
誰かの座っていたシートの温もりが僕をひとりにして
「純粋になりたい」本の一節を繰り返す
いつもよりオレンジ色のいつもと違ういつもの街
あの子はこの瞬間何を考えているんだろう

宇宙はとうに弾けて消えた残像に引火した
その瞬間誰かが停車のボタンを押した

何もない夜よ来い　吐き気のない夜よ来い
雑に描いた似顔絵で世界を切り取っていたら
鞭打ちのような夕闇に誰もが溶けていくようだ
影を置いてきぼりにした都会の夜は生温く
時計は秒針だけが正確に刻み続ける
辿り着けない場所に立つ気持ちが手に取るようにわかるのは
濁った瞳に反射した窓のネオンサイン
イマジネーションが全てを全てを逆立ちして見せる
悲しみと怒りの中で　悲しみと怒りの中で

何もない夜よ来い　吐き気のない夜よ来い
僕らはもう会えないけど多分大丈夫
記憶の素描に思い通りに色は塗れるから
それは最後の酒を飲み干して店から出て行く理由を
ベッドの上で想像する架空の物語
勝ったものが勝ち続け負けたものは負け続ける
関係なく僕はいま冷たいコンクリートに嘘を注ぎ続けるんだ
路上から見える顔は抱えきれない憂鬱と星空が鳴らすコンチェルト
何もない夜よ来い　吐き気のない夜よ来い

◆浜　千鳥　　愛知県

【またね】
なんでもないある日のまちで
そこかしこで聞こえる
「じゃ、また」
私は母に
軽く手を振って

かつてこの言葉が
これほどまでに質量をもったことがあっただろうか
言葉が軽んじられるはずの現代で

1年前には目白の羽より軽かった
今では日本中のスクラップ工場の鉄くずを集めても
まだ足りない
「またね」

私はいつまで覚えていられるかしら
背を向け駅に向かうあなたの
笑顔を
こえを
瞳の色を
次はガラス越しかもしれない
あなたの手の温度を
生きて会おうね
「また、こんど」

それではみなさん
お元気で
また会う日まで

◆中内亮玄　福井県

【パンデミック・コロナ】
満月に凪いだ人波

道行くは魚
目玉ばかりが
泳いでいる町

どろんと重い春の風が
ごほん
と、
どこからか天罰を運ぶ

はらわたが道に落ちている
誰もが踏まぬように行き過ぎる

君は廻って
俺は跨いで

誰もが誰もを
じっと眺めて
穴があくまで
許せずにいる

満月に凪いだ人波

世界と距離をとる遊び

◆小林　新潟県

【白日の下の】

欠如のない晴れ　今　青くない物の一つも無い　春の空には何故
漂白剤の匂いがするのは何故

ぼくは　ぼくの細胞を満たす物の名前を一つも言えないまま
ツルツルと滑落する本日の表層
その余白であれば　出発地点は最初から白かったのだろう

ふかふかの白日の下を踏む　足跡はすぐ元通りになる
行き先など無い　凭れるための椅子も
首を擡げる朝だけが　果てしのない不愉快
煙草なんて吸うんじゃなかった
けれどもぼくは
もはや　くそみたいな喫煙者の一人
粛々と着火するといい　あるいは
こんなのもう止めてくれ
灰も残らずに燃え尽きてゆくのに
言葉ばかりが吸い殻のように散らかって
どんな結末へも達したことがない

アー　去来去来去来　つまりは虚しさだってそんな明滅

つま先の方ばかり向いている　雨が止めば誰だって空を見上げる
すれば光を　見做すだけのこと

テレビはずっと付けっ放しだったのです　その前から居なくなったのは、

少し思い出し笑いをする　横顔のよこしまな歪み　白々し気なその微笑み

おはようございます
雨が　止みましたね

幽霊ども
あぁ　所作　所作

【喋る・生命体】
もう
目撃者になどなるものか

枕のはち切れた朝
床には
散らばったはずの　綿がない

鳥は
海のみえる　この街の
低空ばかりを飛びまわっている
流れてゆく川の
底には　澱みつづける泥
点けてもいない
テレビがうるせえ
何を　喋ることがあるだろうか
そんな事ばかり

朝を　頷かれてしまうまで
ぼくは
寝惚けまなこを
擦る　生命体だった？

狂いがあるのは
瞬きの速度と　呼吸法だけ
ぼくは　限りなく軽薄であろう
どこまでも　上の空に
せーので
嘯く　生命体であろう
イメージだって
用意は済まされていたのだ
まるで
真水のように手触りのないまま

あぁ　天気予報
その予報
予兆　ばかりが
どうしてこれほどまでに
うるせえのか

ぼくは　結局
騒擾にうろたえているだけの
街の噤む　次の瞬間
蛇口から漏れる水道水が
一人きり　鳴っていたらいいな
などと
想うのみの　生命体なのか？

何一つ　悪行には及ばない
ことの何よりも
心臓を把握するように触れまわす
ぼくの悪意なのだ

不意に　光のつらぬいた
そこはあらかじめ
凪
ぼくら
喋る　生命体だった

ゆえに街に　話し声は尽きない

それは　自惚れた冗談？
まだ　寝惚けてる？

【光は束】
バスに
うたた寝に
揺られながらもどこかで
密室の、椅子に凭れている
きみ。ぱちくりとまばたきをする。
目を
こすったりする間隔が軋みはじめても
埃っぽくなってゆく日々の
表面をさっと払うだけの手のひらは
どこへも繋がれてはいなかった。
そうだろ　だって今
椅子に

腰掛けているのだから。
寂しさなんて窓、
をつたう雨垂れと変わらないんだ。
ほら
そこらじゅう
まどろみによってひたされていますね。
これは街のみた夢なんです。
きみの、歩けばそこは墓場になるという
誇大妄想だよ。
あるいは
味のしない水道水を飲み干すことの
ときには　ぱっと捕まえたように
まるで目の当たりにしたような
そんな素振りで
きみに話をしてもいいですか。
ぼくの、靴底が滑って歩きづらいよ。
ゆえに遅刻するのだろうか。
この遡行とも思われる濡れた街路の、

上に。どうだっていい。
きみの
部屋のカーペットの質感を教えてくれ。
同じのを買いたいんだ、でも
唇からこぼれては形をなくした
きみの部屋の夜明け
ぼくはいまも椅子に凭れかかっています。
ね。
もうバスがついたよ。
だからさよなら。
また明日までさよなら。
さようなら。
さよなら、都市景観の外側にて
雪となって降りしきるいくつもの朝。
より合わされていなければ、
何もほどけたりしない。
だから、はぐれるための景色がない。
べつの朝なんてどこにもない
ことの　ぼくたちの遠く隔たりさえも、
光であるならば。
光の
つらぬいた一節であるならば。

この風景のささくれ
は　ぼくの指先のものだろう。

◆時北糸菫　　宮城県

①『無題』

いつか見たドラマの中で誰かが言った。
「この世で一番哀しいもの　それは忘れ去られた女だ」と。

忘れ去られた女ーそれは私。

誰に気にされることもなく 忘れ去られるその哀しさは

生まれながらに内包されていたみたいに いつもそこに在る。

友の、母の、そして青い私が恋焦がれたあの人の、その記憶の海原で
“私”という名の半透明な存在は あわれ泡となり消えてゆく。

あたりまえのように そっと そっと 音もたてずに消えてゆく。

②『無題』

何気なく見上げる澄んだ空では今夜も数多の星が輝きを放っている。

中でも 頼りなく輝いているあの星は
もしかしたら遥か遠い昔に もう消滅してしまっているのかも知れない。

そう。
あの小さな光は今はもう存在していないのかも知れないのだ。

見えるはずのないモノがそこに確認できる その不思議。

それは例えば、
命の限りを尽くして生きた大切な人たちの肉体が終わりを迎え、冷たい土の下に眠っている今もなお
私の心の中からは決して消えはしないことと同じなのかも知れない。

星の瞬きは命の瞬き。

遥か昔に実体を失くしたかも知れない煌めきと
遠い場所へ逝ってしまっても いつもそばにある彼らの存在。
どちらも同じように光を放ち続ける。

私がここにいて、頭を上げ 生きていく限り、ずっと 永遠に。

③『無題』

私の夢って何だったろう？

何も知らない小さな頃は歌手に憧れ、物書きにも憧れた。

そのうちに何も持たない自分を知り、夢はソーダの泡みたいに消えていった。

ある日、部屋の片隅に転がったままの“夢”を見つけた。
古びてるけれど まだふわふわの その外側をすっかり剥いてしまうと
何の飾りっ気もない不格好な種が現れた。

その一粒をちっちゃな鉢に植え、水を与え、陽に当てる。
きれいな音楽を奏で 聴かせてあげることはできないけれど
その代わり、
心にためた言葉を紡ぎ 語りかけよう。
例えそれが稚拙なものでも。

心を込めて。

④『無題』

あの人を想うなら六月の夜がいい

あの人の名をつぶやくならば雨の夜がいい

きっと 屋根を叩く雨の音にかき消され

誰にも聞こえはしないから

⑤『無題』

街を渡る 少しだけ強い風
流されていく夏の雲

あの人への想いも あの雲みたいに消えてくれないだろうか
初めから何も無かったかのように、跡形もなく

⑥『無題』

アパートのベランダの植木鉢には 真白い小さなバラ。
一輪だけ空を見上げ その花を咲かせている。

時折吹く風に 微かに震える白く小さなバラの花。
悲しいくらい青く抜ける空の下、たった一輪。

バラも 私も。　空の下。

⑦『無題』

一度も好きと言葉にできず別れてしまったあの人は
いまだ私の心を支配したまま。

風が木々を揺らし 鳥が空を渡り 木枯らしが頬を凍らせるその時も。
また、さんざめく街の喧騒に心細くなる その時も。

どんな時も どんな時も

心に浮かぶのはあの人の姿。
耳をかすめるのはあの人の声。

どうしても、どうしても好きと伝えられなかったあの人と会うことは
きっともう叶わない。
それでも私はずっと想い続けるだろう。

ずっと。ずっと。ずっと。

◆しいな育香　　京都府

【ヤモリの月光浴】

雨戸を締め切ったベッドの上
スマホを片手に身を隠すように夜を待つ

僕は日光が苦手だけれど
月の光が大好きで
「光属性」のキャラを育てている
敵に「闇属性」が現れると息をのむ

「光」は「闇」に強くて弱い
ゲームの中では「光」と「闇」は対立関係
「水」は「火」に強い
「火」は「木」に強い
「木」は「水」に強い
連鎖関係は、支えあい、助け合いという名の傷の舐め合い
学校と同じ
同じ制服、同じ教科書、同じスケジュール
どこかで誰かに弱みを握られ
どこかで誰かのあらさがし
鎖を切らさないように
はみ出さないように
誰もが、ただそこに居る

陽が沈み夜が訪れる
長いながい昼の終わり
夜空に月が輝く
息をすることを許された僕は外に出た

真上の空に三日月
真横の壁にヤモリ
月の光に照らされたヤモリの背中は、白く気高く輝いている
意志を持ったように、まっすぐ壁を見据える大きなまるい瞳
小さな手は、どれほどの強い力で、冷たく固いその壁を掴んでいるのだろう

壁に近づき、ヤモリと目を合わせてみる
逃げると思ったけれど
白い背中をふるわせて、大きな瞳を僕に向けたまま
ヤモリはそこに居る

明日こそは学校へ行こう
そしてまた夜に会おう

◆幸あゆみ　大分県

【漆黒の我】

世界が黒い闇に沈めと
願う漆黒の我が有る
青い地球さえ漆黒では無いかと
感じら我が居る
そう願う我も居る

コノミの存在すら疎ましく
地上に存在して無いのではと
思い語りかける我も居る

未来が真っ暗闇で何が悪いのかと
問う我も居る

キツイ　苦しい　辛い　嫌　嫌　嫌
生きてる証でしょと語る我も居る
そんな時　我を愛し　褒めて

真っ赤な愛で眩しくて
前が閉ざされ扉が開けれずに
前に進めずに
見えなくなるかもよ
ふふふ父

そんな扉だから
開けてみるのも
いいんじゃない
ははは母

【アイツ　が嫌いだ】

アイツが嫌いだ
見るだけで吐き気がした
あの毒に塗れたあの目つきが
血流を悪くし吐き気を

アイツの人を妬ましく見る目
アイツの澱み切ったどす黒い目

あの視線から常に逃げ様と
あの頃は必死だった

私が何を抱え何を思い
どんな病と向き合い
必死に前を向き歩いて居る事
など見えもせず
ただ　アイツの尺度だけで
物事　見るアイツの眼圧が

嫌いだ
それを必死に交わそうとする
我も嫌いだ

ただ人の世は其れを　ひたかくす
方が生きやすくなって居る
嫌いなアイツの目の方が
本能むき出しで生きているのかも
知れない
アイツにとって格好の餌食に
なってる我も

それらしく
それらしく
生きている
アイツの目のお陰で
色々なものが見える様に
なったのは残念ながら事実で…

【絶望からの脱却（希望の種）】
これを感じなければ希望が見えない
見える程　器用な人間でも無い

真っ黒な　画像は憂鬱だ
真っ黒な　背景は時には主役をも食う
イヤ主役だったのかも知れない

真っ黒な花瓶に　真っ赤な薔薇
真っ黒な雲に　　華やかな花火
雨は降る　風は吹く　雲は流れる
雲のひび割れから光のシャワーを浴び

さあ　希望の種を撒こう
さあ　背に光を受けて

パーっと　希望の種を蒔き散らし
芽吹き達の息吹を聞こうではないか
バルーンフラワーが優しく微笑み
紫色の柔らかな景色を奏でる

希望を失い　光が見えない
雷騰雲奔　　とどまりはしない
気がついて　雲の小さな隙間から…。

【カラフルな毒キノコ】
ある流行病に効くカラフルなキノコ
があるらしいどこの山だか知ら

只　そのドス黒いモノを口にすると
　　どんな流行り病もたちまち治る様だ
只　ドス黒いくせに心が澄んだモノだけ
　　にしか見る事採る事が出来ない
カラフルな時に収穫すると
それはそれは手の中で枯れ果て
その手が被れてしまうらしく
口にするなど恐ろしく

怖バラ　怖ばら　ばらである

怖ばら　怖バラ　バラで有る

只　そのキノコとの出会いは
　その人にとり大事な転機の時の様で
いつどんな時に出没するかは分からない

只　そのキノコは流行り病を完治させる
　その人にとって大きな病は
いつどんな時に手に入れても完治する様だ

自分だけで無く愛するモノなら
命の輝きが有るモノには
病全般には手にすると効くらしい

只　その気高き山が何処に有るのか
只　その険しき山なのかも分からない
登るのか　下るのかも分からない

あっそう言えば　昨日紅葉を見に
確か変わった色の綺麗な色のキノコが
嫌　川土手を歩きの途中
確か　金色に輝くキノコを見た確かに

只　カラフルな色と言うだけで
その色が何色かが分からない
只　どんな流行り病も完治させる様

普段なら見ませぬキノコに目をやる
欲深い心あり今のこの目には
見る事は出来ないのかと

鮮やかな紅葉を目にし心が温まり
心の中に光が差し込む
もう少し生きて行けそうだ

◆海月透子　　富山県

【システム】
ハローハロー
なんてことはないただの生存確認です
生キルと死ヌを繰り返して
私たちは地球の上に立っている
ハローハロー
あと数時間の寿命です
氷が溶けて薄くなってしまったアイスティーみたいに
薄っぺらい心で愛して
宇宙人が攻めてくる前に
全部滅びてしまえば問題はないよ
なんてことはないただの死亡確認です
ハローハロー
誰かこの声が届いていますか
システムオールグリーン
さよなら

【秋空】
あの日
貴方と観に行った彼岸花はきっと
今頃雨に打たれているのでしょう
雨粒が光る花がガラス細工みたいで綺麗だってこと、知ってた？
コンビニで食べるおにぎりの味に舌が慣れてしまったら
生まれる前にはもう戻れないのでしょう
留まらないモノ
風と水と
時間とわたし
透明ではいられないね
わたしも貴方も

【青春】
プラスチックの入れ物に詰められたこころは
添加物にまみれて虹色に輝いていた

宝物のように
スプーンで掬って丸呑みにする
ジャンクフードみたいな恋をしよう
長すぎる寿命を削って
ドライブスルーみたいな簡単な恋をしよう
呼吸をし続ける限り死にはしない
最低だね
キスの値段はプライスレス
タダより高いものはないよ

【アイスクリーム】
間違えて冷凍庫で凍らせてしまった
ごめんね
消エタイや死ニタイは
逢イタイよりも口にするのが難しくて
気が付いたら日付が変わっているって
言ったら君は信じてくれますか
体重が減った分だけこころが死んだ
ストロベリー
こころ、やっぱり凍らせて正解だったね
思ったよりも美味しかった

【辞書】
電子辞書って便利だね
君の感情も全部載っていたらいいのに、なんて考えていたら階段から転げ落ちた
きっと明日は土砂降りだよ
ライターの火を点ける音がした
髪が焦げる匂いは夏が死んだあとの匂いに似ている、なんて考えていたら眩暈がした
全部君が見せた幻なんです
そう言い切ってしまえたら世界はきっと優しい
電子辞書って便利だね
私の死因も全部載っていたらいいのに

【嫉妬】
マグマみたい
あの子もその子も
みんな誰かの二番煎じだよ
流行の服を着て流行の髪形をして
流行の歌を聴いて流行の場所に行って
流行の映画を観て流行の話をする
あの子もその子も
みんな誰かの模倣品だよ
流行の絵を描きなさい
流行の物を食べなさい
流行の詩を書きなさい
流行の恋を謳いなさい
わたしも誰かになれば愛されますか
わたしも何かになれば認められますか
泥に汚れず　綺麗なままでいられますか
個に溢れて個は死んでいく
みんな息をしながら死んでいるんだよ
なんで気付かないの
嫉妬
マグマみたい
火傷で済めばいいね
ざまあみろ

【二十代中間】
飽きるくらい可愛いって言ってよ
藤色のマニキュア
紅梅の耳飾り
誰よりもおんなのこでいてあげる
桃色の口紅
夜を切り取ったワンピース
飽きるくらい可愛いって言ってよ
おんなのこのまま死んであげる

【夢見る】

みんな悲劇のヒロインだよ
グレーの灰になるだけ
穏やかに燃え尽きよう
門限なんて知らない
帰り道はひとりきり
飲みなれない珈琲なんて飲むものじゃないね
甘くて苦い君のせい
みんな最後はハッピーエンドだよ
将来の夢は死ぬことです
君の精子に染められて
綺麗なまま死ぬことです

【取捨選択】

私が選ばなかったもうひとりの私
貴方は今幸せですか
貴方が見る幸せは何色ですか
貴方が選ばなかった私は生温い浴槽の中で深海を彷徨っています
私は私を愛せなかったけど
私は貴方を愛していました
これは告白です
ひとつになれなかった私への
これは遺書です
今日死んでいく私への
これは遺言です
明日生まれてくる私への
私が選ばなかった私
絶望しないでください
浴槽の底に沈む理想郷に、ぎんいろの泡に
こころ奪われないで

◆井中冬夜　　福井県

【無】

何も見えない何も聞こえない
自分の姿も周りの声も
何も感じない何も触れられない
温かな心も誰かの優しさも

孤独が波のように押し寄せ
寂しさが胸いっぱいに広がる
何もかもしたくない
自分の意識すら失くしてしまいたい

呼吸も食事も寝るのも
それら全てが苦痛で
誰の目にも見えないけれど
止めどなく涙は流れている

狂ってしまいそうなこの激情を
自らに押し留めるのは
あまりにも困難で
私は笑顔という仮面で隠した

使い古されてボロボロの仮面
ひび割れてしまったそれは
いつか壊れてしまうでしょう
きっと私が死んだその時に

【溺れる】

苦しくて苦しくて
息が上手く出来なくて
ずっと水中にいるようで
蹠いても蹠いても
息苦しさも気持ち悪さも
消えずに残ったまま

永遠と続く地獄
誰かにとっては天国なのに
私にとっては地獄でしかない
私という自我が無くなれば
こんな苦しみも悲しみも
何もかもなくなるのかな

【呟き】
何かが可笑しくて
何かが狂っていて
何かが笑っていて
誰かが泣いていた

たくさん愛されたくて
でも愛されたくなくて
どこか矛盾していて
だけど嘘も吐いていた

空想の中でしか生きられなくて
それをくだらないと嘲笑う声
閉じこもって小さく丸くなって
それでも笑い声は消えない

空気を吸っているのに
息がしづらくて苦しくて
何も吐き出せないのに
誰かに縋りつくしかないんだ

【大晦日】
何がおめでたいのか
僕にはさっぱりわからない
だけど何処も彼処も祝ってる
捻くれ者の僕だけを除いて
毎年楽しみにしてる番組

今年はいつもと違ってて
楽しいはずなのに楽しくない
それは僕が捻くれ者だからだ

夢を見すぎた僕を誰かが嘲笑う
いいかげん現実を見ろと言ってくる
だけど僕はやめられない
やめたら僕は死んでしまうから

喜びという感情はもう失った
捻くれ者の僕に残っているのは
孤独と虚しさと哀しみだけだ
嗚呼、僕はもう死んでいたのか

【ルーティーン】
午後12時過ぎに遅めの起床
眠気覚ましにスマホいじって
いつも通り無駄な時間を過ごす
そんな感じで今日も孤独と戦ってます

暇つぶしのゲームにログイン
欠伸しながらスマホをタップ
一応LINEを確認するけど
友達からは全く来ない

あれあれ?何をしてたっけ?
変わらない日々を過ごしすぎて
思わず吐きそうになっちゃった

視界がクラクラしちゃうくらい
スマホばっかりいじりまくって
つまんないやって呟いたって
誰も反応してくれない

ごめんねって謝っちゃうくらい
私は自分をクズだと思うよ

今日は何をしていたの？
そんなこと私に聞かないで

午前０時過ぎにベッドで就寝
眠れないからスマホいじって
いつも通り秘密の時間を過ごす
そんな感じで今日も自分と戦ってます

無課金目指してゲームにログイン
目を擦りながらスマホをタップ
一応 LINE も確認するけど
広告ばっかり誰からも来ない

あれあれ？何をしてるっけ？
退屈な日々を過ごしすぎて
思わず狂いそうになっちゃった

頭がズキズキしちゃうくらい
スマホばっかり触りまくって
眠れないやって呟いたって
誰も反応してくれない

愛してよって言っちゃうくらい
私は自分を可哀想だと思うよ
今日もゲームをしていたの？
いいかげん私に聞かないで

【意志のない人形】
愛されるってどんな感じなんだろう
私は愛されたことがない
両想いってやっぱり嬉しいのかな？
私はいつも片想いだから

この歳になっても流されるままで
自分のやりたいこともない
空気読んで笑うのが癖になってた

でも幸せだと思えなかった

どうすれば生きる意味が見つかるの？
誰か私に答えてよ
どうすれば私は愛されるの？
誰か私に教えてよ

一人は寂しいから
一人は苦しいから
一人は泣いてしまうから
一人は死んでしまうから

ねぇ 誰か私を愛して

【愛に飢えた獣】

神さまってやっぱりいないのかな？
祈っても願っても奇跡は起きない
私が良い人じゃないからかな？
妬んだり人を呪うことしかできない

苦しくて悲しくて壊れそうになっても
誰も私を救ってはくれなかった
真面目に優しく人に接していても
私の心は傷つけられるばかりだった

もう何もかもが嫌で
胸がいつもチクチク痛くて
息が上手くできなくて苦しくて
けれど救いはやってこなかった

手を触れてほしかっただけ
頭を撫でてほしかっただけ
体を抱きしめてほしかっただけ
愛してると言ってほしかっただけ

なのに誰にも愛してもらえない

愛しているのに私は選ばれない
愛に飢えて妬んで羨んで
結局私はひとりぼっちのままなんだ

【セミ以下の人生】
私の命が朽ちてしまうまで
あとどのくらいなのかな？

こうして生きていると
知らない誰かに
自分の心臓を握られている
そんな気分になってしまう

馬鹿みたいだ
何のために
私は生まれてきたのか

ずっと一人だなんて
なんて惨めで滑稽なんだ
こんな私なんかより
まだセミの方が
きっと立派に生きている

鏡に映った自分自身にも
笑われている様な気がした

【親友】
社交的な私の親友
いろんな人と仲が良い
最後に電話をしたのは
いつだったかな

ねぇ 気づいてた？
貴女の恋バナが
私の傷を抉ってることに

だけど貴女は気づかない
私のこの想いに
好きだから
やめてほしいの

浮気性な私の親友
いろんな人と体を重ねる
貴女の今の恋人って
一体誰なのかな

ねぇ 知らないでしょう?
誰かに愛されることって
本当は奇跡なんだよ

だけど貴女は知らない
私の本当の気持ちを
大好きなのに
軽蔑してしまうの

嗚呼 今日も貴女は
笑って私に電話で話す
いろんな人との情事の話
私は一体いつまで
貴女に嘘を吐けばいいのかな

【カエルの舞踏会】
ザァーザァーと雨が降る
少し風も強いみたい
暗闇の中を恐る恐る歩く
鈴虫とカエルの合唱が聞こえる

私の足音に合わせて
カエル達がぴょこぴょこ跳ねる
まるでダンスを踊ってるみたいね

ゲコゲコゲコ
カエルの鳴き声に合わせて
少しスキップをしてみる

小さな小さなカエル達
踏まないように気をつけなくちゃ

私は雨の日が嫌い
だけど何だか今日だけは
憂鬱な気分も和らいだ気がした

◆NARU　鹿児島県

【空港】
さっきまで居たはずの
それぞれの大切な人
寒々とした風
淡い思い出のある青い海
人が溢れかえるいつもは静かな神社
夢を誓ったのは遠い昔
ごめんね、と過去の自分とあなたに懺悔する
私は平凡な人間でしかなかった
描いたような才能はなかった
誰かからのギフト、
その正体はまだわからぬまま

灰色の石の前では
再会をする
大好きだった落花生やミカンを置いて
お決まりの死の花を生ける
一方的なマシンガントーク
必ず手を合わせて祈るのは
そこに
私の真実を見ている
あなたがいると信じているからだ

昔話に耽り
アルバムを開くのも
この時だけで
一年振りに払われた埃達が
狭い部屋で舞う
来年もまた踊れたらいいな
あなたの懐かしい顔が見れたらいいね

大空を旋回する
飛行機のように
羽ばたいていく速さで
過ぎていく童心に帰った日々だ
忙しない空間は
一瞬でも一緒に居たいと
見送る場所
またいつもの日常に戻りたくない
そんな現実と戦う場所

また保安検査を受ける前のように
列をなして
長方形の箱へと毎朝吸い込まれていく。
少し緊張しながら
退屈な毎日を送っている

さようなら
また会う日まで。
次はいつ会えるのだろうか
果たして会うことはあるだろうか
別れの空を飛ぶ時
白檀の匂いがするあなたに
いつもより少し近い距離にいると
私は信じている

【菜の花】
春の木漏れ日の中

少し冷たさが残っている風
色とりどりの花が咲く時期に
あなたは元の世界へと還っていった
いつも一緒にいた
少し先を歩くその大きな背中を
見つめながら歩いた
　毎日変わらない田舎道
今後高いビルが建つことも
大きなスーパーが出来ることも
無いような海沿いの町で
普段見ることもしないような
道端に咲いた
名もわからぬ花に気づいたのは
離れたくない
時間を稼ぐために
少しでも遅くした足どり
あなたと歩いたアスファルトの上
神様は
その黄色い花の一つ一つ
才能に気づいたのか
私だけの大好きな花を
此方へ…と呼んだのだ
その蜂蜜のような香りがすると
またこの季節かと
今はうんざりするんだ
蜂や天道虫はその花に群がって
太陽の下で快活だ
私といえば君が居なくなった日を
心に刺さった針を抜けないままでいる事に
また苦しめられる
　陽だまりの中には
面影を探して
海で優しい声の空耳を聞きながら
部屋の小さな花瓶に菜の花を生けた
鮮やかな黄色い花は
窓から入る風で揺れる
いつ会えるかもわからない

あなたを忘れないように
私は今日も呼吸をする

◆kesun4　三重県

【ダッチワイフ】
中身は空っぽなんだろ
きっと感情なんてありゃしない
開いたままの口
いつも同じ姿勢
文句も言わず
愛も語らない
そんなお前に愛を語り
欲望を吐き出す

いつも全てを受け止めてくれる
そんなお前を愛おしく思い
ただ何度も抱きしめる
そちらの都合なんてお構いなしさ
全ての不満を叩きつける様に
激しく抱きしめた日も
誰からも愛されないと嘆いた日も
ただお前は俺を見つめるだけで
抱きしめ返してくれる事もなく
熱い口づけもしてくれない

飽きて捨ててしまっても
何も言わずに
自分の前から居なくなった

失って初めて気づく
空っぽなのは自分で
お前には愛が詰まっていたのだと

【火葬場】
私は焼かれて煙になった
下を覗けば先程までの涙は消えて
妙に納得した顔の妻がいた
あの人も天国に登って行ったと
自己完結で私という存在を消してしまった

私は天国に行ける様な人間なのか
長い間連れ添ってくれた貴方にさえ
いや貴方だからこそ、
いくつかの嘘をついたまま
勝手に一人で死んでしまったというのに

死ぬまでわからないと思っていた事は
結局、死んでもわからないままだ
果たして私は幸せだったのだろうか
そして貴方を幸せにしてあげられたのだろうか

貴方を幸せにするなどおごりであり
妄想であったのかもしれない
それでも貴方がいなかった事を思えば
側にいてくれただけで私は幸せだったのだろう

もっと優しくしてあげれば良かった
最後に一緒に旅行に行けば良かった
欲しがっていた靴を買ってあげたら良かった
後悔は後を絶たないがどうする事も出来ない

貴方に幸せだったのかを聞きたかったが
もう、それすらも叶わない
段々と意識は薄れてこのまま消えていく
何処へ行き、何になるかはわからない
私はもう、ここにはいられないようだ

【ここから見える景色】
毎日の同じ作業

時計にでもなったようだ
サボってタバコを吸いに行く
右を向けば人が詰め込まれた箱
左を向けば…

枯れかけたススキと麒麟草が揺れる
昔は沼地だった場所
赤トンボが群れをなして飛ぶ
時折見える朱色の葉
沼地の中心にある不規則な木々
森と呼ぶにも林と呼ぶにも小さく
何本かの枯れかけた木が立ち並ぶ
目の前にある光景だと言うのに
人の気配はなく静寂が支配する
唯、生い茂ってありのままの姿
誰の手もくわえられず
止まったままの世界

不自然に置かれた椅子
あんな所に誰が座るのか

タバコの灰が落ちる
いつまでもサボるわけにはいかず
結局、また箱の中に戻る

左に行ってあの椅子に腰をかける
そんな生き方もあったと言うのに

不規則な思いを抱いたまま、
また、一定のリズムで短針を追いかける

【綺麗な花の下】
綺麗な花が咲いている
気づいたのは今日の事
いつから咲いていたのか

花の下には黒い土
土の中では微生物達が生きている
誰に知られる事もなく

決して花を咲かせるためでも
ましてや誰かを笑顔にするためでもない
微生物は生きる為にそこにいる

綺麗な花の下
誰の目に留まる事なく
微生物は生きている
明日の為ではなく
今を生き抜く為に

◆夏月ビビ　東京都

【私の恋愛】
「もしも私がゾンビになったら
散弾銃で仕留めてほしい」
それが、今世紀最大の、私の産声な気がした。

恋の先に待っているのは、愛か嫌悪
で、あるとすれば、
迷わず私は君に嫌悪を
抱かせる方法を
なんとか考えて考えて考えて
瞬間で悪魔と契約する。

君の思い出の中の　最後の私が
君を丸ごと欲した挙句
脳みそ吹っ飛ばされて踊る私
なんて
最高以外のなにものでもない。じゃない？
ちょっとばっかし　ここいらで
サイケデリックなワルツを踊ろう。

そうやって君の脳裏にこびりついて
へばりついて
クエン酸でも溶かせない嫌悪で
サブリミナルしてくれれば
生まれてきた甲斐、あるってもんです。
イルミネーションはLEDのマジョリティー
生活を灯したあかりに、
勝てるはずがないんだ。

「もしも私がゾンビになったら
散弾銃で仕留めてほしい」
そう願うと今日も君は
「そんなこと」
と言って笑った。
つまらない男。

【アオイ世界】
だから私、海よりも深く潜っていた。
理屈が、通らない。
だから私、世間に背中を向けていた。
刺し続けていた。

あいする、ということは、理解ではなく
誤解から生まれるものだと知ってからわたし、
全部が偶像だと、とても楽になれたんだ。

そうしてまた
世界から疎まれて、
それが快感になっていくんだろう。

わたしたぶん、手を離したかった

朝はみずいろが、溶けていく。
誰とも同じ温度で愛せないから
きっとこの世界、

戦争が起きてしまうんだ。

私の知らないところで、
私の話をしてほしい。
それがどんなに蒼くて、青い、悪口でも。

【early times】
君の過去が気になって気になって
気になってしまうのは
君が私の「今」だからで
君が私の「過去」になった途端に
君の過去は、永遠に私に対し沈黙する。

過ぎ去った、微粒子。

夢を追う、という行為を
美しいと思えるうちは
きっとまだ君は　夢の本性を知らない。
知らずにいたほうが　いいこともある。

食べて　食べられて
食物連鎖みたいな世界を泳いだ先に待つのは
冷たい目で見つめる未来たち

クジラも本当は
戦いたいのかもしれない。
ライオンも実は
負けたいのかも知れない。

知らずにいれたらよかった。
知らずにはいれなかった。

過去が今に形を変えて
襲いかかってくるから
だからこんなにも私　今、
いまが苦しいのです。

そんな私もまた

まだ

夢の本性を　知らないひとり、だ。

【向日葵】

失恋を、しました。

私は９日間

食事もとらず、化粧もせず、

ただじっと、

座っているばかりで。

次第に痩せて、だけど御構い無しに

ただただ、朝から晩まで

あなたを想って、

私は、私に成りました。

背が高くて良かったこと

いろんな人に見つけてもらえること。

背が高くて悪かったこと

朝顔やリンドウのように

小さくて可愛くないこと。

男の人は、結局、

小さい女の子が、お好きでしょう？

明るい　イメージが、嫌いで

自分の身体で影を落とす

カッコいいカブトムシが涼みにきても

声もかけもせずに

ただじっと、私でいる

だって、私は大きすぎるわ

あなたも「大きい女」と思っているんでしょ？

もうすぐ

毎年やってくるあの娘が

アイスクリームを食べながら
もうすぐ追いつく、と背伸びする
そのたびにわたしは、
勝ってるのに、負けた気分になる。
若い娘はすぐに背伸びしたがるの。
知ってるわ。
なんだか悔しいから
まだ 追い越されないように
あの男のほうに向かってしまう。

えぇ、私は負けず嫌いで
嫉妬深くて
ただでかいだけの、女です。

だからあの娘にあの人に
「いつもあなたを見つめている」
なんて
言われてしまうのね。

◆コウ　　和歌山県

【父】
父と母が喧嘩をした
母が私を残して家を出て行った
私はその様子をただ見ていることしかできなかった
四歳の幼い子供には何が起きているのかなんて
分かるはずもない

降りしきる雨　街は洪水
父は私を自転車の後ろに乗せて
洪水に逆らいながら漕ぐ
父が履いていたサンダルの片方が脱げて
茶色い水の中へと流れていった
流れるサンダルを見えなくなるまで
私はずっと見ていた

辿り着いたのは誰かの家
父は家の人と何かを準備して
私達は一晩泊まった
私はただ眠るだけ

翌朝また誰かが来た
私は外へ連れられその人と車に乗った
父は乗らない
どうして乗らないの？一緒じゃないの？
リアガラスから外を覗くと
父は何も言わずただ私を見ていた

それが私の見た最後の父の姿
顔は未だに思い出せない

【愛を知る】
愛を知るあなたに　この身を委ねて
拒否する理由が見つからない位に
あなたの手は優しい

冷え切った部屋で
愛を探す私
辿り着いた温かな皮膚にしがみ付く
離さないで
ずっと離さないで

愛を知らない私の中に
ゆっくりとあなたは入っていく

裸の二人が
抱き合って　絡み合う
二人の汗が混ざり合ってシーツを濡らす
抜け出せない程　奥深く
元に戻せない程　象られる

優しいオレンジ色の灯りに照らされ
二人は愛を交わす

いつまでも終わりは来ないで
あなたは私の中にずっといて
あなたのための肌　感じている？
あなたのための声　聞こえている？

二人の熱が冷え切ったこの部屋を暖める
狭い空間にあなたと私

いつまでも終わりは来ないで
あなたは私の中にずっといて

【世界を黒に】

世界を黒に塗りつぶせ
白い所余すこと無く
この色に勝るものはない
全てを黒に塗りつぶせ
決められた色で生まれてきたもの達
どの色が優位か
そんなもの誰が決めたのか
赤い血が流れる度に
黒く染まるこの世界
黒の中にはもっとどす黒いものがある
この色は正義か大罪か
無垢なものはここにはない

暗すぎて何も見えない？
今更何を言っているの？
君がこの世界を黒に塗りつぶせと言ったんだよ
見えなくて当然じゃないか
それが君の望んだことだろう？
色鮮やかな世界を黒にしろと言ったのは
君なんだよ

後悔してももう遅いよ
いつかこの空に虹が架かるなんて
思っちゃ駄目だよ

【懐古】
もうあの頃のような日々は戻らないだろう
絵の具で描いたような澄んだ青空も
太陽のように輝いた誰かの笑顔も
昔を懐かしむのは悪いことじゃない
ただ思い出して涙を流したいだけ

物事が変化していく
蕾から花が咲くように
果実が熟すように
私達もまた大人になり老いていく
変わらないものなんてあるのだろうか

あの木に私の名を残して
あの花と同じ名前を私につけて
誰かの愛をまた他の誰かに

もう若くはない
今は老いへの階段を登っている
ゆっくりゆっくりと
だけど足取りは軽く未来へ希望を持って
要らないものは過去へ捨てていこう

◆さらゆい　三重県

【随感　時のしずく―トップシンクの溝は―】
ゾクッとする朝だ。
4時30分AM　ルーチンの始まり。
　スイッチ・オン。
よろける足で

エクササイズ、首を前後左右180 度 10 回ずつ倒して、
左右 ストレッチ全10 回。
大急ぎでパン、シリアル、コーヒーの朝食をとると、
ヨーイ、ドン！朝一の介護だ。
① あれ替え（あれはおむつ） ② スプーン朝食 ③ くすり
ワークトップからスプーン食をテーブルへ運ぶ。

スプーンを運びこむ口。
形を成さないこともない口に食物が呑みこまれていく。
横たわる人（介護される人）の目はつむっている。
対峙者（介護者）はトップを引っ掻く。

横たわる人は完食した。
ここまでの所要時間ほぼ60 分、
一日のエネルギーを半分使い果たした感じ。

シンクをぼんやり見る。
ステンレスのワークトップについた傷は1ミリの3分の1の溝なのに、
億尋の海溝ほど深く、
たまに無数の溝に載った水が震える。
ときが引っ掻いたワークトップの傷は、
世界の飢餓と同じくらい無言で可視的だ。

窓外に目をやる、何も変化なし。
あら、ちがうでしょ、自然は芽吹く、不変などなし。
すなおな大木とあかるい5月の花、初夏のすべては燃え上がる、
想像力を総動員しなければ。

無数のワークトップの引っかき傷。
布巾でトップを拭く、レイノー（寒冷で指が白くなる現象）の
青ざめたゆび先は生き返る。
引っ掻き傷はときどき慰めてくれるんだ。

冷たさとマヒの協奏曲。
溝は深くないし、レイノーの指は切断されないで、
10 年以上こすり続ける指と
トップのすり減った溝はいいコンビネーションなのだろう。

フロアの減り分、
窓枠の拭いた分だけすり減った分、
擦り減らせた労力はAのレイノー指が請け負った。

空気を切りたい。
空気って切れるのかな。
ヒメシャリンバイは4月最後の日に、
ローズマリーの香りほどには主張しないし
無限にしとやかだが、
真っ赤な花のしぶきは激しく空気を切り裂いているようだ。
すり減りは続き4月は終わりそうだ。

友人F。
おめでとう。祝福される彼女がいた。
まだ不確かな足取りだったし、
それからほかにも気になることがなかったわけではないけど、
愛いっぱいの若い日々、
ワークトップはほんとうにまっさらだった。

数年後アメリカで会った二人と
消えていった時間のことを話していた。
ふっと彼女が息をついた。
ワークトップの時のひっかき傷に
飲みこまれる彼女が凶暴に頭をかすめた。

そのころ時はチラチラこちらを見たように思う。
時の始まりと時の終わり。
ヤーヌスの顔を見返して
ダンスしたり、酔っぱらったり、一人でたまに充足した。
でも、トップのひっかき傷は増え続けた、知らぬ間に。

空気は
切ったら裂け目ができて不均一になるのだろうか。
均一の空気ってなんだろう？
夏の終わりの愛の終わり、空気はべつに不均一でもなく、
空気はただ空気だったと思うけど。

しらじらと夜が明ける。
レイノーの指がふたたび這い出す、トップの
擦り傷の溝は目覚める、従順という言葉を再認識させるために。
過去の想念を織りこんで取りこんで、
ワークトップは思い出の貯蔵庫、
この引っ掻き溝は時の真剣な笑いだ。
それは確実だ。

しずくみたいな生が手のこんだ編み上げ模様になって、
空気を裂いたがためにできた裂け目から咆哮する。
赤い充実と黒い安息のチェッカー模様。
時を裂け。
空気を切れ。

◆秦鉄夫　福井県

【雪中光】
迷子ではなかった
道のりの果てに迷子になったのだ
ここに呆けて佇むおれから
抜けて分裂していく背中を
見送るおれがいて
おれの前につづく足跡を消す
降り積もる雪のむこうの
足音を探している

死を信じるほど
真直ぐ前を見ていたのは
誰だったか
無音でいる真空には
素気ない挨拶と無機質な弾劾がいて
透明な刃先に抉り取られた
いくつものおれが
雪に溶けて
イタイ、と叫ぶ

時間の言い訳に耳を澄ます
神妙なおれの後ろで
欅の大木が耐えた雪を枝から落とす
肩に圧しかかる
バランスのとれた落下の後
雪を雨交じりに変え
弾け飛んだ秒針が元にもどる
待ち伏せの場所へと
連れ返していくのだ
おれたちを

さらさら雪は降っている
淡い光の帯のなか
美しく雪は音を奏でる
皺枯れ凍えた小さな手の
紐のようなおれは
それでも懸命に輪になり
揺れ撓みながら
遠くを見上げては
涙ぐむことだけ許されているかのように
そっとかすかに息をする

◆つよきち　東京都

【違う】
違う違うと思いながら
自分の気持ちに無理やり蓋をして
あの日、私は空港のカフェで飛行機を眺めていた

青空の真っ青が
私をどこまでも正直にさせる
飛行機を見ているはずが
飛行機と当たり前にある空のせいで
頭に入ってこない

違う

はっきりと私の中にあるそれは
正しさなんて知らないくせに
間違いだけは許さない

頑張れないんじゃない
でも頑張らないのでもない

私の中のそれが
久しぶりに耳を傾けてくれているであろう私に訴える
この機会を逃すまいと
まるで私がそれを無視することができないのを知っているかのよう

それはいつも無責任
でも結局私はそれの思い通り

【結婚と自由】
それは私の我儘だって
あなたはたぶんそう言いたいのだろうけれど
いったいぜんたいそれの何がいけないの？

いつだって私は私のままであったはずなのに
いつの間にかそうではないと誰かが言った
それを決めているのは誰？

私はいつだって自由だった
いまだってそう
私はどこまでも飛べるはず
高い高いところまで

高く上ることも
でもそこから落ちることもない
思い通りにはいかない
でも平安を手放そうとはしない

私は自由
そういう不自由
そのど真ん中で私はただ外を眺めている

【それよりも先】
静かな朝の
薄暗い光の中
珍しくまだ記憶に残っている今日の夢のことを想う

夢の中の私は
次の研究に向けて前向きだった
いくつも掲げた次の研究について
別の指導教官に相談していた

まだ自分が知らなかっただけとの出会いを繰り返して
誰も知らなかった出会いを求めていた
あの気持ちを知っている
前しか見えなくなって、ただ前にしか進めないと思っているあの感じ
そんな無防備な私が
懐かしくもあり、危なっかしくもあった

研究で知ることができた
あの本物の気持ちは今も私らしく生きている
でも今は
自分が創造した、まだ誰も知らない出会いを求めている

過去の自分をただ哀れみの目でしか見られなかった自分が嫌だ
過去の自分も今の自分も全部仲良くできたらいいのに
私はずっと私を生きている
そんな当たり前なことを都合よく忘れないでよ

【それでも、かつて勇者だった】
うまく行くのが当たり前だった時期もあったのに
うまく行かないのが当たり前な時期を経験してしまうと

その時期のことがどうしても忘れられない

失敗しても挑戦し続けた自分よりも
失敗し続ける自分を思ってしまう

それでもかつて私は勇者だった

どんなにうまくいかなくても
どんなに負け続けても
戦い続けたという意味で

今はどうだ？

何より失うのが怖い
何を犠牲にしても進みたいと思う気持ちはもうない

かつて勇者だった私は
少し物足りない気持ちと折り合いをつけながら
今日を穏やかに過ごしている
そして危なくない方向を目ざとく見つけながら
ゆっくりと進んで行く

もう勇者ではない
そして何者でもない私と
自分以上に大事なものを抱えて

【やり切れていない気持ちと一緒に】

自分なりに
真剣に生きてきたんだと思う
それで辿り着いた先が今
満足していない訳じゃない
それは決して嘘なんかじゃないけれど
何かが違うと思うのはなぜ？

今の私が全てではないような
そんなやり切れていないような日常の中で

違うと言い張る私は誰？

今の私は嫌いではない
でも好きだと全面的に肯定しないのはなぜ？

そんな疑問の中に
沈みこまずにいられるのは
私だけではない不自由が
待っているから

忙しなくて
でもそこまで忙しくもないのに
何かができていないような時間の中で
やりきれていない気持ちだけがただぶらさがっている

【過ぎてく今】
今日もあっという間に走って行った
どこに行ったのか
私の今
そんなこと考える間に
明日になってる
そんなふうにして過ごして行った時間は
いったいどこに連れて行ってくれるんだろう

流れるままに
流されるままに

【無性過ぎて】
なんでそんなに無償なのか
私には到底真似できない
そんな私は疑い深くその真意が何かを探ってしまう
でもいくら探しても何も見つけられなかった

その後はどうしよう
そんなにしてもらって私は何を返せばいいか悩んでる

何たる器が小さい人間なんだ
自分が嫌になる

それくらいの友を持った幸運を知る由もなく
ただビビっている私は
何なんだろう
きっと何でもないんだろうな

【あの時の私】
私はその時の自分が永遠であるかのように感じていた
こんなにも早く時間が過ぎることをまだ知らなかったあの日
私は車の中にいた

母が好きなユーミンの音楽
熱気がこもる車の匂い
だんだん冷たくなっていくクーラーの熱

どこに行くかは分からない
どこに行くのだとしても
私はずっと母と一緒にいるのだと思っていた

これが私の安心の風景

【過去が追いかけてくる】
過去が追いかけてくる
自分がしていたこと
今はもう関わりたくないこと

自分が今守りたいものの存在が私を強くさせる
私はもう関係がない
でもそんなこと言うのには都合が良すぎることを
自分が誰よりも知っていた

それはその時の私にとって私そのものだった
誰よりもそれは私だったのに

私は今それを手放したくて仕方がない
手放し方なんて知らない
手放せるかどうかも分からない

それを誰かが欲しいといっても
そして私がそれを渡したくても
それを私が出した時
私は本当に渡せるのだろうか

そんな私は知りたくない

【おのれ】
自分のやっていることが
自己満足じゃなくて
誰かに共感してもらえるのが
こんなに嬉しいことだなんて知らなかった

今まで好きなことなんだから
だれにも理解されなくていいって
強がっていたけれど
本当は少しの弱さも見せられないくらい
余裕がなかっただけ

何となくでもいいから
自分のやっていることが
誰かに伝わってほしい
それでそれが自己満足ではなくて
誰かの励みになればもっといい

そんなことを疲れた頭で考えてる
なんとなく一区切りつけられたような
それが勘違いならまだ知りたくない
己の小ささに焦る気持ちを閉じ込めて

【塩辛いメンチカツ】

春の匂いがした
冬の真ん中のある日

メンチカツが塩辛い
昨日はレトルトの塩サバが塩辛かった
誰が作ったのか分からない
その誰かも私が食べているのを知らない
そんな不確かなやりとりの中で
メンチカツだけが
迷うことなく
私の口の中に運ばれる

ああ、やっぱり塩辛い
そう思いながらも
メンチカツは何度も何度も
私の口の中に運ばれた

そしてメンチカツの全てが
私の腹の中にいた

こんなに近いのに
もう塩辛さは感じない

そして私はもうあのメンチカツの塩辛さを思い出せなかった

◆田河　蛍　　東京都

【近しさにかまけて】

街をゆくと　損なわれた人の顔がよぎる
はしたないことでしょうか
こんなわたしが
ひとを愛することは

近しさにかまけて　置いてきてしまった

届かないなあ　そうして肩を落とし
忘れようとしているうちに覚えてしまって
何処へだって行けるはずだと
強くそう思うこと
恥ずかしいねだなんて
笑わないで欲しい
あなたにだけは

心が欲しい
心に心を込めてみたい
遠ざけたい
遠くなればなるほど近づくように
触れてみたい
葉と葉が風に揺れ、なぞり合うように
涙を知りたい
その温度で
私は私に謝りたいのです

【Ｔシャツ】
身を置く
真新しい朝の中
あの人の隣横たわる
植木鉢の向こうに積まれた
古びたカセットたち
いつかこれらの一員になるのだな
肩越しに
私でない女の人の綺麗な微笑み
届かないなあ
わかってはいるけれど

そうして
私は思い立ち服を着る
部屋を出る
なるべく努めて
平坦な顔立ちで
足音を確かに消しながら

進んでいる
きっと。
瑞々しい
それでいて深く損なわれてしまった
煤けた空が背に落ちる

「この長い梅雨が明けたなら
片端から『シャツを洗濯していくんだ」
あの人の言葉を
歩きながら私は声に出してみる
手足にこびりつく湿度は
振り払おうとも馴染んでしまっていて
もう何処へも行けやしないと
受け入れられれば良かったの

それでも私はみっともなく執着する
あなたといつか見てみたいと強く思う
未明の夏の晴れ間
その途方も無い光に照らされた
気持ちよさそうに揺れる『シャツたちを
分かち合いたいと祈る
あなたとふたりきり
この世のふたりきり
そう思える夏の朝を

【サマージャケット】
小さな格子柄の織り
裏地のないレディースのサマージャケット
私の肩には合わなくてしかめ面　でも
あなたが着れば
それはもうあなた自身になる

そんな瞬間を幾度も見つめた
似合わないと遠のいていた赤も
タックが連なったシャツも

よれたグレーのカーディガンも

まるで景色の全てを変えるさま
はじめてキスをした時のように
時間も　呼吸をも止めるもの
あなたの身体のために
服が存在するような

無骨な脚や　水泳で鍛えた広い肩幅
背の低いことがコンプレックスだとあなたは言うけれど
美しさだけならばマネキンにでも任せて
私達は二人きり　六畳のキッチンで
真夜中のファッションショーをしようよ
あなたが嫌いなあなたの全てを
私が全部チャラにする
騙されたと思って　任せてみてほしい
この両手はあなたのためにあるのだから

浅いポケット　連なったくるみボタン
その全てのミスマッチ　だけれどほら
全てはあなたのためにあるんだよ

完璧な手首の覗き具合に
私は脆く嫉妬した

【遠い降参】

煙草に二本　立て続けに火をつけると
くさいくさいとお前が嫌がるものだから
その様が面白くって
僕は笑って火を消した
ごめんよと台所の窓を開け振り返ると
お前の拗ねた背が見える
薄暗闇に浮かぶ白く澄んだうなじが
白旗のようだと僕は思った
忘れもしない
遠い降参

飯を黙って食っていると
美味しいかとお前が聞くものだから
こんなに美味いものは他所でも滅多に食べられないと言うと
お前がにこりと微笑むものだから
気づけば少し肥えてしまった
今はもう平らな腹が
お前の不在を確かにさせる
お前が居なければ
僕の体はそのうち
消えて無くなってしまうんじゃないか
真面目にそう思う僕は
きっと、お前無しで生きてはいけない
信じてもらえるだろうか

川べりを歩いた事なんて
一度もなかった
洒落た店で飯を食うことも
何かを贈ることも無かった
僕らはいつもふたりきり
この部屋で
ただ　こぼれ落ちる時間
それでも一緒に居られると
思っていた僕　心底思うよ
馬鹿だった

【まとも】
挟んだんだ　まともってやつを
愛情と愛情で　たっぷりと
そうしたらさまともなんて
すぐに潰れて無くなった

こんなもんだった
鬱々としてさ　バカみたいだった
あんなもんだったよ
まともなんて

◆青柳じろう　　京都府

【今日という日】

「支度」

ほころびの無いように
装飾に、ぬけが無いように
人形の最終チェックを行う。
赤く色づいた頬はあどけなく
小さな唇は汚れを知らない。
爪はきれいに切りそろえてあるし
服だって、靴だって、まるで新品のようにみえる。

うん、これで完成。
家の鍵をぎゅっと握って今日も私は街に出た。

「大丈夫」

べちん、という音が聞こえた気がした。
目の前は真っ暗で、体はところどころ痛かった。

なみだは流さずに体を起こす。

血が滲んだスカートは疲れたふりをしているし
目の前の木々もさわさわと揺れるだけだった。

もしかしたら赤ずきんなのかもしれない。
私は花畑を探し始めた。

「鏡」

揺れる花々は静かだった。
一輪摘んで鼻元に寄せる。

甘い匂いがぷんと鼻をつく。
口元はそれに合わせて幸せの形をつくる。

小さな花はそよそよと外を向き、私を見なかったけれど
私は満足してほかの花のもとに戻してやった。

「必要」
街は今日も私を待っていた。
小さなかけらを扱う店に入った。
最近見つけたお気に入りの店。

赤、青、紫、黄色、肌色と
かけらはそれぞれに、異なった輝きを放っていた。

それなんかお客さんに似合うと思いますよ。

男はそう言い、白いかけらが入った小瓶を差し出した。
私は目を細め、白い小瓶と、隣で鈍く光っていた黒い小瓶を買った。

「よる」
きいろいまるいおつきさまが、ぷかぷかおそらにうかんでる
きょうみつけた、まっくろの、きらきらのかけらがまわりでしずかにおどってる

あぁ、わたしのいちにちがはじまった

◆林やは　愛知県

【水死】
滅びをともない
生けられた
あらゆるものと
あり
わたしは
父のためには生きず
海の潮を数えず
心待ちにしていた子の
死産の後に誕生し
本能を失う
と
偽り
もろとも

岩陰に積もっていく
垢のようなものが
張り付いた
子
宿るものこそ
母なるものと
苔が
入り江に繁殖した
そこで
魚になる声を
聞き入れることなく
群れを捨て
腹に
青みを溜めれば
潮騒で粉砕され
匙に乗って流れることを
懇願するだろう
川へ
（母体のようだということがある）
とどまらず
しかし
海はすべてを承伏したかのような
顔を
いくつも覗かせている
兄弟でも親子でもない
可変的な共同体の
わたしは
そして
たちまち
鱗を切望する
流れ
流れて
上流に
森があれ
流れはやまず
わたしもまた
水と水の

間から
顔を覗かせ
同胞の
（可変性のひとつの）
冷めた血が窃取されるのを
皮切りに
磯の香りがたちこめる
故郷へと還ってゆく
そのとき
肉親どもの
耽溺の失望で
わたしはわたしの腹を
燃やすのだ
命を授かった
わたしは
母の手で
水を孕み
群れとなる
継承者
ゆえ

◆黒川玄冬　東京都

【海へ行こう】

海へ行こう
何処へでもいいの
あなたを沈められるのなら
私も一緒にいけるのなら
あなたを私だけの場所へ連れていけるのなら
あなたはきっと困ったように笑うけれど
私は本気なの
あなたを連れて何処かへ行ってしまいたいの
波に揺られて私とあなた
二人きりになれてしまえたら
それはどんなに幸せなことだろうと

それはどんなに傲慢なことだろうと
それはどんなに残酷なことだろうと
それはどんなに幸福なことだろうと
私は夢想するの
それほどまでに、あなたが好きなの
この気持ちは、多分、愛だと思うの
海の向こうには誰かがいるから
あなたと二人きりにはなれないから
空を飛ぶための翼は生えていないから
だからあなたと海の底へ沈みたいの
私が魚でなくとも人魚でなくとも
海はきっと、受け入れてくれるから
海はきっと、飲み込んでくれるから
そしてそこにはきっと誰もいないから
そしてそこはきっと、えいえんだから
海はきっと私を受け入れてくれる
愚かで身勝手で馬鹿な私でも
海はきっと私のかえりたいばしょなの
深夜二時、ぼうっと外を眺めてみると
そこにはほら、深海が広がっている
夜のくらさは深海のくらさなの
そこはきっとどこにもかえれない私の
唯一かえることができる場所なの
だからあなたと一緒にかえりたい
あなたと一緒にうみにかえりたい
あなたを腕（かいな）に抱いたまま
あなたの腕に抱かれたまま
私、死にたい
いきたいからしにたい
えいえんになりたい
あなたとそうなりたい
だから、ねえ
海へ行こう

◆張佳晏　東京都

【狭山湖】

十一月は足音を忍ばせ
何の前触れもなく
近づいてくる
十一月の鳴き声は
始まりから生まれず
終わりにとどまらず
大気のように循環して見せる

　褪せてゆく黄金色を、時間の翼に乗せて届けてきたのは、誰だろう。短波放射がひとときも怠らず、地球上の生命体を支えていくのは、なぜだろう。無色のエネルギーがさざなみと共に躍動し、全ての空間を手に握ったように落ち着いている。膨らんでゆくその源は、峡谷を流れ落ちる川のように、振り返りもせず進んでゆく。しかし、十一月は再び、足音を忍ばせて、何の前触れもなく近づいてくる。

水は堰き止められ
礫や砂は堆積する
うねるように連なる丘を越え
十一月から飛び出し
全ての時間は海で落ち合う

　光は銀色に砕けて、鉱物に見まがうほど輝かしい顔を見せていた。物語る声も、そばだてる耳も、薄らいでゆく色の世界の中で、輪郭を崩していった。しかし、十一月はやはり、足音を忍ばせて、何の前触れもなく近づいてきた。

足音を忍ばせ
何の前触れもなく
近づいてきた十一月を
時間の翼に乗せ
届けにきてくれるのだろうか
ひさかたの
光

◆松山尚紀　　埼玉県

【The Song is You】

春の日差しに手を伸ばせば届きそうな、冬のあたたかな午後。
私は街で彼女に会いました。
彼女はやさしい女性です。
彼女はいい子で、綺麗でした。
いい子でしたが、さらに悪魔的な側面も持っていて、そこがまたよかったのです。
悪魔的な要素のない女性なんてつまらないでしょう?
結局、男はそういう生き物なのです。
私は彼女に会うたびにそれを実感します。
私は最高に幸福な男だ、ということも同時に。
彼女は与えるのが苦手な女性でした。
なのに、欲しいものはなんでもくれました。
彼女は欲しがりな女性でした。
彼女は自らの欲望を我慢しました。
私にたくさん与えてくれました。
これをやさしさと呼ばずしてなんと呼ぶのでしょう。
勇敢さも与えてくれました。
持てるものはなんでもくれたように思います。
土台から私はダメな男でしたので、彼女なしでは生きていけない男になりました。
ヤク中と一緒です。
そんな私はある日、彼女になにかを渡したい、と思うようになりました。
私はダメな男ですが、金はありました。
家が金持ちだったので。
こういう話をすると日本では、悪鬼であるかの如く嫌悪され、石を投げられかねませんが、事実、家に金があるということは一種の才能でもあるのです。
その話はおいておきましょう。
たとえば、彼女はカーストの上位にいくのがいまでも夢なので、南青山のblue noteに連れて行くとか、カルティエの高い宝石を買ってあげるとか、いろいろやり方はあったかもしれません。
ですが、彼女がよろこびそうなものをいろいろ提案してあげてみても、当の本人は「過去の自分が見ているから」、と言って、拒んでしまいます。
私は彼女の前では紳士でありたいので、絶対に暴力はふるいたくなかったですし、全力で彼女にやさしくしてあげたかったです。
なにより嫌われたくなかった、というのもあります。
それでも、彼女は自身がマゾであることを私に告げてくれたことがあったので、そのこと

を思い出して、私のなかにあるサドを呼び起こし、一か八か、彼女をビンタしてこう言いました。
「強情な女だ。ほんとうに欲しいものはなんだ？　言ってみろ」
東京の街のド真ん中です。
みんな、見ています。
関係はありません。
どこにいようと夢のなかの二人ですので。
むしろ、みんなの視線が快楽だった、とでも言いましょうか。
視線は一種の薬物と同じです。
私は普段は彼女に対して、下手に出ます。
それが愛だと思っていたので。
彼女は私が冷たくしたり、キツく当たったりすると、判を押したように酷くよろこびました。
まるで、そのこと自体が存在証明であるかのように。
私以上のマゾだったのです。
もう一発頬を叩くと、彼女は言いました。
「そのスピードよ」
そう言って、伏し目でニヤケます。
「なにが？」
「あたしの欲しいもの。そのスピードが欲しかった」
スピード。
イタリア未来派の夢。
イタリアのアヴァンギャルドの夢。
スピード。
いつだってそうだ。
あの国のアヴァンギャルドは不眠の夢とスピードを追いかけてきた。
彼女はいま、最高にそれを欲している。
そのことがわかったので、私はスピードについて考えました。
スピード。
死の影が差す暗い街を走っていても、影を全開で振り切って、夜に溶けることのできるスピードなのだろう、と私は思いました。
「The Song is You」というジャズのスタンダードナンバーがあります。
ジャレットがあの曲を弾くと、景色はぶっ壊れたかのように、命が速くなるのを感じます。
あのスピードだ！
私は飛びあがって、YouTubeでキース・ジャレットトリオが演奏する「The Song is You」の一九八六年、Les Pinsにおけるテイクをかけました。
このスピードだ！

私は無限のスピードについて考えました。
物理的なスピードではなく、文学的なスピードです。
文学的なスピードというのは、究極的にはモーターの回転率なのかもしれない、と私は思いました。
そして、リズムだ、とも思いました。
リズムがスピードを演出するのだと。
もっと速く。
もっと速く。
アクセルは全開で。
夜。
マゾである私は、マゾである彼女を再びビンタしました。
「そのスピードよ」
彼女は笑いながら言います。
私はだんだん楽しくなっていきました。
彼女のことを幸せにしているんだ、という、やさしい気持ちでは決してありません。
好きな女性を攻めているんだ、という快楽です。
彼女は私にとって、最高位の女性です。
最高位の人間を私は支配している。
私は最高位の女性を殴っている。
私のファンタスマを形成し、自分の概念把握を司っている女の頭から私の存在を、いま、この瞬間、いや、死ぬまで、離れなくさせることができる。
そう考えると、私の胸は高鳴り、体がゾクゾクしてきました。
さらには、このスパンという音。
綺麗な白い肌に右手の赤い跡。
なにものにも代えがたい。
このスピードだ。
私はそう思いました。
ジョニーウォーカーゴールドを一発クッとやって。
スパン。
もう一発、彼女の頬を叩きます。
スパン。
一瞬、彼女は強気な目で私を見つめますが、若干、涙目になっています。
声も震えています。
いまにも泣き出しそうです。
このタイミングで、彼女を抱きしめて「もうなにも怖がらなくていいよ」と言ってあげたいところですが、その感情をグッと抑えることが大切で、このグッが快楽で、それはお互いにとっての快楽であり、お互いのためを思っての判断なのです。

表面上、そんな感情はまったく抱いていないかのように彼女に向かってこう言い放ちます。
「どうだ、しあわせか?」
私は彼女を見下ろします。
「ええ」
彼女は笑いながら言います。
「罪滅ぼしをしてくれる存在を欲していたの」
「関係ないな。お前は単なるマゾの女だ」
そう言って、もう一発頬を叩くと、二人は笑いあって、砂浜に寝転がりました。
海辺は満点の星空です。
にゃーお。
遠くから猫の鳴き声がします。
にゃーお。
やはり、恫喝ではなく、猫の鳴き声でした。
それから、眠らずに夜明けまで二人で語りあいました。
流星よりも速く夜を駆けることについて、言葉を尽くしても、尽くしても、足りないくらい多くの言葉を使って、語りあいました。

【Free flight】

ある日、私は死んだはずの伝説のジャズマン、オーネット・コールマンに自由という名の拳銃を突きつけられた。
自由が鈍色にも似た黒い光を放って輝いている。
午後。
真夏の太陽が差し込む、都会の一角でのことだった。
ひどく蒸し暑かった。
いまにも倒れて、意識だけが宙に飛んでいきそうだった。
彼は人を殺すのが平気だった。
彼はあまりに多くの暴力を受けていたからだ。
それは、神聖な意味での人殺しだった。
実際的で野蛮な意味での人殺しとは違かった。
ありとあらゆる種の暴力を受け、身体の色が変わってしまった人間だけに許される非情なまでの暴力だった。
実のところ、彼には一般的にいうところの自由がないことを私は知っていた。
ありとあらゆる束縛を経験したからこそ、彼の魂は光り輝いていた。
彼と私にとっては、それがほんとうの自由だった。
望んだ自由じゃなかった。
女性によって与えられた自由だった。

女性を犯すための自由？
おかしな自由だ。
おかしな罪だ。
でも、自由は自由だった。
彼と私は最低な自由を背負って生きている。
最低な男二人だ。
最低な男二人。
最低でいて、最高な男二人。
バビロンで死のう。
バビロンでこそ死にたい。
彼と私は今夜、悪い夢を見るだろう。
それでもいいんだ。
どうせなにをしても、罪は追いかけてくる。
どうせなら、自由の罪を。
時給一兆円でも足りない自由。
神に感謝。
太陽の輝きに感謝。
きらめく星々に感謝（いま、月は見えているか？）。
私たちは女性からあまりに多くの恩恵を被りすぎた。
これから、たくさんの人が倒れるだろう。
これから、たくさんの人が喚き出すだろう。
私はそう予感した。
夜に辿り着く前に、ほとんどの人間が息絶えて死ぬだろう。
自由を欲していると口では言う癖に、自由なんか微塵も欲していない人々（ねえ、触って）。
あるいは、その対価を払う度胸もなく、自由を、自由をと声高に叫ぶ人々（ねえ、触って）。
それらの人々が、神聖な夜に辿り着く前に声もなく倒れていくだろう。
自由な夜に辿り着く前に、彼のスピードに追いつけずに倒れていくだろう。
真っ青な荒野！
死体たちが彼と私を非難し揶揄するだろう。
オーネットとあいつは透明な耳を持っている。
あれは羽ばたくことのできる耳だ。
透明な耳の羽ばたきを持つ者には死を。
そう揶揄して、地面に唾を吐き捨てるだろう。
私は何故かわからないがそう感じた。
彼は私のこめかみに銃口を突きつけて立っていた。

いでたちはあくまでも紳士的だった。
汚れた革靴を履き、砂埃で煤けた大きめのサイズのスーツを着た彼は、私のことを強い眼差しで見つめ、捉えて離さなかった。
私を自由の拳銃で捉えてくれた彼。
彼はかすれた声でこう言った。
「ほんとうの自由が欲しかったら、ほんとうの対価を払え。ほんとうの自由が欲しかったら、救いや他者の評価を求めるな。ほんとうの自由は、理不尽な非難と不自由の先にある」
彼は私を自由という名の拳銃で撃ち殺してくれた。
身体というどうでもいいものから、私を解き放ってくれた。
解放の一発。
自由だ。
身体に縛られない、自由な運動がここにはある。
魂の自由だ。
いっつも嫌いだった。
この身体。
汚い手、汚い耳、汚い口、汚い足。
全部、鬱陶しい。
消え失せろ！
消え失せろ！
全てをないがしろにして、見下して、私は彼と天国へ行きたいんだ。
邪魔だけはしないでくれ。
神がかりの状態において、天国で暮らしたいんだ。
自由を許さないあいつらを許しはしない。
なにもなくなって、すっきりした。
私は水や火や木々のように生きたかったんだ。
なににも縛られずに自由に音を奏でていたかったんだ。
死ねばいいんだ。
死んで天国に行けばいいんだ。
天国でなら、自由に音楽を奏でていられる。
彼と私は何回も自分たちを拳銃で撃ってやった。
ドン、ドン、ドン。
撃つたびに高鳴る鼓動。
ドン、ドン、ドン。
あいつのこめかみは冷たかった。
あいつのこめかみは小さかった。
荒野でタバコの空き箱を踏みしめた。
自由だ！

荒野でビールの空き缶を踏みしめた。
自由だ！
夜の手前で倒れたものたちは、自由を標榜したが、対価を払う度胸がなかったために、その身体に固執するがゆえに、死んでも自由になれず、地面に這いつくばって蠢いていた。
死だ。死だ。死だ。
死が近寄ってくる。
彼と私は不自由なものたちの大群に追い回された。
街を全力で駆け抜ける。
私は彼と一心同体になった。
何度でも自由の拳銃で自分たちの頭を撃った。
こめかみに拳銃を突きつけて。
ドン、ドン、ドン。
死だ！
何回でも死ねるぞ！
死ぬ自由がここにはある！
死んで自由になるんだ。
死ぬたびに彼と私は自由になった。
もっと罪滅ぼしを！
姦淫と人殺しの罪の償いを！
自分たちをひたすら撃った。
血しぶきの赤が荒野を染めた。
ドン、ドン、ドン。
自分たちを自由という名の拳銃で撃って、「フリージャズ万歳！」と大声で叫んで死んだ。
何度でも撃った。
乾ききった拳銃の銃口は、私たちの胸を熱くした。
何度でも自由になってやる。
死んで、死んで、自由になってやる。
私たちは何度でも死んで自由になった。
ドン、ドン、ドン。
死だ！
死だけがそこにある！
そして、私たちは遠い天国で、いつまでも夜の魚を頬張って、酒を飲み、楽しく拳銃でフリージャズを奏でて、遊んだ。

【Night Voice】

彼女がポロポロと弾くギターの音色。真っ青な夜の向こう側に吸い込まれて、溶けていく。彼女は泣きながらギターを弾いた。ギターも一緒に泣いているように聞こえた。夜。悲しみが音を濁して、トーンが乱れていく。歯切れの悪い音。ギターの弦が切れる。彼女の音が途切れて、夜の静寂がヌルリと顔を出した。

私は彼女の方へと歩いて行き、寄り添って言う。

表現し続けるというのは、厳しいことだね。ほんとうの表現っていうのは、たとえ、周囲の人間全員から「お前の表現が嫌いだ」と言われても表現を続けなくてはいけないものだからね。それは夜道を歩き続けるような峻厳の形。幻影と手を繋いで、ダンスすることでもある。なぜなら、ジャズは夜の音楽だから。

暗い部屋のなか、彼女は白い歯をむき出しにして、ニヤリと笑った。

こちらへと白い左手を伸ばすと、彼女は夜の闇に消えた。

私は一人、眠りのない夜を歩いた。ろうそくの火が揺れている。

遠くからはカエルの鳴き声が響き渡る。轟音を立てて通り過ぎるバイク。水の滴る音。

私は臆せずに、夜を歩いた。

夜を歩き抜くことだけが、私のすべてだったからだ。

闇のなかに浮かんでは消えるニヤケ顔。

夜を歩くとはどういうことなのだろう。カバンのなかには、彼女たちと契約を交わしたときに受け取った契約書や差出人不明の黒い封筒に入った罪状が入っている。契約書や罪状を読んでその内容を引き受けることが、すなわち夜を歩くことなのだろうか。私は契約書や罪状に再び目を通した。

「影の。私の。過去の。お前の。黒猫の目で夜を歩いていけよ。街は騒めいていて、死が、闇が、暗雲が、立ち込めているのに見えない。熱い。鼓動が。死が。声が。天井を見据えては浮かんでくる、鉄橋、廃墟、墓場、半壊の自転車。お前の陽気さは罪悪だ。お前のなかの金の男を殺せ。いますぐ、その拳銃で。撃ち殺せ」

私は自分のなかの金の男を殺すべきかどうか、殺せるかどうか、考えた。

そして、彼女の悲しみを思った。

青い魂の火を見た。

いずれにしても、いつかは死ぬ、私のなかの金の男。

招待席

城本　百　　京都府

【祝福】

夕方の風に花が小さく揺れる、そのささやかさに泣いていたあの頃は、かけがえのない宝物だった。そう思えることは、どうやら永遠ではないらしいと知って、私は泣いている。この気持ちを真空パックしたくて、澄み切った空気を吸い続けている。

いつか、惰性で人を愛し、キスの味を覚え、つまらないと言われてしまっても、あなたを好きでいたいし、あなたは純粋だと叫びたい。孤独を思い出した時は、赤い花を吸うように、過去に口付けがしたい。そういう願望を、透き通っていると言える図々しさ、私は欲しかった。つまらない人間になったら、祝福してください。きっと私はこの上なく、幸せなのだと思う。

（二〇一九年度金澤詩人賞受賞者）

ニューヨーク　―コロナ・パンデミック下の愛と死―

阿部静雄　ニューヨーク

（二〇一八年度金澤詩人賞受章）

【不幸なる者】

僕の住むマンハッタン島は地球のあらゆる人種で
ごった返ししている
何を話しているのか　ごった返しした言語の音が
空にスモッグをつくり
天からひかりがスモッグを突き抜けて
信仰者のうちに入る
幸せ者よ

空に黒雲をつくったスモッグ
人種の顔という顔が黒く汚れ
睨み合い黙り合い　腹の中は永劫に不透明
不幸なる者よ
それでもあらゆる人種を串刺ししている
ひかりがある　自由という名の星から
それでも極貧から大富豪　あらゆる階層を串刺ししている
ひかりがある　平等という名の星から
それゆえに激しい差別が軋む
差別　差別　差別
人種の　性の　階層の
何が何でも差別を発生させる差別の種が
星条旗の上での狂わんばかりの流血騒ぎなど
これみな日常茶飯事

なんということよ！
平和な星までが軍旗を掲げてぼろぼろに
なってゆくのを見つめねばならないとは！

【落葉を掴む】

僕は長い間　好きなマンハッタン島の大都会で
生活し馴染んできた男だ
無数の高層ビル　谷間に旋風を巻き起こす
攻撃的な風　いつも吹き飛ばされるようになると
コンクリートを掴むんだ
でもこのコイルを巻いたシューッシューッ
と声を張り上げる風は　僕をこの国に同化
させない拒否の力でもあると感じる
どうも僕が寄り添っていたのはこの
コンクリートというやつで樹木ではなかったんだ
頭上の梢の緑が何やら風と一緒になって
僕を島の外に　海に追いやるように
揺れているのを目撃する

この夏中　そんな想いと気分で緑の葉脈
を見つめると　もう落葉色になって僕の路を
けむらせる　僕の内を読んだようだ
僕だってもともとこの大都会に同化する
気持ちなんてなかったことに・・・
たとえおまえと出会い　近づき　抱擁し
交接したとしても　何もかも金の権力が
蔓延し支配する大都会の影
それに僕自身いくらがんばってみても
落葉を掴むほかない運命

外からやってきた人生の旅人よ
落葉になって朽ちるまえに
考えよ　考えよ！

【残酷な冬】

残酷な冬の冷血な季節がやってきた
乾き切った荒野の怪物の大都会に
夢と幻想と幻覚とが
織りなす暗い空に
不気味な光を放出しているんだ

若い男がね
地下鉄のプラットフォームから
ジャンプしてね
引退まぎわにだよ

中年の女がね
橋の欄干から
身を投げてね
お腹のわが子に爪をたててだよ

そして故老がね
教会で
首を吊ってね
心貧しさを隠してだよ

ああみんなが皆
死神に抗って　それでも
命をあずけようと
人生を引き裂く大都会で
逝っちまったんだよ
僕だって・・・

【耽美】
僕に傾いてくるおまえを
僕は愛さずにはいられない
おまえを掴んで
髪を乳房を股を
僕の肉体に引き込んで
肉を交わしたい
逃げようとするおまえなら
なおさらのこと
逃がさないためにだったら
僕はわが身を切り裂いて
おまえを神経の糸で縛り付けよう
それでも逃げようとするのならば

僕の精神をとかして
おまえを僕の魂の塊にしてしまいたい
それでもそれでもおまえは逃げようものなら
僕はどんな手段をとっても
たとえおまえを殺しても
僕の内面の牢獄にとどめておこう
それが僕の感覚なのだ
その感覚の奥に
極に行きつけば
僕の精神が重厚な宿命の口を
開けて待っている
だがそうは言ってもおまえは逃げる
逃げ去るのがおまえの宿命なのだから
だが僕は決しておまえを逃げさせまい
おまえの美しい髪と
おまえの美しい乳房と
おまえの美しい股を
僕の肉体に引き込んで
僕は僕自身の息を止めてしまうのだ
それしかおまえを僕のものにする方法はないのだよ
おまえという僕に傾く
ああ愛する美の結晶よ！

【母】
シャンパングラスに
命の粒子が跳ね合って
踊っている
花屋で僕を待ちわびた
赤と白のバラのさびしい花弁
こぼれるシャンパングラスから
美しい顔を出す
静寂な朝
差し込んでくるひかりが
声となる
新年おめでとう
今日は母の命日

【父に伝えること】
父よ
七十五年前　南方の島であなたの仲間が
血を流し戦死した
流さなかったのはあなただ
流したのは僕の母が大きな露玉を
僕だって流したかったけど
母の中ではね

父よ
帰還してまもなくあなたが流した血は
市立病院であった
仲間の両手に握られた幻覚に安心しきったように・・
母が震えながら思い出を語ってくれた
あなたに生きながらえて欲しかった母と僕は
それが夢になってしまった
そしてそれ以来
母はあなたがトラウマとなった悲しみの戦いが
母の生涯となった
母が九十で逝ってしまったとき
母の心臓を穿つと結婚指輪が大事に
おかれていた
そのことを僕はあなたにいつか
伝えておきたいことだった

僕の戦いなんてあなたや母の戦いと比べたら
小さいものなんだ
大都会での汚れた闘いなんだからね

【黒い裸】
大都会の夕暮れが僕を見捨てる
街角の犬たちが僕に吠えたて
去ってゆく

何のために吠えたのか
分からないまま　雌犬が振り返る
僕を恋人かのように・・・
見捨てた恋人が戻ってくる
ふと恋人が夕暮れのベッドのなかで
黒い裸で迫ってくる
淋しく僕を見捨てた女(ひと)の眼に
夕暮れが渦巻いている
差別の闇が　どうしようもなく
女をとりまいて
街角の犬たちがまた吠えたてた
もう恋人は戻ってはこない

【いつものことなれど】
いつもの通り
またまた荒っぽいバスドライバーに
乗り合わせてしまった
道路はどこまでも平らであるというのに・・・
二人の幼児と二人の中年女が駆け込んできた
幼児は窓の席に陣取って外をはしゃぎならが
見渡している
どちらが母親なのか皆目見当がつかない
二人の女は深刻に話し込んでいる
不幸にでも出会ったのだろうか
バスはハーレム街にむかって左にハンドルをきった
あ！　幼児が危ない　投げ出される！
咄嗟に二人の幼児は席の上部をつかんだ
柔軟にゆがんだ体形になったが
バランスがとれたようであった
あのバス野郎　勝手すぎる
込んでもいないし　バックミラーがあるというのに
二人の女はそれでも深刻にぺちゃぺちゃしゃべっている

冬の外の池にはアヒルたちがかたまって暖をとっている
二人の幼児はアヒルたちに指をさし　手に持った切り紙の
鶏の首を窓にこつこつと上下に揺らしている
時たま窓ガラスにあたる音が快い
僕は気が気ではない
本をしまい込んでいざという時の態勢を整えている
どうゆう分けか次の駅では急ストップをかけるのだ

裸の樹木たちが流れてゆく
アヒルたちが左に消えてゆく
遥か向こうに造りあげた不快な高層ビルが
竹が雨雲をつくようにそっぽを向いている
思った通りバスは急停止した
横ぶれした幼児のちっちゃな両手は頑丈であった
僕の降りる駅だ
さあ　降りなさいと一人の女が言った
二人の幼児は誰の助けもなしに
よちよちと出て行った
僕は幼児を目で追おうとした
その時　紙コップをもったホームレスの男の
淋しい目にであった
乗り換えの地下鉄は異様な臭いで不快であった
でもそれが僕の眼の前の開けた世界であった

【大都会の鳥】
ピーピー鳴いている
大都会の鳥たちが
ああ淋しいんだなー
都会人だったら　いや人間だったら
沸いてくる情念に揺られよう
だけど君　鳥たちが歌を歌っているだけだよ

ピーピー鳴いている
大都会の小鳥たちが
ああ愛情を求めているんだなー
都会人だったら　いや人間だったら

沸いてくる情念を止めようもない
だけど君　小鳥たちが歌を歌っているだけだよ

淋しいんだ
愛が欲しい
都会人でなくても
地球の上の人間だったら
誰でも　僕もさ
だけど　おまえよ　鳥たちは
ピーピー歌を歌っているだけだよ

【とあるカフェで】
別れをためらう和訳の詩を読み終わった
ふと気が付けば　僕の前のおなごが英語の詩集を見つめていた
三十分たっても頁をくくろうともしない
それに僕の好きなハートマークのカプチーノが
その詩集の横で冷めきってしまっていた

おなごのハートに思いやった
出会いのハートの眼がそこに？
その眼に引かれ　引かれてしまった
僕のハートマークのカプチーノはとっくに
飲み終わっていた
おなごのそれは未だ青春の輝きを
失わずハートマークがためらっていた

気が付けば　僕はもう一度
別れの同じ詩を読み始めていた

【狂った女】
狂った女がいた
美しい花みると　ちぎって食べてしまう
蕾があれば　飲み込んでしまう

あの蕾　花を咲かせるだろうか

きっときっと　あの体のどこかで
花を咲かせるに違いない

人類が愛してきた水の宮？
きっときっと蓮の花となって
輝き飛び出してくるに違いない

狂った男がいた
狂わしい欲望を捨てられない
それが僕なのだ

【神】
ぎゅうぎゅう詰めになった病院で
誰が命拾いをするのか
病院だって　人間だって
内部は戦火のごとく
悲惨で激越な戦場だ
死者が列をなしている
教会はからっぽだ
冷凍トラックが列をなして
待機しているとは
倒れた　医者が
倒れた　看護師が
ついに火薬が防護の壁をぶち壊して
医者にまで黒い春が舞い込んだ
ああ　薬がない
薬が！
神に等しい薬が！

【ウイルスの選択】
自由民主主義国家は
オープンだ
風通しもよい
だが共産党が牛耳る国家は
閉鎖的だ

風通しが悪い
主権は人民にあらず
人民の暴動は体制を穿つゆえ
悪いことは隠しに隠す
隠蔽・虚偽こそ政治の機関銃

だが待てよ
風通しのよい国よ
ウイルスこそおまえのような国を
好んだのだ
風通しの悪い国では
密閉・隠蔽・隔離のなかでしか
生きられないからね

【不信】
食料が底をついた
さあシェルターから出て買い出しだ
マスクはしたか
ゴム手袋はしたか
帽子はかぶったか
あいつもこいつも戦闘構えで
どいつが敵なのか分かりゃしない
あいつの目
恐ろしく鋭い
猜疑と嫌悪まるだしだ
近づくな　近づくな
近づいては奴にやられる
あいつだって
アジア系の恐ろしい俺を
猜疑と怒りに沸騰していようだ
俺に近づけばハイリスク

ああ惨めだ俺は
まったく惨めで悲しいよ
不信になり果てた俺のこころ
なんてことだ

【寒気】
そうだ
列車の中の吊革に触れた？
改札口のプラスチックの横棒に触れた？
その手で顔に触れた？
あの店のドアのノブにも触れた？
その手で？
帰宅して一生懸命手を洗い顔を洗い
うがいだって懸命におこなった
だがあのコロナウイルスのついた手で
顔を？
ああ　寒気がする
きっとあの手で目に口に触れたのだ
それに他人とは2メートル離れ行動したけれど
いや1メートル以下の時もあった
マスクなしのあいつが咳をしたとき
マスクなしの俺は咄嗟に口をふさがなかった
ああ　寒気がする
あのウイルスが入った？　入ったかもしれぬ
ああ　寒気がする　寒気が・・・
なに外出禁止命令！

なんということだ！こんなストレスの生活とは！
はやばやと咲いてしまった貯水池の
桜並木は　ああ待ってはいない

【魔物】
くそ　このウイルスめ
この魔物
どこからやってきたか知らぬが
俺の友人の肺を爆発させやがって
外は陽気な春　芽という芽が爆発し
青葉や明るい花を咲かせているのに
なんで友人が倒れ

肺が焦げ付かねばならぬのだ！

くそウイルスめ
この魔物
友人は必ずこの戦いに勝つ
負けてたまるか
そして外気を吸って
生きていることの歓喜に踊るのだ

この魔物め
いいからいいから
火薬から火薬に火をつけよ
友人は必ず耐えてみせるぞ
おまえを必ず撃ち返すぞ
いいか
今から敗者になる用意をしておけ！

ちくしょう
この魔物め！
友人を奪いやがって！

【春なのに】
春なのに
しんしんと落葉が降りしきる
明るかった空も夜になる

地上には大都市を埋め尽くした
棺という落葉の棺
名があって名のない侘しい落葉

春なのに
落葉を癒すべき墓地は
もう埋め尽くされていた

ほら　遠い向こうに春の煙が
勢いよく立ちのぼっているのが見えるだろう
灰になっても引き取り手はいない

忙しい郵便配達員
病院からしきりに送られる手紙
死の証明書

はやばやと
大都市に夜が落ちていく

【黒い霊安室】
春の日が沈んだ
市の通りには人影もなし
死影を照らす電灯は暗く
家族の嘆きを癒している

病院の外には冷凍トレーラーが
横付けされ　市全体で８０台
大きな霊安室となって列をなし
死体の闇がおおっている
どのような家族への手紙を
胸に秘めて逝ってしまったのだろうか

ああ虚しい家族の努力
哀れなり
遺体の場所は知らされず
誰もが沈黙したままだ

閉じられた教会
閉じられた家のなかでは
耐え難い不安と苛立ちの満ちる嘆きと
祈りが夜に沈んでいく

【大都会の怯え】
これほどの静まりかえった大都会が
過去にあったであろうか
ビルからビルへ

アパートからアパートへ
ひっそりした大都会
怯えながら喪に服している

【残酷な霊安室】
ひとの目を偲んで　続々と
運び去られる
苦しみ抜いた死体
戦場から離れに離れた
小さな孤島の
大きな埋葬場に全員が一緒に埋められる
ひとりひとりの墓石もなく
たとえ仮の場としても
悲惨で残酷だ
命日を知るのは誰か

行き交う白いカモメの声が
ああなぜか　かまびすしい

【外の闇】
昨年の誕生日
セントラルパークの貯水池の横
明るい水色の空のもと
桜並木道をゆっくりと静かに
こころゆくまで散策した
柔らかくひろげた薄桃色の花弁が
口づけを欲しがって
早すぎた蝶々が僕をさえぎった

今年の誕生日
早すぎた春の猛威が
桜をすべて奪い花弁を踏むものは
誰もいなかった
何もかも早すぎる
早すぎる

猛威のコロナが激しい雷雨を轟かせ
盛んに僕のひび割れた窓ガラスを
ガタガタ揺らした
音がする度に　誰かの心臓がもがき
逝ってしまう幻想に
僕は外の闇を見つめる他なかった

【ある男の手紙】
君　僕の病院からの手紙を開けてはいけないよ
生きたコロナウイルスが手紙の中で
生息しているかもしれないからね
重篤患者で満杯の病院はコロナウイルスでいっぱいなんだから
最前線の医師と看護師たちだって弾丸をうけて戦死しているんだ
僕は今　戦火のなかにある病院の兵士なんだけど
こうして君に手紙を書けるのもこれが
最後かもしれない　でも
この手紙を決して開けてはいけないよ
開けられるもんか！
僕の心の中の手紙なんだから・・・

【ある男の青春】
巣ごもりを飛び出して
淋しい秘密の薔薇との口づけ
ああ地獄の春が待ち構えていたとは

【懐かしむ男】
男は懐かしんだ
無為に過ごした若い頃
社会主義に魅せられて
生活コストの安さに
その利便さに・・・

男は懐かしんだ
世間にもまれにもまれた中年の頃

資本主義に魅せられて
金の力こそ
権力と自己実現の近道であることを
その利便さに

男は懐かしんだ
無用の者に晒された老年
全体主義に魅せられて
一気にコロナウイルスを大掃除したことを

男はもう懐かしむこともなかった
コロナウイルスで逝ってしまったのだ

【欲望よどこへ】

国難にであって
俺の欲望はどこへいったのだ
消えてはいないそれが・・・
冷蔵庫をいっぱいにするでもなし
金貨を求めるでもなし
政府の救済金をありがたく受け取って
平常心で日々の巣ごもりを
生きればよい

コロナ国難にであって
俺のような年寄りがいち早く
呼吸困難で逝ってしまおうが
欲望が冷めきってしまった俺のこころ
今では穏やかさと無欲とが
俺のこころに踊っているよ

【地上での愛】

男が深く愛した女の中にコロナが入った
コロナは生き続け
女に深く愛された男の中に入った
女は死んだ

幸せにも男は後を追った

【老人と犬】

白いマスクと青いゴム手袋
深い帽子をかぶって完全防備
僕は薬局に向けて通りを急いだ
急に神経がやられたごとく
落ちつけない足の運び
都会は不潔　不信者だらけ
それでも空気のかびをかき分けながら

おや　向こうから老人と犬がやってくる
楽しくてしょうがない犬
僕に近づいていくる
おいおい　犬よマスクをしろよ
僕に近づくな！
ウー　ワン　ワン！　ワン！！
なに　守れと
ソーシャル・ディスタンスを
老人と老人の不信者同士が
この時　初めて目をつき合わせた

【都会のシンボル】

こんなに多くの行き場のない死体
山積みになっているなって
あまりにも非現実の都会

カラスがむせび泣き
ビルの谷間に反射して
黒い光が戸惑うなんて
非現実の都会

腹をすかした無数の鼠が
レストランから逃げ出して
行き場のない目が見たものは
無数の十字架なんて
あまりにも非現実の都会

五月は最も豊かな慈愛の月
死体をおおった土の上に
冴えきった新緑が泪をためて
ぼろぼろ泣くなんて
非現実の都会

だけど僕がこうして都会を描くのは
非現実の影の不条理の
僕の都会(こころ)なんだよ

【都会の光景】
宝石をいっぱい燃やした都会
都会規模のおおきな太いろうそくの炎が
初夏の香りのなかで
悲しげな光を放っている

【球形の死者】
今や積み重ねられた６００万人の
コロナで逝ったかけがえのない死者を
あのアトラスが背にかかえている

球形となったその死者の月が
毎夜　光を放っている

巣ごもりの倦怠の下で僕は
不毛化し冬眠と化して

子宮の中の子となった

【黒い米国史】
アパートの窓から若い母親が合掌して
祈りをあげる小声が聞こえてきた

息子よ
両手をポケットにつっこんではいけないよ
太陽に見せなさい
チンピラ風な恰好はだめよ
ちゃんと恥ずかしくない服を着なければね

息子よ　息子よ
あなたも私もいつも息が苦しいことを
これが私たちの悲しいかな
米国史であることを忘れてはだめよ

息子よ　息子よ　息子よ
両手は　いいですか　陽にあてているんですよ
何を買ってもレシートと袋をもらってね
警察官のまえでは何でも協力するんですよ
なんでも・・・

祈りが終わると　窓から首を出して路上を見渡した
黒い肌の手がそっと窓を閉めた

【両眼の差別】
白い肌の両手はポケットに入ったまま
黒い肌の両手もポケットに入ったまま

白人警察官の右眼に白い肌のそれ　無関心
白人警察官の左眼に黒い肌のそれ　不信感

生きた幾何学模様
都会の路上に無数に描かれる

【怒り】

1

なぜあなたたちは黙っているのか
中国コロナウイルスで殺された
今でも殺され続けている
無数の死者は黙ってはいないのに

なぜあなたたち生者は立ち上がらないのか
死者は立ち上がろうにも立ち上がれないというのに

2

なぜあなたたちは黙っていられるのか
家族も個人も
自由も宗教も道徳も
理性も言語も
悠久なる自然のなかに静かに営み
子孫に貴重な伝統と文化を伝え
生存してきた新疆ウイグル民族

ゴミのごとく強制収容所に入れられ　精神を肉体を
人権をはく奪し続けられている
無数の死者は黙ってはいない
だが死者は立ち上がろうにも立ち上がれない
生者も立ち上がろうにも立ち上がれない

豊かなあらゆる国よ
なぜあなたたちは立ち上がらないのか
それでも民主主義国家と言えるのか！

【ヘビの正体】

なぜ僕の心の奥にヘビが棲み始めたのか
分からないが　どうもへびは僕が好きなようである
僕の内にアダムとイブの園があるのだろうか

コロナ・パンデミックが一時下火になったとき
定期検査で病院に行った　下火とはいえ
ヘビは地下鉄の列車にもバスにも乗るのを嫌がった
夏の真昼の太陽はヘビをぐったりさせ
水を欲しがったが手持ちの水はなし
どうしようかと迷ったが
僕が闇の中に巣ごもりしていることを考えると
脱水症になることもあるまいと　そのままの状態で
一時間ほど足を疲れさせて病院にたどり着いた

その間　ヘビは僕が舗道ですれ違う人たちを嫌って
あっちに行け　こっちに行けと
二メートル以上も離れていると言うのに避けよ
避けよ嫌悪する始末

こいつ　舗道では神経をとんがらせ　いきりたったままなのだ
それに年寄りの多い病院に入れば
限りなく人との接触だけでは避けてくれと
飛び跳ねて暴れるのだ
密室での看護婦が血圧計をにらんだときは
無い窓という窓を夢中になって探し回るありさま
道理で異常に僕の血圧がうなぎのぼりに上がって
心拍数も１２０以上を突破
それに医者が僕を診察したときなどは
こいつまでが診察されるのではないかと思って
狂ったように血液を飲み込んでは吐き出す
なぜそうするのか僕には分からなかったが
あとで気がつくと　それがヘビの生き残りをかけた
生存法らしい

病院での診察は終わった
疲れた僕はこいつを病院に置いていこうかと思案した
が　感ずかれて　僕をかんかんになって激しく怒り
僕の背骨に巻き付いて離れようとはしなかった

僕は高度神経症のこいつと一生過ごさねばならないのかと
思うと　これからも高血圧症の人生が恐ろしくなった

でも　僕の園に棲む唯一の生きものでもあり
園の実が美味しいから食べよと促したのもこいつだ
こいつのおかげで僕は人間らしくなった
そう思うとやっぱりこいつと死ぬまで
付き合っていかねばならないのかと・・・・・

【老婆の姿】
ひとり公園で老婆がベンチに座っていた
祈りの姿勢で
曇った空にはニュースが飛び交っている
コロナ感染者数がうなぎのぼりであることを
第2波の恐怖

老婆の首に下げた十字架が揺れている
ノアの箱舟を待つように
その祈りの姿　思いに耐える
その思いこそ僕のこころを満たすも
僕のヘビはとぐろを巻いて
あり得る現実に立ち向かえと叱咤する
まるで僕の導師になったごとく・・・

【ある日の出来事】
清潔になった地下鉄
乗っている人の少ない列車めがけて
走って中に入った

マスクをつけない黒い肌の裸の若者
スマホを耳につけ床を叩いては
ビートに酔っている

僕は見るのが怖い
前方を見ると

真っ白いマスクをつけた肌の女(ひと)の前で
わざと靴をより強く床に叩きつけて
踊っている

僕の駅ではない駅がきた
誰もがドアの前にたった
僕もその一人であった

【マスク】
誰もいないところではマスクをつけないよ
おや　人がかたまってやってくる
僕の前方からも後方からも
急いでマスクを取り出し顔につけるも
さっきこの手で皆が触ったドアをプッシュした
のではなかったっけ
電光石火のような不安が軋る

誰もいないところではマスクをつけないよ
突如　僕の後方からマスクをつけない自転車に乗った
男が喘ぎながら坂をのぼってきて僕の顔の側を
舐めるように通り過ぎて行った
咄嗟に止めようがない呼吸　きっとやつの息を
吸い取ったにちがいない
電光石火のような恐怖が走る

誰もいないところではマスクをつけないよ
ああ気持ちがいい　緑の小道の散策は
それにしても緑の波の音がかまびすかしい
青葉のやつら　何をぺちゃぺちゃ話し
笑っているのか

俺たち人間が忙しくマスクを取ったり
つけたりと　おかしな動作に狂っていると?
賢い知性に満ちた人間がコロナウイルス源泉を

野放しにしてしまったと？
死体の山を積み上げた人間は重罪だと？
俺たち青葉にもマスクを配布せよだと？

青葉よ　青葉よ
静かに黙っていてくれないか　僕は毎日
頭を抱えながらおまえたちの影を踏んでゆく
身なのだから・・・

【誰でもが歩く道】
蒸し暑い夏　足のむくみをとろうと
いつもの緑の公園に出かけた
腹をすかした愛人への餌をポケットに突っ込んで
風のない小道　頭上の梢の緑の傘の陰で
長い巣ごもりから解放され
そよ風にあたってなんと気分がよいことか

周りをよく見張ると小木の緑の枝が揺れている
近づくとリスの顔が現れた
もっとよく近眼の目を見開くと　枝に
ぶる下がった薄緑色のちっちゃな風船の
ようなものを両手でとって口にはこび
袋を破っては忙しく口を動かしている
時々僕を見張っては
「じゃましないでくれ　とっとと消えてくれ」
と言わんばかり　そして
僕の気持ちを読んだかのように
「おまえの気持ちなど迷惑千万」
それはないよ　僕の愛人のことばとは！
振り向くと緑の梢はひっそりしていた

一羽の鳥がベンチに腰掛けた僕の前に
ソーシャルディスタンスをとって小道に
舞い降りた
「分かった　分かった　ほら餌をあげよう」
そしたらなんと数多の鳥が押し寄せて

マスクをした僕とソーシャルディスタンス
をとってピチピチと声を張り上げた
「こんなまずい餌はいやだよ」と
僕の気持ちを台無しにした
餌は小道に散らばったまま　一羽の鳥さえ
見向きもしない
「早く出しなよ　うまい餌を」と
言わんばかりの顔という顔

餌ならなんでもよいとは僕の思い上がり
生きものへの愛情のなさ
自然はなんでも用意してくれているというのに
人間にでさえ・・・

老いて長い人生経験を積んできた僕に
蒸し暑い夏が嘆くようであった

＊

前方に月光に照らされた僕の墓が見えたとき
一瞬　人生を勝ち取ったと感じた
草を分けて分けて歩んできた分けではないが
明るい墓の見える垣根にゆっくりと手を休める
ことができたわけだから
これからは僕の道は一直線の道だ
愛の炎も生の苦痛も
もう振り返ることもあるまい
何もかも捨てて物を所有することもあるまい
精神につなげることも・・・
全てを空にして　ただただ僕の古里での潮騒
の音色に染まりながら　開けた道を
明るい気持ちで歩いていこう

＊

ふと思う
生と死を
それが一卵性双生児であることを
詩はその影のことば

【路上で】
都会の路上で気ちがいに出会うことがある
ちゃんとした身なりをしているが
その挙動はどこかおかしく
何かを訴えようとパントマイムをしている
そして　時々　神をののしっては雄たけびをあげ
その後で　自分の殻に入って
路上の貝となる

僕は気ちがいではないけど　路上で　かの国で
囚人にさせた民衆の上に君臨する皇帝を思い出しては
憤怒の念にかられることがある
このごろつきに僕の父や母が処刑された分けではないが
あの路上の気ちがいと同じように
僕の挙動をおかしくさせ　その前後の記憶が消えるという
熱病にかかってしまうのだ
その時　都会の闇から　何かでかい巨人が現れて
たくましい姿で僕に迫ってくる
僕は身構える　僕の精神がこの鬼畜の食材にされないように
そしてその巨人への戦闘こそ
僕をして僕の殻から抜け出して
僕が路上の貝を打ち壊す絶好の機会なのだ

都会は凍ったように冷たい
また気ちがいが路上に現れたと・・・・

【新しい路面電車】
キリスト教の信仰世界は若い世代が終わらせると言う
有福の増大と上昇を続けてきた
「欲望という名の電車」の価値観で
その山頂から別の山頂を見渡しても
これといった別の山頂が見える分けではない

今新たな信仰が路面電車となって

物欲の社会に抵抗しつつ物欲を刻んでいるという
長く都会の実社会で疲れ切った僕などは
その信仰に魅惑され　僕の人生に新たな価値観
を有機的に絡め浸したいと思う

もの豊かな格差激しいこの国での激しい暴力と
破壊活動から　ことばによる虚の毒社会から
一刻もはやく脱出し　わが祖国の伝統と文化のなかで
エコロジー路面電車にのって　僕は
ゆっくりと生き　白骨になりたし

【選択】

僕の目の前に一本の樹木がある
意識して根元からゆっくりと上に上に
見つめてゆくと必ず二またに出会う
僕は考えてしまう
どちらの路を選ぶべきか
そして自分自身に言い聞かせ
選択する　利己の路を
すると再び選択を迫られる二またに出会う
僕はもっともっと考えてしまう
そして決心する僕の欲望の旅の路を
そうやって何度も選択しつつ上に上に
目が登っていく
途中で選ばなかった路のことが思いやられる
今さらどう思っても仕方なし
目がてっぺんにまでやってきたとき
その上にはもう選択すべき路はない
せいぜいのところ死の天への路だけだ
考えることもあるまい
僕をとき放す自由だ
死の予感もまんざらではないようだ

【愛の素描】

落日が背にくいこみ

潮の叫びがおまえの声になって
俺の脳をかきまわす

海辺の白いホテル　磯の香り
われら二人の愛の潟
燃え狂った性の悲しさ
物憂いカモメが鳴きながら
別れの黒い影の上を
通り過ぎていった

【赤いリンゴ】
赤い若いリンゴをグサッと噛むと
おまえの豊満な肉と汁がほとばしり
俺の全身が火となる
この俺の死の歯で

赤い老いたリンゴをグサッと噛むと
俺の腐乱した肉と汁がしみだして
おまえは俺を火葬場におくる
そのおまえの死の歯で

死の歯と歯とがぶつかり合って
俺らの影の愛は夜の深い闇のなかに
消え去っていく

【冬の芽】
晩秋の悲しげな
星から降りかかる雨を浴びて
恋するふたりが真っ裸をさらしながら
溶けあうまで絶頂の喜びにひたった
みずたまり

何も知らない枯れゆく老木
投げ出した根っこの足から
這いのぼるふたりの歓喜

ああ　もう冬か
雪片がひかりに照らされ大気に踊る
ふと　老木が梢につもった
雪の花のなかに　小さな青い芽に
釘付けになった

【真っ白いシーツ】
恋をすると僕は身にまとっていたもの
何もかも破り捨てて
真っ白なシーツに潜り込みたい
君だって僕に恋をすれば
最後のパンティを僕にぶっつけて
真っ白いシーツに飛び込みたい
気持ちを抑えられないだろう

この真っ白いシーツを初夜に
輝かせるか　泣かせるか　破らせるか
僕たちの恋の深さによってわかろうが
でも　決して血の印をつけないでおくれ

彼方に消えてゆく僕たちの情熱だけが
ふたりの眼球の遠近法なのだから
真っ白いシーツを僕たちが
輝かせたときにそれが分かったんだ

【都会のビルの顔】
日暮れ時
都会のビルの群れの一つ一つの面が
西日をうける
あれ　顔が　顔が現れている
あらゆるビルの面に
あの顔は？　あの細長の顔は？
どこかで見たような顔だ
愛らしくも醜い顔でもない顔

セザンヌ？　いや違う
ああ　あの画家だ　愛し愛された顔だ
モジリアーニ！
どこか憂愁と嘆きに沈んだ
西日に飛び込んでいった顔だ

西日が落ちた
遠くで泣く赤子の声をきいたような
気がした　思い過ごしだろうか

【孤児】
父さん　母さん　心配しなくたっていいよ
ぼくの中にはね　沢山の動物が棲んでいるから
鳥　リス　羊　狼　馬　などなど
これまで父さんと母さんがぼくのベッドで見せてくれた
絵本の動物たちが今　ぼくのまわりに集まってきて
こう慰めるんだ

いいか悲しくなったら鳥になって
自由に空を飛びなさい　地上の人間がちっちゃくなってね
おまえよりもずーっとちっちゃくなるからね

いいかお腹がすいたらリスになって
木に登って木の実を食べるんだ
それだけではないぞ　葉っぱが魚になる瞬間を
見逃してはいけないよ

いいか　素直な羊になるんだよ
そうしたら皆がよくしてくれるからね
それにおまえは羊の年に生まれたんだよ

おいおい俺　この狼の役はどうなるのかね
　それは最も大事な役目　責任重大だ
責任重大？
ああ　そうか坊や　俺はおまえを常に見張って
コロナウイルスが飛んで来たら食っちまう用心棒ってわけだ

でもなー　悲しく淋しいだろうなー
俺の不在で父さんも母さんもあの毒で逝っちまったんだから
残された一人っ子の坊やよ
だが心配無用だぞ
絵本から飛び出した皆がおまえを愛し身代わりになるから
いいか　孤児院でへそを曲げたりしてはいけないよ
不満なことも　辛いことも　泣きたいことも
どんなに苦しいことにあっても
どんな嫌ないじめにあっても
いいか　その時には絵本の中に入って本を閉じるんだ
皆が皆おまえを愛しているからね

【挨拶】

毎朝　くりかえす　挨拶
死よ　さようなら　僕は元気だ

毎夜　くりかえす　挨拶
死よ　こんばんわ　僕は出発する

命日　僕の　挨拶の往復のうちで
灰となる日が　必ずやってくる
決して　思い出すことも　できない日が

【父】

父よ　父よ
戻る保証のない血の戦争の路をよくぞ戻ってきた
幸いなるかな　幸いなるかな
小さな英雄よ
英雄だって　英雄よりも　より長生きした祖母の
またぐらから　生まれ落ちた霊に過ぎない

父よ　父よ
苦しい戦いは戻ってきた後にある
熱病との　食べるための　雨をさけるための戦い
来る日も来る日も　古里での戦いは

あなたが断崖の路を歩んでいるに等しかった

母が９０で逝ったとき　あなたが３６の若さで
命を手放した結婚指輪が　７０の僕への
唯一の形見になった
母が心臓に大事にしまっていたそれだ

父よ　父よ
秋を華やかにさせている花屋に行った
淋しそうな花が僕の手を握らせた
７５になって初めて父への花を買った
今日というあなたの命日に
そして　初めて　ありがとう　と言う言葉が・・・

【聖なる柱】

都会はコロナ・パンデミックで連なる列柱が墓石になった
路上は　消えてしまった警察官
消えてしまった人ごみ
ときおり見かけるのは大声で喚く狂人たち　そうに違いない
僕は急いで目にした教会に入った
誰一人いない静寂そのもの
不安？　ここも？
頭上を圧するパイプオルガンの音色
高じた不安も次第に弱まっていく
突然　若い男女二人が駆け込んできた
祭壇の前で跪いて十字を切って祈った
僕は神にすがりはしなかった
祭壇へ連なる聖なる列柱が高い墓石の幻想になった
ただそれだけだ
明るい陽射しが待っていた

【理想郷】

良識ある友人たちに囲まれて毎日を暮らしていれば
僕は誰とも言い争うことはない

良い本を出版した作家たちに囲まれて
毎日を暮らしていれば　僕は誰とも言い争うことはない
もう故人になってしまったし

そして　僕の両親の位牌と　叔父・叔母の遺影に
手を合わせ　祈りの毎日を暮らしていれば
僕には感謝の情が自然と沸いてくる

来る日も来る日も争いのない　快い喜びこそ
老いゆく僕の理想郷　だけど　毎日　平気で嘘をつく
ニュースの入ってくる暮らしでは
僕の一方的な怒りに火がついてしまい　不快になる
この偽善者め　嘘ばっかりついて　恥を知れ！　と
責める相手は　非常識で偽善政治家とメディアだ
僕が老いたハムレットに変身する瞬間でもある

理想郷を望み　理想郷を壊す　ハムレットよ！
政治などは　無明世界の俗人の争い
死ぬまでおまえの理想郷を壊すつもりなのか？
老いたハムレットよ！
ハムレットよ！

【昨日　今日　明日】
昨日は僕の墓の中に葬られている
墓参りは　僕以外に　誰もいない
何も悲しむべきことではない
今日を　生きる僕なのだから

昨日　突然のこと　墓参りの思いが沸いた
なぜなら　愛しい君が　都会のあの角の花屋で
凛とした立ち姿で　僕に微笑み　僕の心を踊らせたから
それからというもの　僕は時間を失って　愛し合った
記憶が幻想にまで昇華し　僕の情感の時間に溺れたんだ
これこそ　僕の快く生きる喜びの時間
そして僕は　急に君の胸元に添い寝したくなり
大空へ羽ばたいて　落下した

そうだったんだ
君が墓に入ってしまったことを・・・

【大の男】
父は全身　真っ青になった　死神が迎えにきた
軍隊の召集令状を破り捨てたとき
３０まえにして人生の最期の土壇場
決死隊が赴く先は　南方の孤島

若い母は顔をしわくちゃにして悲しみ
泣きじゃくり苦しんだ
４５年生まれの僕は
母のお腹の中で　筋肉を固くして
母の恐怖の生の時間に溺れ　凍っていたに違いない

古里から死島に向かう海路　父は
闇の海底を這いずるようにして向かって
いった思いではなかったのか
それとも　日本が敗戦に敗戦を重ねてきた
最期の一戦であれば　死神が纏いつこうと
父は大の男だ　小我の峠をこえて大我の境地で
真っ黒い太陽に挑み向かったのだ
洋上は暗鬱たる荒波
大雲が吹き飛び大空は不安の天井そのものだ

僕の想像のノートは続く　だが肝心の頁がない

父は３０前にして死を味わい尽くし
苦痛を残した母の喜びの胸元に帰還した
だが　大いなる母の感喜も束の間　父はとうとう
病との戦いに敗れ　二人を護れずに逝ってしまった

そうか　あの頁は母が破り捨てたんだ　理由が何であれ

ある灰色の冬の日
母に連れられて古里の松原の中にある

ぽつんと小さな墓に手を合わせたことを
今でも思い出す　７５になっても・・・

【晩秋の影】
こぼれゆく秋が解放感を楽しんでいる
巣ごもりに疲れ切った都会の老若男女たちが
レストランの外の路上オープンテーブルで
なんと会食に忙しいことか
どのテーブルでもワインがこぼれ　なかには
若い女が胸の谷間から取り出した布マスクで拭いている
揺れるランプ　笑いがたえない会話が
僕の耳に快い

こぼれゆく秋が日暮れと共に侘しさを増してゆく
サイレンを鳴らした救急車が駆け付けて
若い医者がアパートに入っていった
運ばれてきたのは一人の老婆　ベッドにのせられて
恐ろしい不安　老婆の額に血を流させていた
終わることのないコロナ・パンデミックの戦場
決定的なワクチンの無い都会での武器と言えば
人間の意志による人間の正しい行為でしかない

こぼれゆく秋が明日の秋を心配している
僕たちは相変わらず食料を詰めたスーパーの紙袋を
大事に握りしめて　青いマスク姿で
舗道をジグザグ歩いている　舞い散る落葉に
希望をこめながら・・・

【現象の奥の闇】
僕は平気で嘘をつく人間に馴染めない人間だ
誰だってそうだろう？
だけど　この世には平気で大嘘に根っこから
馴染んで楽しんでいる人間どもがいる
どうしてそうなれるかって？
嘘がばれた時　理性を発揮して嘘に徹すれば

嘘をつくことなど何とも思わないという考えを
奴らの頭に　肉体にしみ込ませているんだ

昔　米国大統領が言っていたよ　人前で
誠実・無欲な人間を自負している政治家が
権力を握ったあとで　蓋をあけてみれば
莫大な財産を築いたと・・・

そんな奴が朝から晩まで尻尾を切られまいとして
平気で大嘘を叫んでいるブルーの政治家が
大統領選で戦っているんだ　そして　その背後にね
主流と言われるメディアが大偽善者を護り操っているんだ
邪悪な奴らは大偽善者を使い捨ての道具としてしか
思っていないんだよ　米国政治を見事に裂くのは
奴らなんだ　闇は深い　深いところで伝統文化に
小型原子爆弾を仕掛ける闇の頭脳が蠢いているんだ
これこそ背後の黒幕大王かもしれない

言いかい　君の生まれ持った良心と良識が
覆されることがないように
しっかりと精神の眼を開けて　現象の奥を
死に物狂いで見るように努めることだ
君の精神が恐怖で怯えあがることがないように

【冬を歩く】
みんな枯葉となって散っていく　散って行ってしまった
でも　あの一葉の枯葉　離れたくない
離れるもんかと　冬風に叫んでいる

その嫌がった顔に出会うと
僕は　わが身を見るようで　残りの道のりを
残りの道のりを　どうやって生きていくのか
どうやって

寒風が僕の胸を通り過ぎっていった

【愛】

真夏の早朝
湖面の上に真っ白い顔があらわれた
その黒い瞳は僕を見つめていた

真夏の昼間
湖面の上に真っ白い胸の丘があらわれた
僕は一輪の薔薇を突き刺した

真夏の夕べ
湖面の上に真っ白い全身の裸体があらわれた
僕はその裸身をかき回した

真夏の真夜中
満月に照らされた湖面の上に僕たちの交接が
あらわれた

愛は震え　波になって消えていった

地球を掘るように
大地を掘るように
おまえの肉体を掘る
やっとおまえが
苦しみと悲しみの続いた僕を
愛してくれた

破壊と誤算と結末

今さら嘆くこともあるまい
愛するおまえの肉体を
何度も何度も掘ったけど
おまえは毅然として去っていった
おまえが一生　切望した大地の種
授かれなかったのではない
僕が壊し流してしまったのだ

今さら今さら悲しむこともあるまい
愛するおまえの精神を
何度も何度も掘り起こしたけど
おまえの精神にへばりついていたのは
黄金の宮殿　僕は
ものをめちゃめちゃにするように
壊そうと挑んだが　おまえの
精神がこんなに強いとは　僕の
誤算だった

今さら嘆くことも悲しむこともあるまい
自分という存在の有機体を
何度も何度も掘り起こし続けてきたけど
やっと分かったよ
齢を重ねれば重ねるほど
掘っているのは　僕の
墓だってことが！

【不安の荒野】
どうやって生きよう
コロナウイルス社会不安のなかで
仮想現実への精神不安のなかで
どうやって
生きたらよいのか
全てを断ち切ることもできぬ現実
今さら実存主義にすがることも
応えにはなるまい
構造主義に頭と心を晒しても
解決にはなるまい
たとえポストモダンでさえあっても

どうやって生きよう
ポストコロナの持続的社会不安のなかで
永劫に増長する仮想現実の心の不安のなかで

うろこを鋼鉄にして

深海魚のごとく生きるか
たとえ不安がパチンコ玉のごとく
ぐるぐる駆け巡ろうが・・・

いやいやそれは駄目だ
深海魚はおまえの墓碑銘なのだから

それよりもおまえの思案で生きるんだ
あらゆる不安への犯罪者
反逆者になって！
それに死をかけて生きられるか？

【寺と仏像】

古里の川向うに小さな寺があった
母が終戦直後　入信し　歩けなくなるまで通った寺だ
母は僕を帰郷のたびに何度も導師に合わせようとしたが
僕は全て母の願いを追い払ってしまった　僕の内部には
とりつかれる宗教心の種を嫌っていたのかもしれない
それにドグマやイデオロギーの類のものが大嫌いだった

だが母には終戦直後　良人が逝ってしまったこともあって
入信の条件がそろっていたのかもしれない　貧困と孤独
苦と痛み　未だ来ない明日を　しっかりと大地につけて
道を間違えないように歩むには　救いの仏に付き添って
生かされることが必要だったのだ

今思えば　母は一生　貧しく独立心が強かった
小さな寺も母の一生と同じように　近隣の増築立派な寺と
違って　小さいままに　貧しかった
僕はその寺に感謝した　決して信者を惑わすこともなく
無欲な寺であったことを
僕は母が肌身離さず祈りを捧げていた小さな仏像に感謝した
たとえ崖っぷちを歩んでいた時にでも　母を常に仏の手が
引っ張りあげて生きさせたことに

ああ　僕は異邦に行ったまま　母をひとり　置きぼりにさせた

なんという親不孝な息子であろうか　母の願いとおりに
母の一生の間だけでも　僕が入信していれば　異邦にいようが
母の喜びと幸せはどれほど深く大きかったことだろう

除夜の鐘がなった
元旦の落日　小さな仏が迎えにきた
その時　初めて僕は心を開いていた

金澤詩人第十七号
発行日　二〇二一年一月七日
発行人　金澤詩人倶楽部　代表　近岡　礼
発行所　九二〇-〇〇三六金沢市元菊町一三-一一-二〇一
http://bach2.sakura.ne.jp
mimi.7.kei@gmail.com
非売品